January 2020
No.2020-001-a

Journal of Integrated Creative Studies

ヘーゲル『大論理学』根拠論からみた対立二極の一体運動

—「私の死」を科学との関係において問うために

福田学
新潟大学　教育学部
fukudam23@yahoo.co.jp

要旨　本稿では、私は私の死を二重の意味で経験できないということを出発点に、哲学や科学で古くから問われてきた、連続対不連続あるいは一対多といった対立二極が一致するか否か、という論点から、私の死の二重性について考察する。そのために、独自の一元論を確立したヘーゲルの主著『大論理学』に定位し、主にその根拠論を、科学研究の諸成果とつき合わせながら解釈する。その際、ヘーゲルのいう基盤を空間と読み解くことが一つの鍵となる。この解釈を私の死の考察に適用することで、私の死は、私のなかで分離しつつ結合している自己視点と外的視点とに対応して二重的となっており、「不連続的な連続」として、一つの自己回帰運動を形成している、ということを明らかにする。最終的には、死を空間生成の問題として捉えることで、私の死が、ヘーゲルのいう意味での本質として、科学も含めた諸学問の基底にある、と解釈できることを示す。

キーワード：死、科学、空間、連続と不連続、二元的一元性

Study on the dual unified movement based on the ground theory in Hegel's *Science of logic*

- To consider "my death" in relation to natural science

Manabu Fukuda
Niigata University

English Abstract: In this paper, starting at the fact that we cannot experience my death in a double sense, we consider its duality from the arguing point, which has been questioned for a long time in philosophy and natural science, of whether or not the two oppositional poles such as "continuity and discontinuity" or "One and Many" coincide. To that end, we focus on Hegel's main book *Science of logic*, which has established his original monism, and mainly interpret its ground theory, connecting it with the results of science research. A key in this interpretation is to comprehend the "basis" mentioned by Hegel as the space. By applying this interpretation to the consideration of my death, we elucidate that my death is dual, corresponding to the self and external perspectives that are unified while separating within me, and that my death, as "discontinuous continuity," forms a movement of the return-into-self. In conclusion, by understanding death as a problem of space creation, we show that my death can be interpreted as the essence that Hegel signifies, that is as the base of various studies, including natural science.

Keywords: death、natural science、space、continuity and discontinuity、dual unity

人類は、まなざしは過去に注ぎ、背中は未来に向けて、後ずさりしながら進んでいく。
―――G. フェレーロ

序章―連続と不連続の問題圏―

「もし死がすべての感覚の消失であり、夢一つさえ見ない眠りに等しいものならば、死は驚嘆すべき利得といえるであろう。というのは、思うに、もし人が夢一つさえ見ないほど熟睡した夜を選び出して、これをその生涯中の他の多くの夜や日と比較して見て、そうして熟考の後、その生涯の幾日幾夜さをこの一夜よりもさらに好くさらに快く過したかを自白しなければならないとすれば――思うに、単に普通人のみならずペルシャ大王といえども、それは他の日と夜とに比べて容易に数え得るほどしかないことを発見するであろうからである。それで死がはたしてかくの如きものであるならば、私はこれを一つの利得であるといおう。その時全時間はただの一夜よりも長くは見えまいから。」(プラトン、1964, p.57)[1]

私は、私が必ず死ぬことを知っている。だが、プラトンを介してソクラテスが語っているように、その死がすべての感覚の消失であり、「全然たる虚無に帰すること」(同,p.57)であるならば、私は私の死自体を経験することは決してできまい。私は、私の死を意識することはあっても、その死が私の中で現実のものとなることはない。私の死は私の経験を超えたところにある、といえる。一方、私が死ぬことを私が知っているのは、他者の死を通して、私も他者と同様にいつか死ぬと理解しているからである。その死は、他者の目を介した私の死である[2]。他者の死は、他者の死体に接することで最も直接的に生々しく私に理解される。その限り、他者の目を介した私の死は、私が死体となって他者に見下ろされるところの死である、といってよいだろう。私の死はこうした二重性をもっている。以下で両者の内実や関係を論じていくにあたり、前者を「意識としての私の死」、後者を「死体としての私の死」と呼ぶことにしたい[3]。

私の死の二重性は、実のところ、私というもの自体の成立とも密接に関わっている。私が死ぬ、ということが私に本当に理解されるのは、この私がいわば世界・宇宙の中心であり、死ねばすべては終わることと、この私が死んでも世界・宇宙はあり続けることとの二重性

---

[1] 訳者の久保勉は引用最後の一文の「全時間」を「永遠」と訳出しているが、以下の諸訳書を参考に訳し変えた（三嶋輝夫・田中享英訳『ソクラテスの弁明・クリトン』、講談社、1998、納富信留訳『ソクラテスの弁明』、光文社、2012、朴一功・西尾浩二訳『エウテュプロン・ソクラテスの弁明・クリトン』、京都大学学術出版会、2017、Cousin, V.による仏語訳 *Apologie de Socrate, Suivi de Criton et Euthyphron*, Librio, 2004）。また、引用冒頭の「死」は訳書では「それ」と訳されている。その他の部分は久保訳のままである。

[2] 他者の死と私の死の理解に関する発達論的考察は、5 章で行う。

[3] この二つの用語は、終章において正確に規定されるようになることを予め述べておきたい。後者に「死体」という言葉を使うことについては、この後の補遺も参照。

が、一体的に理解されることによってである。「私」という言葉はここにいるこの私を指しているのと同時に、向かいにいるあなたや、かなたにいる彼ら彼女ら、さらには、世界各地の会うことのない無数の誰かや、いまだ誕生していない人々さえも指している。このことが理解された時に、真の意味で私が成立する[4]。私はこの私だけであるが、誰もが私である、という理解は、この私が死んでも他の私は生き続け、この私の死を経験できる、という理解と、表裏一体である。こうした理解を基礎として、自己視点と他者視点とが私の中に同期的に誕生することとなる[5]。

我々は、一方では他者視点、例えば死体解剖に基づく医者の視点に立って、脳・心臓・胃・腸など身体を構成する諸部分に分解して、私を理解している。他方では、この他者視点を自己視点に置き換え[6]、自己意識によって部分の集合を全体として、あるいは一つのものとして再構成している。他者視点に立ってなされる部分化は、不連続化であり対象化であるが、全体の再構成は、私という一つのものの連続性を確立することである[7]。

長い哲学史を通じてのアポリアは、こうした、連続対不連続、一対多、全体対部分、といったもの同士の対立関係が、真に再結合されるか否か、ということである。死というテーマに関していえば、既に古代哲学において、哲学を「死の練習」とみなしたプラトン的な態度と、私の死が経験不可能である限り、死は恐れるに値しないとするエピクロス的な態度とが、連続対不連続の構図を形成している、とみることができる。すなわち、前者は、生から死へと連続する「魂」を前提に、死にできるだけ近く生きることを哲学の使命とみなしているのに対し、後者は、生と死とが完全に相互排他的であることを前提に、死に対する正しい向かい方を追求している、と理解することができる[8]。

---

[4] この理解を共有していない一部の自閉症者は、私が相手から「あなた」と呼ばれるがゆえに、私を「あなた」と言う場合がある。自閉症研究はこのことを、「他人の発話を『反響』(echo)する」(ホブソン、2000,p.150)、と表現する。自閉症者においては、「反響的な発話でない場合でも、人称代名詞が誤って使われる可能性」があり、「自分のことを『彼』と呼ぶなど、“三人称”で自分のことを言い表す場合があるし、普通だったら一人称の能動文で言うところを、受け身文を使ったりすることもある」(同,p.150)。また、よく知られているように、ごく幼い者は「私」という言葉を使わず、親をはじめとする周囲に「○○」と呼ばれるがゆえに私を「○○」と呼ぶ。私というものの成立過程に関する発達心理学研究としては、例えば次の著書を参照。Cf.,Piaget et Inhelder, 1966。

[5] 両視点の誕生と確立、およびその関係については、5 章で発達論の見地からもう少し詳しく考察する。

[6] 註 5 参照。

[7] 私という「一つのもの」の連続性は、我々にとって決してアプリオリではない。例えば、生後約 6 ヶ月超の幼児には、私の手と、私の手の近くにある手袋との区別が簡単には付かない、といわれている。Cf.,Merleau-Ponty, 1962,p.29。幼児は、自らの身体を意志通りに何度も動かしたり、それをつねったり叩いたりすることで起きる内部感覚を一つの手がかりに、私を一つのものとして徐々に確立していく、といえる。

[8] プラトンは『パイドン』において、「正しく哲学している人々は死ぬことの練習をしているのだ」と、あるいは、「〔哲学者は〕人生において、できるだけ死んでいることの近くで生きようと自分自身を準備してきた人」である、などとソクラテスに語らせている(プラトン、1998,p.38)。一方、エピクロスは、次のように述べている。「死はわれわれにとって何ものでもない、と考えることに慣れるべきである。というのは、善いものと悪いものはすべて感覚に属するが、死は感覚の欠如だからである。……死は、もろもろの悪いもののうちで最も恐ろしいものとされているが、じつはわれわれにとって何ものでもないのである。なぜかといえば、われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである。……生きているもの

補遺[9]

死に対するこうした態度の違いは、古代哲学で既に顕在的となっていた科学的視点――エピクロスの原子論的唯物論はそれを示す一つといえる――と密接に関わるものであり、むしろその視点から翻ってみることで、その違いはより明確に定式化されうるであろう[10]。これを行うには科学史に基づく論考が本来必要であるが、ごく簡単に図式的に述べておくなら、医学、生理学、生物学などの進展に応じて、西洋では古来から行われてきた解剖に伴う視点が強化され、死はますますその視点の元で捉えられる死体としての意味を明確にしていく一方で、死は肉体とは切り離されうる「魂」の次元の問題として、宗教や芸術や哲学などの伝統を引き受けながら追求されるようになる、と整理することができるだろう。換言すれば、他者視点が明らかにする死と、いわゆる内的な問題としての死との二重性が、学術史の進展につれて明確になっていく、ということである。近代哲学では、S.A.キルケゴールらを祖とするいわゆる実存主義・実存哲学において、「私の死」に関する一連の豊かな論考がなされてきたが、実のところ、科学が問題にするのとは異なる側面を追求しているはずのその諸論考のなかにも、死に対する対立する態度を見て取ることができる。この見取りが正当であるならば、死の二重性を私の死にも認めることができる、ということになるはずである。このことを明示するには、諸論考の内容に即した解釈を積み重ねなければならないが、ここでは、『存在と無』(1943)における J.-P.サルトルのハイデガー批判を一例に、その一端を示しておきたい。サルトルは、「死へと関わる存在(Sein zum Tode)」(Sartre, 1976, p.577, cf.,Heidegger, 1986,p.289)[11]という言葉で知られる『存在と時間』(1927)における死の考察を、徹底的に批判している。M.ハイデガーは、私の死について例えば次のように述べている。「いかなる者も、他者からその者の死を免除することはできない。誰かが『ある者の身代わりに死に赴く』ことは確かにできる。‥‥‥しかし、こうした、誰かの身代わりに死ぬことは、他者が死から免除されることを決していささかも引き起こしえない。‥‥‥死は、それが『存在する』限り、その本質において、そのつど私のものである」(Heidegger, 1986,pp.293-294)[12]。こうした論述を受けてサルトルは、「死は一人の人間

のところには、死は現に存しない」(エピクロス、1959,pp.67-68)。なお、両者の対立は、連続対不連続という構図に位置づけることで浮き彫りになるものであり、死を恐れる態度が哲学者に相応しくないと共に考えているように、両者の死生観には極めて近いところがある点には注意が必要である。

[9] 本稿では、本文の内容を本文とは幾分異なる角度から補足する文章を、「補遺」として本文に組み込んだ仕方で示す。その部分は段落を下げることで、本文との違いを明示する。

[10] 科学という営みをそもそもどのように規定するか、という自然哲学の解釈にも関わる問題について、本稿では明示的に論じることができていない。以下に述べるように、本稿はヘーゲル論理学の本質論に定位して科学を視座に収めた考察を展開していくが、本稿が捉えている科学は、科学者が通常捉える科学や、科学哲学のいわゆる本流が捉えている科学とは、時に意味するものが異なっている可能性がある。この「ずれ」をふまえながら、科学という営みを明確に規定することは、稿を改めて論じるべき重要問題である。

[11] 「死へと関わる存在」の仏訳語は「être vers la mort」だが、サルトルは独語原語のまま用いている。

[12] 本稿全体に関わる引用の際の記号についてここで述べておきたい。‥‥‥は引用の省略箇所を、〔　〕は引用者による補足を示す。丸括弧は邦訳語に該当する独・仏・英語を示す場合に使用するが、それ以外の丸括弧は原

の、一人の個人の死であり、『誰も私に代わってなすことのできない唯一のもの』である」(Sartre, 1976,p.578)、とハイデガーの主張をまとめたうえで、その主張は私の死にのみ該当するものではなく、例えば、私の「愛も、最もありきたりなものであっても、死と同様に代替不能な唯一独自のものであり、何人も私に変わって愛することはできない」(ibid.,p.579)と主張することができる、とする。「一言でいって、私の死に固有であるような人間構成力(vertu personnalisante)など全くない。むしろ反対に、死は、主観性のパースペクティブのなかに私が既に位置づいている場合にのみ、私の死となるのである」(ibid.,p.579)。つまり、私が私の死を作るのであり、その反対ではない、ということである。「死は、人生にその意味を与えるところのものでは決してない。反対に、死は原理的に、人生からそのすべての意味を剥ぎ取るものである」(ibid.,p.584)。このようにいうサルトルが死に関して注目しているのは、いつやってくるか分からない、といういわゆる不意打ち的なその性格である。「我々はハイデガーに反して、死は、私の固有な可能性であるどころか、一つの偶然的な事実(un fait contingent)である、と結論しなければならない」(ibid.,p.590)。サルトルのこうした論述が、ハイデガーの、「死は存在論的に、そのつど私のものであること(être-chaque-fois-à-moi)と、実存(existence)とによって、構成されているものである」(Heidegger, 1986,p.294)、といった論述と鋭く対立しているのは明らかであろう。サルトルの批判が『存在と時間』の論考に即したものとなっているかはともかくとして、この補遺で先に述べたこととの関連で理解しておくべきは、彼のハイデガー批判は――おそらく彼自身の意図を超えて――、私の死の二重性を浮き彫りにするものとなっている、ということである。サルトルは例えば次のようにいっている。「死ぬとは、もはや他者によってしか存在し(exister)ないように宣告されることである」(Sartre, 1976,p.588-589)。サルトルにとって、私の死は、他者に捉えられる死であり、しかも、解剖学者のまなざしが典型となるような、対象を射抜き、すべてを露わにせんばかりに冷徹に観察するまなざしによって捉えられる死のことである。彼のこうした死観は、次の文章に明瞭に示されている。「死の存在(existence)そのものは、我々自身の人生において、他者の利益のために、我々を全面的に放擲(aliéner)せしめることである。死んでいること(être mort)、それは生者たちの餌食であることである。したがって、自らの未来の死の意味を把握しようと試みる者は、他者たちの未来の餌食として己を見出さなければならない、ということになる」(ibid.,p.588)。「死の事実は他者の観点に最終的な勝利を与える」(ibid.,p.588)とまでいうように、サルトルにとっては、他者視点から捉えられる私の死だけが私の死であり、他者視点によって捕捉されるものとしてのみ、私の死の意味は私に与えられることになる。本稿の論点に引き付けていうなら、彼が問題にしているのは、まさに「死体としての私の死」であり、作家でもある彼の鋭い筆致はその内実を見事に描き出している、ということができるだろう。サルトルは、私が経験できないものとしての私の死をハイデガーと共に問題にしつつ、その一方の側面である「意識としての私の死」を後景に退かせてハイデガーとの違いを際立たせ、「死体としての私の死」のみを私の死そのものと捉えることで、己独自の死の哲学を打ちたてようとした、といえるのではないだろうか。そうであるならば、サルトルのハイ

文のままである。その他の記号および「ルビ」も、すべて原文のままである。ただし、イタリック体や傍点などによる原文の強調は、原文の文脈において意味をもつものとみなし、本稿の引用には反映させていない。

デガー批判は、そもそも私の死が二重性から成立しているからこそ成立しうるものである、ということになる。

こうした連続・不連続の問題は、狭義の哲学史上の対立を超えて、学術諸領域を貫く根本問題となっている。演繹的な視点と帰納的な視点とが一致するか否か、という科学研究の古典的な問題は、その典型である。科学者たちは一方で、実験によりデータを積み上げ、多なるデータを貫く法則を探し出そうとする。他方で、この法則から出発して諸事象を説明できるかどうかを吟味し、多なる諸事象が一なる法則に収束するか否かを問い質している。その際、収束するとみなすか否か、あるいは収束すべきとみなすか否かで、科学者のスタンスは全く異なったものとなるだろう。この例が典型となるような連続と不連続の対立は、科学研究の基底を解きがたく流れ続けており、その発展史の形成そのものに与っている、とさえいえる。L.ドゥ･ブロイは、物理学における事情を以下のように端的に物語っている。

「物理学においても、人間知識のあらゆる部分におけるごとく、連続と不連続との問題はずっと昔から提出されていた。ここにおいても人間の理知は相敵すると同時に相補う二つの傾向を示した。一つは、現象の複雑性を単純な不可分な数え尽し得る要素の存在に帰し、実在を分析してこれを埃のような無数の個体に還元しようと試みる傾向であり、もう一つは、我々のもつ空間及び時間の直感的概念から思いつき、いたる処に見られる事物の相互作用を見きわめて、すべて自然現象の流動の中からはっきり限界のついた個体を切り抜く試みを悉く技巧的と見なす傾向である。連続的見解とこれに反する見解との闘争は、物理学においても数世紀にわたって続けられて来たが、その勝負はさまざまであって、各々が次々に成功を収めて、いずれも他を全く打ち破るには到らなかった。このことは、毫も哲学者を驚かすにはあたらない。現に思想活動のあらゆる領域におけるさまざまな学説の進化は、連続及び不連続の概念も、極端に推し進められて互いに対立した場合には、実在を表現する力がなく、実在は常にこの対立の二つの項の微妙な殆ど定義の出来ない融合を要求しているということを哲学者に示しているからである。」(ドゥ･ブロイ、1972, p.225)

冒頭に示したソクラテスの言葉と、20 世紀の傑出した物理学者の言葉とは、一見何の関係もないようにみえる。しかし、死刑に処され自ら毒杯を仰ぐ直前に、私の死がもついわゆる否定的な側面を否定してみせることで、ソクラテスは、不連続な生と死を連続させうる一種の二重否定を提起している、といえる[13]。このようにみるならば、連続・不連続という「対立の二つの項の微妙な殆ど定義の出来ない融合」が、後世の、高度に発展した科学も含む学術研究に厳しく要求されるようになる、という事実を、ソクラテスなら確かに「毫も」驚かずに受け止めるに違いない。実際、「全時間はただの一夜よりも長くは見えまい」、という彼の言葉は、後に明らかにするように、科学研究でも実は問題となっている、‘でない’と‘である’の関係を照らし出すものとなっている[14]。

本稿では、死に対する二つの対立する態度を統合しうる道筋を切り拓き、このことにより、連続と不連続、全体と部分との一致を論理学的に明らかにするための一つの手がかりを

[13] ソクラテスのディアレクティケーの本質を示す命題として人口に膾炙している「無知の知」ないし「無知の自覚」も、二重否定の一例とみなすことができよう。

[14] ドゥ･ブロイは、物理学における連続･不連続の問題が、エレアのゼノンによって提起された哲学の古典的問い「ゼノンのパラドックス」を受け継ぐものとみなせることにも論及している。Cf.,ドゥ･ブロイ、1972,pp.268-270。

得ることにしたい。そのためには、一見対極にある二つの立場――例えば「文系」と「理系」といったように――を往還させ、統合させようとしているダイナミックな思考が[15]、本稿の定点として求められることになる。そこで、ソクラテスが重んじた、異なる立場間の問答・対話(dialogos)による哲学を、独自の弁証法(Dialektik, dialectique)に発展させた G.W.F.ヘーゲルの主著『論理学』（1812-1816、以下通称に倣い『大論理学』と呼ぶ）を取り上げ[16]、主にその根拠論を、連続・不連続の観点から二元的一元論として理解することを本稿の研究目的とする[17]。この目的を果すうえで、科学の諸研究をヘーゲルの論理展開に適宜位置づけ解釈していくことを重要な課題とする。

本稿は、ヘーゲルの著書の中で専ら『大論理学』に基づくことにして、それに接続する初期の著書『精神現象学』(1807)や、ヘーゲル哲学の綱要を示した『エンチュクロペディー』(1830)内の「精神哲学」、「自然哲学」は、本稿に関わる部分を含んでいるが今回は考察の対象外とし、これらも交えた考察については今後の課題とする[18]。

---

[15] この往還と統合に関し、本稿の試みの導きとなる、「理系」の側から提示された先駆的業績として、村瀬雅俊の『歴史としての生命』(2000)を挙げておきたい。同書で村瀬は、遺伝学、発生学、免疫学、進化論などの生命科学諸領域で獲得されてきた膨大な知見を、H. ベルクソン(西洋哲学)、西田幾多郎(東洋哲学)、A. トインビー(歴史学)、J. ピアジェ(発達心理学)、といった、「文系」諸学を代表する研究者の思考と内的に往還させることで、「生き生きとした生命の本質」を、それを理解する認識も含めた「一つの全体として理解できるように描きだして」いる(村瀬、2000,p.viii)。連続と不連続の統合に関する一つの解答でもある同書は、理系と文系とを単に行き来するにとどまらず、生命論の基盤に認識論を置く必要性を、理系諸学の成果を介して明確に打ち出している。この点で、この後明らかにする、意識を否定性の運動の一つと捉える本稿の導きともなっている。なお、認識と意識との差異と同一性は、科学と哲学との差異と同一性にも関わる重要な論題だが、それについて論じるのは今後の課題とする。筆者は同書を主題として、そこに描き出された問題圏を哲学の立場からいかに受け止め、発展させるべきかを、『大論理学』に基づき次の論文で論じている。Cf.,福田、2017。

[16] 『大論理学』の読解においては、P.-J.ラバリエールと G.ヤーチィックによる仏訳書 *Science de la logique*(1972, 1976)を終始活用し、その詳細を極める注釈から多大な恩恵を受けていることをここに明記しておきたい。そのため、『大論理学』からの引用指示に際しては、独語原典の頁数の後に仏訳書の頁数も併記することにする。本稿では、日本語に該当する独語、仏語、英語を必要に応じて丸括弧内に表記する。独語と仏語を併記する場合にはこの順番で表記する。なお、『大論理学』第一巻第一書の有論には、1812 年刊行の「初版」と 1832 年刊行の「第二版」があるが、1813 年刊行の本質論との連続性を重視して、本稿では「初版」を使用する。

[17] 連続と不連続は、『大論理学』では有論において、量の二契機として論じられている。本稿では本質論に定位して考察を進め、近年の科学の諸研究とヘーゲルとの密接な関連を明確にすることに専念し、本稿と有論における連続・不連続の論述との関連について論じることは、今後の課題とする。

[18] 本稿では、科学との関係において死をいかに考えなければならないかを、ヘーゲル論理学の基本をふまえて明らかにする、という目的に限定して考察を進め、ヘーゲル哲学全体に位置づけたテーマとして死を論じることは、この目的を果したうえで取り組むべき課題とする。そのため、ヘーゲル自身が死をいかに論じているかについては本稿では一切言及しない。『大論理学』概念論における生命論の考察をはじめ、本稿には多くの課題が残されていることをここに明記しておきたい。

1. ペアの論理

1. 1. 対立関係

我々の身体では毎日約 3000 億から 4000 億個もの細胞が死んでおり、そのことで身体全体の約 200 分の 1 の細胞が日々入れ替わっている、とされる(cf.,田沼、2008,p.198)。この知見に基づくと、我々の身体では細胞の次元で死と生という対立関係があり、この対立関係のおかげで、一つの身体の生命が維持されている、ということになる。我々は身体において、死と生との対立の統合をいわば事実上果している、といえるわけだ。

ところで、そもそも対立とは何だろうか。自他の対立の論理構造を、まずは一般的な仕方で押さえておこう。

向かい合っている私と他者との対立関係において、私の右は他者の左、私の左は他者の右である。戦争のような対立関係では、私の生は他者の死、他者の生は私の死を意味する。生物の世界はこうした対立関係に満ちている。‘喰い-喰われる’の関係がその典型であるが、或る一定面積に植物が生い茂っている場合、それが枯れることでしか新たな植物はそこに生えてくることができない、といったことも、その一例である。

子が生まれて親がやがて死ぬ、ということも、この関係の一例とみなすことができる。この点で、親の死と子の生は対立関係にある。換言すれば、親の死は子の誕生によって充当され、その子の死もまたその子の子の誕生によって充当され、この対立関係によって、連綿と人類の生命は受け継がれていく。いわゆる第三者視点に立ってみると、私の死は、子という私にとっての他者と対立する仕方で他者の誕生とつながっている、ということがみえてくる。

なお、「第三者視点」は、ヘーゲル論理学ではジンテーゼに関わる重要な問題であり、科学研究と密接につながる問題でもあるが、この点については 4 章で論じることにする。

1. 2. ‘でない’と‘である’

こうした対立関係は、「意識としての私の死」と「死体としての私の死」の関係とどのように関わっているのだろうか。

私の意識において私の死は、生きているうちに経験できないという意味で、生の限界でありリミットである。ヘーゲル論理学の重要概念であるリミットについては 2 章で論じるが、一般的にいって、それは何か‘である’ものの限界として大きさをもたず、大きさをもつもの‘でない’ゆえにリミットである。リミットがそれ自体として立ち現れることは、それが何かから分離して大きさを帯びることを意味する。ヘーゲル自身が挙げている例を援用すると(vgl.,Hegel, 1999a,S.77; cf.,1972,p.98)、立方体の面は、立方体のリミットとしては大きさを帯びず、立方体から独立した面という立方体の‘他’になることで、大きさを帯びそれとして立ち現れることになる。つまり、何か‘ではない’リミットが、‘他である’に転換している。このことは、面と線、線と点との関係についても該当する(cf.,福田、2017,p.86)。

これと相似的に、リミットとしての「意識としての私の死」は、それ自体はいわば透明な空のようなものであり、全くの‘ではない’である。そもそも意識は、厳密には決して対象化されえない。意識についての詳しい考察は別稿に譲るとして[19]、ここで押さえておくべき

[19] 筆者はサルトルに基づき、意識の運動について次の論文で考察している。Cf.,福田、2013。

は、意識は、‘である’ところに‘ではない’を分泌していく否定の運動であること、例えば、A は B‘ではない’、B は C‘ではない’・・・という仕方で諸事物を捉えていく運動である、ということである[20]。そうした運動をそのまま対象化しようとどれほど努めても、‘である’に転化した‘でない’としての意識しか見出すことができない。換言すれば、意識が‘でない’という否定の運動であることは、それが ‘である’と結びつくことで、はじめて理解されることになる。序で論じた私の死の二重性は、このことと密接に関わっている。すなわち、「意識としての私の死」は、純粋な‘ではない’で、それ自体としては捉えることができず、‘である’との合体によりはじめて顕在化されると同時に、その裏面に大きさを帯びた物体=死体(corps)としての私の死が立ち現れることになる[21]。

ここではいまだ、‘でない’や‘である’といった用語が曖昧でしかないが、少なくとも、「意識としての私の死」と「死体としての私の死」との関係の基底には、‘でない’と‘である’との関係がある、ということは以上の考察からみえてくるであろう。

‘でない’のないところに‘である’はなく、‘である’のないところに‘でない’はない。‘でない’無は‘である’有と結合してはじめて無である。無と有は、分離しつつ結合するという仕方でペア・対をなしている。ヘーゲル論理学のこの基本命題については 2 章で詳論する[22]。

補遺

サルトルは、ヘーゲルからの大きな影響の元に執筆した『存在と無』において、事物と意識とを異なる存在様式に峻別し、意識を、「それではないところのものであり、それであるところのものではないという存在(être qui est ce qu’il n’est pas et qui n’est pas ce qu’il est)」と規定する一方、事物を、「それはそれであるところのものである存在(l’être est ce qu’il est)」、と規定している(Sartre, 1976,pp.95-98)。サルトルは、『大論理学』の随所でなされている、‘である’と‘ではない’とが対になった表現を踏襲してこうした規定を行った、と考えられるが、ヘーゲルの立場にたつなら、意識に限らずあらゆるものが、「それではないところのものであり、それであるところのものではない」、ということになる。ヘーゲルとサルトルとの際立った違いは、後者が意識にのみ該当するとした様式を、前者は「物体」も含めたあらゆるものに見て取っていることである。意識と事物、精神と物体とを二分する二元論者と異なり、すべてが‘ではない’という否定を内に抱えている、というのが、徹底的な一元論を確立しようとしたヘーゲルの見方である。この点については 2 章以降で詳論するが、ヘーゲルの一元論は二元的一元論であり、意識を事物に、ないし事物を意識に回収するような一元論とは全く異なることに留意しておきたい。なお、ヘーゲルとサルトルとの違いは、Sein と être という、どちらも「存在」と訳されることの多い言葉の使い方にも認めることができる。ヘーゲルの場合、Sein は「有」と訳すのが適切な場合が多い。この点についても後に言及する。

---

[20] このことは、サルトルの『存在と無』に明晰かつ具体的に表現されている。なお、サルトル現象学とヘーゲル論理学との重要な違いについては、この後の補遺で述べる。

[21] フランス語の corps は、「物体」と「身体」および「死体」を意味する。このことは、ここでの議論と関連して非常に示唆的である。

[22] 論理の展開につれ、このペアを「つなぐ」ものが問題となる。それはさしあたり第三者視点であるが、やがて媒介となる。このことについては 4 章で詳論する。

‘でない’と‘である’とのペアを背景とすることで、すべてのものがペアをなすことになる。すなわち、自と他、不知と知、精神と肉体、ネガティブとポジティブ、理想と現実、内と外、連続と不連続、全体と部分、等々、いずれも一方なくして他方はなく、いわゆるそれ単体としてあることはできない。いかなるものも、自己と相対するものと対立をなしかつそれとペアをなしている。

自他の対立構造として上で検討した諸例も、このペア・対の論理の具体的展開に他ならない。例えば生と死との関係であれば、既にみたように、親の死は子の生につながり、その子の死はその子の子の生につながっている。こうした死と生という出来事を全体的にみるなら、それを連綿と続いていく生命の運動とみることができる。この運動に定位してみると、いわゆる「類」という全体が個の生死の関係を内包していることがみえてくる。

女と男の性的関係と呼ばれているものも、生物学的にみるなら、生死の循環運動に基づくメスとオスの生殖関係である。メスのないところにオスはなく、オスのないところにメスはない。メスを循環運動の出発点とするなら、メスは、新たな生命を宿すために、オス‘ではない’メスとして、メスにとっての他であるオスに向かっていき、それとの交合を経て自に戻る。メスを媒介点とするオスを出発=帰着点としても、関係は同じことである。つまり、メスとかオスといっても、それは生命の関係運動が生み出した「極」であり、直接的に存在する(existieren, exister)ものではない。

生命は関係運動であり[23]、生殖もその運動の一つである。このことを端的に示していると解釈できる事象に、オートガミー(autogamy)がある。オートガミーは原生生物にみられる生殖方法の一つであるが、オス・メスという異なる性が合体する我々に馴染みの方法とは異なり、二分裂などによって生じた同一核の細胞が再び合体する生殖方法である(cf.,高木、2014,pp.55-58)。その生殖においては、一つのものが二極に分かれ、それらが再び合体することで新たな生命が生み出されている、とみることができる。オートガミーを手がかりに寿命や有性生殖の起源に迫ろうとしている生物学者がいることからしても(cf.,同,pp.73-118)、生命が分離と結合による関係運動であることを、この生殖方法に読み取ることができるであろう。生命の関係運動については、5 章で生物学に基づき、オートガミーにも再び論及しながら考察したい。

本章の最初に記した、我々の身体では 3000～4000 億個もの細胞の生死が毎日入れ替わっている、という事実も、我々の生命が関係運動に支えられていること、より正確には、関係運動そのものであることを、端的に示すものといえるだろう。観点を変えるなら、4000 億個の細胞の一つ一つと、この私とは、「人類」という場か、「一個の人間」という場かが異なるだけで、生命をあらしめる運動の一点としてはなんらの違いももっておらず、それぞれの場で関係がいわば激しく運動している、と理解することができる。

[23] 関係とは力、例えば「生命力」である。この点を明らかにするのは今後の重要な課題の一つである。

2. ヘーゲル論理学への接続—有論から反射論へ—

1 章で論じたことを、ヘーゲル論理学に即して、論理そのものの問題として捉え直すことにしたい。そのために、『大論理学』の論理展開を科学研究と往還させながら読み解いていく。ヘーゲルが描く論理展開を尊重しつつ、時に彼自身の論述を超えて考察する場合もある。その場合にはそのつど言及する。

『大論理学』は、第一巻第一書「有(Das Sein, L'être)」、第一巻第二書「本質論(Die Lehre vom Wesen, La doctrine de l'essence)」、第二巻「概念論(Die Lehre vom Begriff, La doctrine du concept)」、の三部構成となっている[24]。序章で述べたように、本稿では本質論で展開される根拠論を中心に検討するが、そのためには、そこまでの『大論理学』の内容を把握しておく必要がある。そこで、根拠論を導入するのに必要な最小限に絞り、本章 1 で有論について、２で根拠が取り上げられる前までの本質論について、それぞれの内容の要約的な紹介と検討を行う。ヘーゲル論理学を要約することは極めて困難であるが、後の議論との関連づけと、論述の具体化をできるだけ心がけて、この課題を果すことにしたい。

2. 1. 直接態

ヘーゲル論理学の有論が論じる直接態(Unmittelbarkeit, immédiateté)は、一言でいって、事態が我々に直接的に(unmittelbar, immédiatement)示される姿であり、空間的に併置されたもの同士の移り行き(übergehen, passer)を本性とする、いわゆる客観的な世界のことである。それは、外的視点の元で展開される世界のことである、ともいえる。なお、ここでいう「外的」がいかなる意味をもつかは、3 章と 4 章の考察をまって示されることになる。

有論の論述は、‘で有る(sein, être)’と‘で無い(nicht sein, ne pas être)’から始められているが、既に述べたように、‘で有る’のないところに‘で無い’はなく、‘で無い’のないところに‘で有る’はない以上、直接態は両者の結合から開始される。

注意すべきは、Sein, être は「存在」, Nichts, néant は「無」と通常訳されるが、ヘーゲルがいう Sein は、繋辞・コプラの‘である’という意味を強く帯び、同一的・等しい、と理解するのが適切な場合が多い、ということである。否定詞 nicht の名詞形である Nichts もまた、‘で有る’の否定として‘同じでは無い’の意味で用いられることが多く、その限り、いわゆる「何もない」無ではなく、むしろこの後述べるように、リミットや規定の核心をなしている。

‘で有る’と‘で無い’の結合は、成(Werden, devenir)で、‘で有るところのものでは無い’・‘で無いところのもので有る’、となる[25]。本質論を先取りしていえば、これは運動・変化を言い表したものである。‘で無い’否定は、ついで、或るもの(Etwas, quelque-chose)のリミット(Grenze, limite)となり、それが規定(Bestimmung, détermination)ともなる。

ヘーゲルは規定を、‘で有るところのものでは無いもの’と、つまり、或るもののリミット・限界と捉えている。規定は、あらゆる個々のものを他のものから区別する。或るもの

[24] 1812 年発刊の初版では、第一巻第一書のタイトルは「有論」ではなく「有」となっている。なお、ヘーゲルは、第一巻を「客観的論理学」、第二巻を「主観的論理学」と呼んでいる。

[25] 1 章の補遺で述べたように、サルトルはこの運動を意識にのみ認めており、ここに、彼とヘーゲルとの決定的な違いを見て取ることができる。

は、別の或るものでは無く、その別の或るものは、そのまた別の或るものでは無い、という仕方で規定されている。リミットが‘で有る’と合体し、いわば安定的に規定されるようになった‘で有る’を、ヘーゲルは定有(Dasein, être-là)と呼ぶ。規定は質(Qualität, qualité)の構成因である。例えば、赤は黄では無い、黄は緑では無い、緑は青では無い、等々に共通の‘無い’が、質を構成している。この‘無い’には大きさがなく、これに応じて、質にも大きさがない。したがって、質的な違い・差異性(Unterschied, différence)は、存在(Existenz, existence)の水準には現れてこない。質は、赤いもの、緑色のもの、などと存在の水準で捉えられる特性(Eigenschaft, propriété)とは明確に区別される。本稿では検討することができないが、存在は本質論の術語であり、有(Sein, être)や定有のことではない、という点に注意したい。

或るもののリミット、すなわち‘で有るところのものでは無い’は、他(Andere, autre)となる。例えば、色の名称の習得において、「これは赤い」という理解から、「あれは赤く無い」という否定形が生じ、やがて「あれは黄色で有る」という肯定形に至る。こうした否定から肯定への転換は、音声の識別、文字の識別，味の識別等々にも該当するだろう。例えばソムリエは、普通の人の味覚にとっては同じ味でしかないものに、或る味‘では無い’味をかぎ分ける訓練を積み重ねていくことで、最終的には極めて多種類の味を識別できるようになる、といえる。

本質の水準に踏み込むことになるが、質を無数に生み出すこうした‘で無い’の運動は、物質や粒子といったものにも同様に見て取ることができることを、先取り的に述べておこう。例えば細胞という「物質」の分裂・増殖は、この運動を典型的に示すもので、受精卵というただ一つの細胞に、リミット=‘で無い’が出現して分裂し、二つの細胞という‘で有る’に転じて増殖する。このプロセスが無数に近く継続し、人の場合であれば約 60 兆もの細胞となるに至る。しかも、癌化した細胞などは、原理的には無限の分裂・増殖能力を獲得することになる。だが、この間、分裂する‘で無い’の運動それ自体は一つのものにとどまっている。これと同様のことは、物質を構成している粒子についてもいえるだろう。例えば、電子・陽子・中性子を、一つの関係が生み出す諸項として理解することができる。項と項とを生み出す違い・差異性は、違い自体としては一つのもので、複数ではない。先に述べたように、規定は、リミットつまり否定で、‘でない’の運動である。運動・変化の論理として、否定は原理的にはどこまでも繰り延べられうる限り、ある与件、例えばある粒子から出発して‘でない’を絶えず繰り返すことができる。この原理があるため、科学者による新たな粒子の「発見」――‘で無い’の他への転化――は、決して終局を迎えることなく、さらなる「発見」へと導かれていくことになる。この粒子間関係については、3 章と 4 章で詳論することにしよう。

質の水準に戻っていうなら、例えば色や音階やワインの味の多様性も、分裂・増殖の法則に従っており、‘A で有る’から出発して、‘A では無い’、‘A では無いところのもので有る’、‘B で有る’、となり、以下同様のプロセスが原理的には無限に続いていく。このように、無限に進行する‘で無い’の運動は、その都度‘で有る’に転じ、他の無限進行として表される。だがそれと共に、その他――換言すれば否定運動の外部――は運動の内部・自に置き換えられて、つまり揚棄(aufheben, sursumer)されて、対自(für sich, pour soi)となり、無限進行の果てで‘一’(das Eine, le Un)に収束する。この‘一’には無限(Unendliche, infini)が含まれている。ヘーゲルにとって、‘一’は，他ないし外に対して 、‘では無い・では

無い・・・’というように否定的に関係しているものであり、まさに対−自が形成するところのものである。そして、他は自に置き換えられ、回帰する他で有る限り、この関係は、純粋に否定的な自己関係であり、揚棄を繰り返す行為である。対自は、自の否定である他ないし外部に向けて、‘では無い’を連発し、それを否定する主体として、つまり、否定の否定という二重否定によって成立している。

学術史上の難題である無限に関する論理を本稿なりに少しでも具体的に捉えるため、ここで、無限を０と１の間の点の数として表した図を挙げておく。

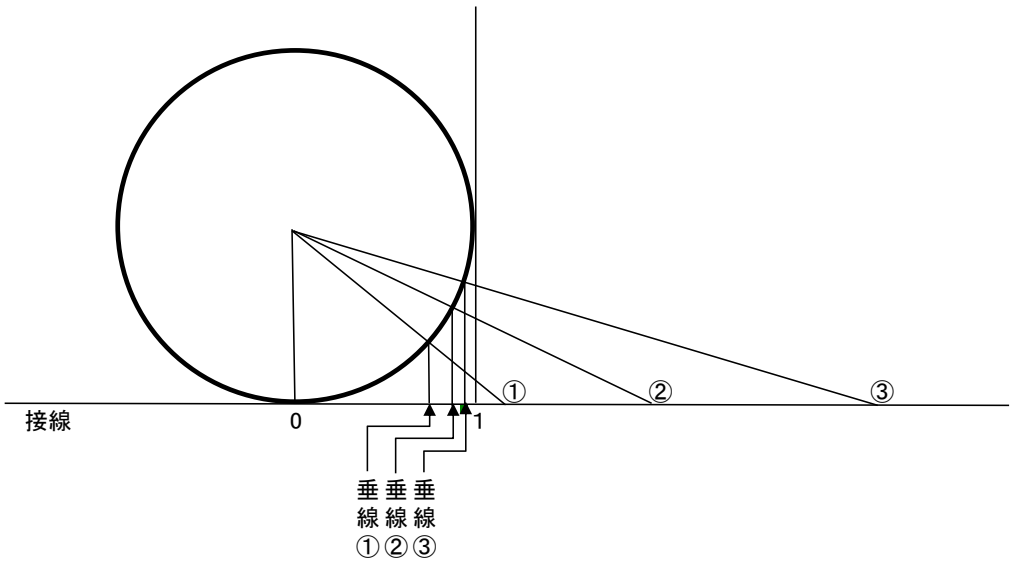

図１　０と１の間の無限

円の中心から右方向の接線に向けて、①、②、③・・・と、近傍から最果てへと放射していく線を無数に描くことができるが、それらを円周に沿って垂線として接線に下ろせば、その足を①、②、③・・・といったように、０と１の間の無数の点として捉えることができる。円の中心は、そこから出発していく――あるいはそこへと帰着していく――無数の放射線の中心=ゼロ点である[26]。

中心ゼロから出発した無数の運動が出発点に回帰し、‘一’に収束することを、ヘーゲルに倣って「真無限(wahrhafte Unendliche, infini véritable)」と呼ぶことにしよう。出発=帰着点は無限が収束している中心である。いかなる無限数も単位数としては一つの数である、ということも、‘一’への無限の収束の具体例とみることができる。それに対し、運動が或る地点のその先・そのまた先・・・ととどまるところを知らずに続いていき、無限が収束しないことを、やはりヘーゲルに倣い「悪無限(Schlecht-Unendliche, mauvais-infini)」と呼ぶことにする。悪無限については、4 章で「根拠」との関係で問題にする。

‘一’への収束に続くプロセスで、‘一’は‘多’(Viele, multiple)を回復する。‘一’が‘多’に分裂するプロセスは、ヘーゲル論理学にとってと同様、生物学にとっても物理学に

[26] 本稿では、「ゼロ」という言葉を、「中心ゼロ」ないし「ゼロ点」を意味する術語として用いる。『大論理学』におけるゼロの用法については、註 76 を参照。

とっても極めて重要である。後に具体的に論じるように、‘一’の‘多’への分裂は、どんな‘一’も無限の規定からなる、ということと対応している。ヘーゲルは、‘一’を牽引(Anziehung, attraction)と反発(Abstoßung, répulsion)とから構成している。‘一’の牽引は、それを‘多’を含む‘一’とさせ、また‘一’の反発は‘一’を無限な‘多’に分裂・増殖させる。牽引は、例えば、地球や太陽系の重力中心であり、また、無数の細胞や細胞構成分子を、一人・一匹・一個に集中させているものである。

ヘーゲルは反発に、無限分裂のみならず、分裂した無限の点相互間の反発を含めている。この反発関係が、増減を本性とする量(Quantität, quantité)を形成することになる。

2. 2. 本質論―本質と時空間について―

続いて、本質論を概観する。本質(Wesen, essence)を理解するには時空間の理解が鍵となるので、ヘーゲル自身は本質論で時空間を論じていないが、その考察も必要な範囲に絞って行う。

本質は、個別的、客観的、帰納的な直接態の世界を、法則的、発生的、演繹的に支える論理からなる。直接態は有に特徴づけられていたのに対し、本質は、無すなわち否定性の運動がベースとなる。

有と本質との一致に関し、ヘーゲルが語源学的な観点から以下のように述べていることにまずは注意しておきたい。

> 「言語〔＝ドイツ語〕は、動詞 sein の内に、その過去分詞 gewesen にみられる Wesen を保持してきた。というのも、本質は過ぎ去った(vergangen, passé)有であるからである。しかし過ぎ去っているとはいっても、無時間的に(zeitlos, intemporellement)過ぎ去っているのであるが」(Hegel, 1999b,S.3; 1976,pp.1-2)[27]。

「無時間的」という言葉は、ヘーゲルにおいては、「時間的な意味をもたない」、という意味ではないことに注意しよう。「無時間的に過ぎ去っている」というのは、本質論の基底を流れている逆説である[28]。有論が一次元的な空間軸で展開されたのに対し、本質論は時間軸を中心に展開されるが、その展開は、空間軸にある有を過ぎ去ったものとして再発見していく否定の運動――「未来」に向けて――であり、かつ、その運動を支える無時間性――これは「永遠の今」でもあるだろう――の顕現でもある、という二側面を含みこんで成立している[29]。「過去・現在・未来」の論理について本稿では十分に考察できないが、その論理はこの逆説に集約されている、といってよい。この逆説は以下の考察全体に関わることを、ここで押さえておきたい。

---

[27] これ以降、同書（*Wissenschaft der Logik, Die Lehre vom Wesen*、および、*Science de la logique, La doctrine de l'essence*）からの引用は、独語原典、仏訳書の順序で、(S.3, pp.1-2)などといったように、丸括弧内に頁数のみを指示する仕方で行うことにする。

[28] 例えば、この後の反射論で問題となる、「前もってそこにあったことが見出されるもの」も、この逆説を体現している。

[29] この無時間性の顕現は、4 章で詳論する、根拠運動における基盤の生成という論理の展開と緊密に対応している、と理解できるはずである。この理解を詳らかにするには、時間についての突っ込んだ論考が不可欠であり、今後の極めて重要な課題の一つとなる。

（1）無から無への運動

本章 1 で先取りしたように、運動・変化は‘で有るところのものでは無い’・‘で無いところのもので有る’、であるが、本質論の出発点ではこれが二極に分離しており、直接態には有、本質には無、という仕方で対置されている。徐々に明らかになっていくが、ヘーゲル論理学は、一致の元に必ず二極の分離をみる二元的一元論である。逆にいえば、二極の分離があってはじめて一致・同一性を真に問題とすることができる。その限り、本質論との分離運動を経ていない有論は、単なる一次元的な世界を描いたものとして捉え直されることになる。有と最終的には一致する本質は、有との関係を最初明示的にはもっていないため、その運動は、‘で有るところのものでは無い’・‘で無いところのもので有る’から‘で有る’をいわば捨象した、「無から無への運動(Bewegung von Nichts zu Nichts, mouvement de rien à rien)」(S.14, p.18)として開始されることになる。

運動が無から無へと進む限り、それは進んでも進んでも出発点から外にでることはなく、出発点がそのまま帰着点となる。運動における「出発=帰着点」は、ヘーゲル論理学の一大命題であるので、この命題の意味を現代の科学研究と結びつけて具体的に明らかにしておこう。ただし、‘で有る’が一切介在しないこの段階の運動の具体例を提示するのは極めて難しいので、以下は、この後の論理展開を先取りした考察となることを断っておく。

進化論を一例としよう。それは、「原始」細胞から「高等」動物までを視座に収めた射程の極めて広い学問である。ごく「最近」の進化についていうなら、人間はサルとおよそ 2500 万年前に共通祖先から分かれ、その後、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーと順次分かれていった、ということをそれは我々に教えてくれる(cf.,キーナン他、2006,p.56)。この知見を思考のプロセスとしてみるなら、「人間はかつていまの人間ではないものであった」、という思考が出発点にあり、その思考が、「いまの人間ではないものは、人間とチンパンジーの共通祖先であった」、「それはさらに以前にはそれではないものであった」、「それは人間・チンパンジー・ゴリラの共通祖先であった」、「それはさらに以前にはそれではないものであった」、といった仕方で‘で無い’の運動を過去を遡って発生的に繰り返すことにより、これまでみえていなかった法則に到達する、ということになる。主題が人間から遠く離れていくかにみえるこの思考運動において問題となっているのは、実は‘ここ’・‘この私’である、といってよい。というのも、最も原始的な生物の構成を探求し、はるか昔の生命の起源へと思考を馳せ延ばすことが、この私がそもそも何によって成り立っているのか、という問いに答えることとなり、‘で無い’の運動をこの私の内部で足踏みし続けるかのように重層的に積み重ねていくこととなるからである。

あるいは、細胞の組織化の度合に注目して導入されている、ハプロイド体制、ディプロイド体制、上皮体制、間充織体制、上皮体腔体制、といった動物の区分も(cf.,団、1996,pp.46-60)、組織化の複雑さの程度は前者から後者へと増大していくが、それを進化のプロセスとしてみるなら、視点は、後者から前者へと遡及しながら、‘では無い’を繰り返すこととなる。端的に言うなら、生物の体制の研究は、体制の前提へと向けて進んでいっており、体制の「最終形態」を出発点として探求を進みながら、その歩みは体制の出発点へと向けて進んでいくことになる。こうした探求は、我々のこの身体において体現されている、evolution(順進化)と involution(逆展開の進化)との一致を証明しようとする行為に他ならない、と解釈できる。

ヘーゲルの論理展開に戻ることにしよう。

無から無への運動は、やがて有と出会う。より正確にいうなら、無から無への運動の前提には実は有があり、運動のなかでやがて有が生じることになる。その有は、直接態の有、すなわち空間的に繰り広げられている有ではなく、本質・否定性によって下支えされた有である。ヘーゲルは、本質において無が有を生じさせること・否定運動がそのつど有に転じることを、定立(setzen, poser)と呼ぶ[30]。そして、その際の有を、‘被定立有(Gesetztsein, être-posé)’と呼び[31]、直接態における定有と区別しつつ、両者は対応しているものとみなす。このように、無から無への運動は、無から出発しつつ、被定立有を媒介点として出発点に帰着する運動へと展開していく。

この段階では「無が有を生じさせること」と捉えられる定立は、後の論理展開を踏まえると、三つの働き・側面を併せ持っている、と解釈できることをここで述べておこう。第一は、否定するという働きである。無・否定性がベースである本質においては、否定性を否定する二重否定によって有が生じることになる。「二重否定」については 3 章で論じる。この第一の働きにより、否定性に埋もれていた有を顕在化させる、あるいは、否定性の内(Innere, intérieur)からその外(Äußere, extérieur)ないし他を生み出す、という第二の働きが生じる。そして、この働きがその外ないし他を明確に立てることで、否定性の運動を一旦収束させ閉じる、という第三の働きも併せ持つことになる、と解釈できる。

補遺

ここまでの論述が示しているように、論理自体が動いていくのが、ヘーゲル論理学の基本であり、際立った特徴である。ヘーゲルにとっては、あらゆるものが運動しており、静止は運動の一側面ないし一段階である。このことは論理運動にも全く同様に該当する。これと相関して、論理運動のいずれかの段階が他の段階から截然とした価値をもつ、といったこともヘーゲル論理学においてはなく、すべてが一元的に連続し、回帰の運動を形成している。連続は不連続を前提とし、運動も静止を前提としている以上、論理においては、不連続も静止も、連続・運動といわば同等の資格で重要であり、そうであってはじめて、論理は運動となり、一元的に連続することになる。連続と切り離された不連続・運動と切り離された静止に基づく思考――例えば「A は A である」という同一律を遵守する形式論理学的思考――は、ヘーゲル論理学のこの基本とそもそもそぐわないため、それがヘーゲルを晦渋とか非論理的と判断することになっても何ら不思議はない。分析哲学者たちによるヘーゲル批判、いわゆる現代思想における反ヘーゲル主義

[30] 定立が意識や自我の機能に限られず、いわゆる事象にも該当するものとされているのが、ヘーゲル論理学の大きな特徴の一つである。ヘーゲル哲学における setzen に対し「措定」という訳語が採用されることが多いのも、「定立」が自我の機能と捉えられやすい、ということがその一つの理由であるかもしれない。本稿では、無が有を己の中において‘立てる’、という意味で、「定立」のほうがヘーゲルのいわんとすることをより伝えやすい、と判断した。

[31] 西洋哲学の用語の日本語訳はしばしば不自然にならざるをえず、「被定立有」という訳語もその代表的な一つである。これを例えば「定立された有」と訳すのであれば、日本語としての不自然さは幾分和らぐことになるかもしれない。ただし、Gesetztsein は、いまだ大きさを帯びていない、運動の一点を意味しており、そのようにこの術語を理解することが『大論理学』読解の一つの鍵となる。この理解を示すにはできるだけ一単語に近くこれを訳出するのが望ましいので、本稿では訳語としての自然さを犠牲にして、上記訳語を採用することにする。

――例えば、同一性への偏重という批判――、さらには、ヘーゲルの著書のなかで、『大論理学』よりも『精神現象学』などが重視されてきた傾向、等々は、ヘーゲル論理学のこの基本に戻って検討に付される必要があるのではないだろうか。

（2）定立的反射

無から無への運動において成立した被定立有は、本質のベースである否定性と反射しあうようになる。この反射運動は、定立的反射(setzende Reflexion, réflexion posante)と呼ばれる[32]。反射とはいっても、それは、外的な何かを反射する、直接態としての反射――反省すべき事態がある日常生活の反省(Reflexion)はその一例である――とは異なる。本質のベースはあくまで‘で無い’の運動であるから、反射されるものはあくまでその運動が定立するものであり、反射運動は反射されるものを、反射という運動が成立する前提(Voraussetzung, présupposition)として自らのなかで見出すことになる。

反射における反射するものは、何かを自らに映し出すものであるから、それ自体が何かであってはならず、いわば全くの無でなければならない。ちょうど、鏡はその表面に何も付着していない時に諸物を十全に映し出すことができることと同様である。もちろん実際の鏡は物体としてあるわけだが、純粋に反射する作用としての反射するもの・反射鏡は、無からの無への運動そのものである。そうである限り、何かがそこに映っていなければ、それが反射の作用を行っていることはそもそも明らかにならない。

反射するものの作用についてヘーゲル自身が述べているわけではないが、以上は極めて重要なことなので、論理の展開から外れることを厭わずに、その意味をここで具体化しておきたい。例えば、レントゲン写真の正確な解析には相当の熟練を要するとよくいわれるが、上の考察を踏まえるなら、それは、画像を‘反射するもの-されるもの’の関係として読み解ことが必要となるからであろう。つまり、反射鏡が何ものも映していないために、反射の作用が写真に現れていないのか、それとも、直接態の水準でしか写真をみていないために反射の作用を見逃しているのか、を見極めることが、カメラ撮影などで直接的に病巣を捉える場合に比べて解析者にとってはるかに困難となるからであるだろう。また、新聞・雑誌などに載る諸々のニュースについても、いわゆる卓越した歴史観や社会観がない限り、それらは単なる個別的な事柄でしかなく、社会の歴史的な運動――これ自体は無であり決して知覚には映じない――に反射したものとしてそれらを捉えるのは至難である。同様に、生物学の対象、例えば受精卵に関しても、顕微鏡で観察したり、図表などを用いてその構造を学習したことがあったとしても、ほとんどの者にとってそれは直接的な或ものでしかなく、後に身体の多様な器官へと展開していくものの反射鏡としてそれをみるためには、相当の知見を要するであろう。

[32] Reflexionは、「反射」以外に、「反省」「反映」「反照」「鏡映」等々と訳すことができ、ヘーゲルの用語としては、これらすべての意味を含みこんでいる。日本語訳としては、「反省」とするほうが文脈に適合している場合も少なくないが、以下に述べるように、否定性が反射鏡として機能している、と理解することがヘーゲル解釈の一つの鍵となるので、この点を考慮して、Reflexionには一貫して「反射」という訳語を当てることにする。

（3）外的反射

以上で明らかにしたように、本質の反射では反射運動が「主人公」であり、それが反射されるものを生み出している。ただしそうはいっても、運動は、運動体という運動を担うものがあってはじめてそれとして明らかとなる、ということもまた確かである。ボールの運動は、ボールという運動体――これは運動そのものではない――が担っている、といえるように。反射を捉える知覚運動も、その運動を担い、かつそれに外的な脳神経があってはじめて運動となる、といえる。さらには、光の運動も、光という運動体が、秒速約 30 万㎞で一定に進むという運動を担うことで成立している、とみることができる。物体や対象と通常みなされているものが反射するもの・反射鏡に姿を現わす際、それらは運動の外部として現れる。反射運動をこのようにみる論理段階をヘーゲルは‘外的反射(äußere Reflexion, réflexion extérieure)’と呼ぶ[33]。

1 章で論じたように、自と他、内と外等々は関係運動の二極であり、この運動が二極を結んでいる(vereinen, unir)。他は‘自では無いところのもの’であり、外は‘内では無いところのもの’である。こうした一体関係から出発して自と他、内と外との分断が生じ、やがて、自と切り離された他、内と切り離された外が形成される。外的反射は、こうした他・外の視点と対応している。

自然科学の視点は、典型的に外的反射の視点である、とみることができる。例えば、生とは何かという問いに対して、タンパク質合成や代謝などの機能をもちだし、死とは何かという問いに対して、それらの機能停止をもちだす、といったことがその一例である。これら外的反射に基づく説明には、内面や無限の入る余地はない、といえる。

注意が必要なのは、ヘーゲル論理学ではこの外的反射の視点が、いわゆる内的経験に比して価値が低いもの・排除されるべきものとみなされているわけではない、ということである。上記のように、ヘーゲルにとっては内外一体から運動が開始される、ということにもこのことは示唆されている。

補遺

哲学において他の問題を全面的に取り上げて、際立った成果を残したのはサルトルである。彼は一方では、いわゆる単独な他者ではなく、自他間関係、例えば‘ここ’と‘あそこ’の関係に定位し、現象学的な間主観性にも通じる仕方で他の問題を検討している(cf.,Sartre, 1976,pp.292-400)。他方では、他者のまなざしのみが明らかにする自己の背中や顔に定位し、対他(pour-autrui)という視点から、自己の他に対する依存、しかも自己と徹底的に対立する他に対する依存を明らかにしている(cf.,ibid.)。後者に関する彼の追求は、序章の補遺に述べた、私の死を徹頭徹尾他者視点から問題にする彼の姿勢にも明瞭に示されている[34]。しかしながら、彼は実存主義者(existentialiste)として、自と他の問題を、最初から存在・実存(existence)の水準で扱い、‘で有る(sein, être)’という論理学上の問題としては考察していない。そのため、上記のような自己と他者を相互一体的

[33] ヘーゲルは、動詞の頭文字を大文字にすることでそれを名詞化できるドイツ語の特性を、論理学の論理展開に全面的に活用している。定立的反射と外的反射との関係にも、動詞と名詞という対立するものの一体関係を典型的に見て取ることができる。

[34] 戯曲『出口なし』の最終盤である登場人物が口にする、「地獄、それは他者たちのことである(l’enfer, c’est les Autres)」(Sartre, 1947,p.182)、という有名な台詞にも、この追求が象徴的に示されている。

と捉える視点をもちながら、結局のところは、それらをいわばそのままで‘外に立ち現れたもの(ex-istence)’として扱い、関係から独立させることになっている。自他関係の考察にサルトル他者論の豊かな成果を適用するためには、こうした問題点を克服しなければならない。

（4）時空間

以上の論点を後の議論と緊密に接続させるために、反射論の考察をここで一時中断し、時空間の考察を経由することにしよう。

空間と時間は、「自の外へと出て行く運動であり、流出であり」、「永遠の自己産出」である(Hegel, 1999a,S.131-S.132; 1972,p.171)。ヘーゲルは両者の共通性をこう指摘したうえで、次のようにいう。

「空間は、ただひたすら切れ目なく続いているところの、絶対的な(absolut, absolu)自己外有であり、自と同一であるところの永続する他有(Anderssein, être-autre)である。一方、時間は、自から出ていく絶対的な運動・無に成る運動であり、それは、この〔無に成るという〕消失〔自体〕が絶えず新たに無に成る運動である。この運動により非有(Nichtsein, non-être)が生まれるが、この運動は、やはり自と単に等しく、単に同一である。」(ebd.,S.132, ibid. ,p.171)

出発のゼロ点から、直線を或る一点まで延ばし(リミット 1)、さらに次の一点まで延ばし(リミット 2)、またさらにその次の一点まで延ばし(リミット 3)、といった仕方で、永遠に延長させていく。空間は、自己のリミット 1 の外へ、次にリミット 2 の外へ、さらにまたリミット 3 の外へ、と抜け出ていく。このリミットの外が、他有の世界である。これはまた、中心のゼロ=無から反発していく世界でもある。

より日常感覚に引き付けて理解するために、自を‘ここ’他を‘あそこ’と読み替えて説明してみよう。対立する二極は一体である、と繰り返し述べてきたように、‘ここ’は‘あそこ’があって‘ここ’となり、‘あそこ’は‘ここ’があって‘あそこ’となる。‘あそこ’は、‘ここ’ではない‘あそこ’として、‘あそこ’である。その‘あそこ’に行くと、‘あそこ’は‘ここ’に変わる。このことで、新たな‘あそこ’が発生し、その‘あそこ’は、‘ここ’ではない‘あそこ’となる。この第二の‘あそこ’も、そこに行けば‘ここ’になり、以下、第三、第四・・・の‘あそこ’も同様である。こうした、‘あそこ’を‘ここ’に変えていく過程を、「自己外」の「他」の視点で、言い換えれば、‘で有る’という有の次元で永続的に繰り返すのが、空間の運動である。空間は、どこまで行こうとも‘あそこ’=他者視点が必ず現れてくる、という意味で「自と同一」である。

一方、空間と異なり時間の場合は、自己産出は無を繰り返すことで、自の外は決して他にはならない。その限り、時間は、中心ゼロにとどまって流出運動を繰り返しているものである。既にみたように、本質の基本は、無から無への運動であるが、この運動を上記引用に従って言い換えれば、‘では無い’が絶えず新たに無に成り、‘では無いところのものでは無い’‘では無いところのものでは無いところのものでは無い’・・・を無限に反復していく運動である、ということになる。そうであるならば、無から無への運動は、時間という、決して他になることのない純粋な無の無限運動に対応している、といえることになる[35]。

[35] 既述のように、ヘーゲルは本質を時空間と関連づけて論じてはいないので、これはあくまで本稿の解釈である。

以上の解釈に従うなら、反射運動は反射されるものを運動の前提として自らのなかに見出す、という先に論じたことは、無から無への運動が自らを他に転じた無として自らのなかに見出すことに等しいと、そして、他に転じた無とは、空間化された時間のことである、と理解できることになる[36]。ヘーゲルは、定立的反射は自らの運動において、「前もってそこにあったことが見出されるもの(Vorgefundene, ce qui est trouvé-déjà-là)」(S.16, p.22)を定立する、といっている。過去分詞を使ったこの表現は、前提が過去と対応したものであることを示唆しているであろう。前提は「折り返し(Gegenstoß, contrecoup)」(S.17, p.23)点でもあり、無の反復運動は、前もってそこにあったものに突然ぶつかり、そこで方向を転じることになる。この前提・折り返し点は、無の運動が自らの内に生じさせるものでありながら、前もってそこにあったものである、という逆説が重要である。「前もってそこにあった」という側面は、定立的反射から外的反射へと展開するにつれ、前面に迫り出してくることになる。

反射についてのこうした理解を十分に基礎づけるには、時間についてのより詳細な考察が必要であるが、ヘーゲルに即してこの課題を果すことは今後の課題となる。その代わりとして、「人類は、まなざしは過去に注ぎ、背中は未来に向けて、後ずさりしながら進んでいく」、という、エピグラフに掲げた歴史家 G.フェレーロの箴言を導きとしよう。

背中の側は我々に見え‘無い’ところで、この無はいくら進もうと無にとどまる。この無の無限進行は‘未だ来無い’未来に属し、展開される。一方、まなざしを注がれた‘有’は、我々の進行方向に現れてくるもので、過去に属する。我々はどれほど未来に向かって歩み続けても、新たに発見するのは過去である。‘で無い’を紡ぎ出せば出すほど、‘で有る’過去がみえてくる。実際、ビッグバン直後の宇宙の姿を描き出そうとする宇宙物理学が典型となるように、科学の探求は過去に遡ることができればできるほど、一層「新しい」ものを「発見」できる、といえる[37]。フェレーロが「人類」について述べたこの命題は、未来に「発見」するものはすべて過去から存続しているもので、「新しい」ことはすべて過去にあったものである、という論理運動の展開を表現したもの、と解釈することができる。この点については、4 章で根拠論に即してより詳細な考察を行うことにしたい。

以上の考察を元に、定立的反射と外的反射とを明確に対照するなら、内的反射とも呼べる前者は、ゼロ点である無から出発し、そこを帰着点としている反射運動であるのに対し、後者は、内と不連続な外・他から出発し、そこを帰着点としている反射運動である、と整理することができる。

後者にのみ基づくことでは、内を外に、あるいは無限を有限(Endliche, fini)に置き換えることで成立する論理しか導きえない。ヘーゲルにいわせれば、この論理は間違っているとか無

---

[36] 註 35 に述べたことが、ここにも同様に該当する。

[37] 例えば、素粒子物理学で用いられる巨大加速器の進歩について A.D.アクゼルが次のように述べていることは、このことを端的に物語っている。「〔CERN の〕LHC〔＝大型ハドロン衝突型加速器〕はビッグバンから想像を絶するほど短い時間（5×10^{-15}秒、一〇〇〇兆分の五秒）後の宇宙を調べるタイムマシンだと、〔A.〕グース〔＝MIT の著名な宇宙論学者〕は説明する。比較として、一九三〇年にバークレーで作られた最初のサイクロトロンはビッグバンから二〇〇秒後の宇宙を垣間見せてくれ、一九五二年にニューヨーク州ロングアイランドのブルックヘヴン国立研究所で作られたコスモトロンはビッグバンから 3×10^{-8}秒（一億分の三秒）後、一九八七年にフェルミ研究所で作られたテヴァトロンはビッグバンから 2×10^{-13}秒（一〇兆分の二秒）後へと我々を連れていってくれる」(アクゼル、2011,p.59)。

価値である、というよりも、いわば中途半端である。というのも、この論理は、テーゼ(These, thèse)から出発して反対極のアンティテーゼ(Antithese, antithèse)まで到達した運動が、折り返して方向を転じることなく、そこで止まってしまったものだからである。確かに、反射運動が出発点に回帰する、すなわちジンテーゼ(Synthese, synthèse)を行うためには、その前提として、運動は自らにおいて分離していなければならない。繰り返しになるが、分離のないところに結合はなく、外のないところに内はない。その限り、アンティテーゼとしての外的反射の視点は必須である。ただし、外的反射においては、論理運動を形成しているペアが切り離され、二元論となっている。運動は、外的視点を揚棄・アウフヘーベンして、テーゼと再結合しなければならない。

（5）規定的反射

以上で明らかにしたように、出発=帰着点ゼロは自己反発によって、折り返し点 1、2、3・・・を頂点とする楕円を次々と描き、このことによって規定運動の層を形成している。外的反射は、この発生的な規定運動の自己展開を無視して、層をなした楕円右端の頂点だけをみている、と解釈できる。外的反射における規定運動は専ら、‘で無い’を繰り返していく反発の働きとして示されている、といってもよいだろう。この理解の手助けとなる図を以下に示す[38]。

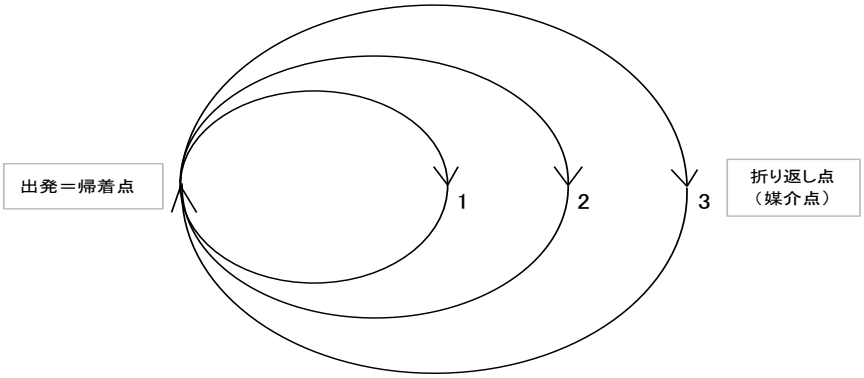

図２　本質の円環運動（１）

無の運動は外的反射を経由して出発点に牽引されて回帰し、規定運動全体を回復させることになる。こうした反射運動を、ヘーゲルは規定的反射(bestimmende Reflexion, réflexion déterminante)と呼ぶ。規定的反射は、定立的反射と外的反射との、無から無への運動と被定立有との結合である。そこでは、被定立有は、自己内反射(Reflexion in sich, réflexion dans soi)としての規定となる。つまり、無からの発生的な規定運動が、その前提、すなわち、前もってそこにあったことが見出される有と出会ってそれを運動内に含み込み、そこで折り返して出発点に回帰することで、自己内反射としての全体的な規定となるに至る。

反射論のクライマックスとなるこの部分については、ヘーゲル自身の論述を引用しよう。

[38] 図示による論述はヘーゲル論理学には本来相応しくないが、ここでは、ヘーゲル理解を少しでも容易にする、という目的を優先することにする。

「自己内反射ゆえに、反射諸規定(Reflexionsbestimmungen, déterminations-de-réflexion)は、 空(Leere, vide)の内を相互に牽引することも反発することもなく流れ動いている、自由な諸本質性(Wesenheiten, essentialités)として現れる。これらの本質性のなかで、規定性は、自己自身との関係を介して無限に強化され固定される。〔これらの本質性において〕規定されたものは、〔直接態における外的な〕移り行きや、単なる被定立有を、自らの下に従えている。つまり、他への反射を自己内反射に折り曲げ回帰させている。こうして、写像(Schein, apparence)は〔いまや〕本質のなかで本質的写像であり、そうなるよう、諸規定は、規定された写像を構成している。このようなわけで、規定的反射は、自己の外に到達した反射(außer sich gekommene Reflexion, réflexion parvenue hors de soi)となっている。本質の自己自身との〔外的な〕同等性は、否定の中に失われ、この否定が支配しているところのものである。」(S.22-S.23, p.31)

反射は、一方では否定性の運動であり、他方では被定立有である。この両者が前者に統合される形で内的に結合することにより、反射は自己規定運動となる。こうした二元的一元性としての規定的反射においては、他から他への移り行きに特徴づけられる有論とは異なり、他は自己内に吸収されている。反射がこうした自己内での他に対する関係運動となることで、それは、単なる写像・見かけ(Schein)のように儚く消失してしまうことなく、他ないし外という重しをもった存続する(bestehen, subsister)規定運動となる。1 章から繰り返し問題にしてきた対立するもの同士の対・ペアは、こうした運動によって生み出されるものである、といえる[39]。

論の展開が前後するが、ヘーゲルは、写像という概念を、直接態が本質に移行する接点のところで持ち出している。直接態の名残を引きずっている写像は、‘で無い’が支配する世界では儚く消え失せるばかりであったが、それがここで呼び戻されて規定され、本質の中に組み込まれて本質的写像となっている。このことは同時に、本質が有へと向けていわば具体化していくことでもある。ここにおいて、‘で無い’は‘で有る’に、換言すれば、内は外に、自己の中で到達することとなっている。直接態すなわち有は、本質の運動が生み出したものであるから、その到達は「本質の自己自身との同等性」と言い表すこともできる。同等性は、同等すなわちイコールとして‘で有る’になることであり、‘で無い’の運動が一旦停止することである。上記引用で「自己の外に到達した」と直訳した部分は「自己を失った」と訳すことも可能であるように、外すなわち他に到達するということは、反射が運動としての内的本性を失うことでもある。だが、同等・イコールという表現が示すように、その合体はいまだ外的・形式的であり、そこでの支配権は有の側に移るわけではなく、否定・本質の側が握り続けているのである。

なお、上記引用中の‘空’を、本稿では極めて重要な概念として解釈することになるが、このことについては 3 章以降で述べることにしよう。

[39] 例えば、射精された精子は‘自’のみでは数日もしないうち儚く死滅してしまう運命にあり、精子にとって他である卵子と結合できた時に、その他のおかげではじめて存続することができる。この事情は、基本的に卵子にも該当する。論理の水準は異なるが、このことをここでの論理に対応する現実世界での具体例として挙げておきたい。

3. 反射論から根拠論へ

3. 1. 連続に不連続を打ち立てる運動

反射の運動はその最終段階の規定的反射において、根拠の運動に接続される。有と本質との一致は、根拠論において一層明らかになっていく。

このことを明らかにすべくヘーゲル根拠論の考察に入る前に、具体例をいくつか取り上げ、準備的考察を行っておきたい。

有論を振り返るなら、規定することは‘で無い’と否定することであり、それが‘で有る’と合体して、安定的な‘で有る’すなわち定有を生むのであった。ソムリエが味をかぎ分けていくことを一例としたように、或る一つの味の中から新たな‘で無い’が湧出し、その否定作用が、ソムリエにとって既知の味‘では無いもの’を生み、それがやがて安定的にかぎ分けられるもう一つの味となる。この運動は、一つのものに或るリミット・限界を立てることであり、同時に、その限界を原理的には無限に超えようとすることである。

これと同様の運動が、物質や生物を対象とする科学研究の根幹にあることを確認しておこう。2 章で本質の水準に踏み込んでふれておいた例を再び取り上げる。ドゥ･ブロイの論述にあったように、それ以上分割することのできない最小単位を特定する試みが、科学なかでも物理学の歴史を作ってきた。例えば、物質の構成要素として原子を、原子の構成要素として電子と原子核を、原子核の構成要素として陽子と中性子を、陽子と中性子の構成要素としてクォークを、物理学は明らかにしてきた。新たな要素を発見することは、それまで連続していたもの、例えば原子に、電子と原子核といった仕方で不連続を打ち立てることである。‘一’を‘多’に分裂させる、とも、一つのものとして立てられた限界を超えて、新たな‘一’を立てる、ともいえるであろう。

同様に、生物学は、一つの肉体が脳や心臓や肺や腸といった諸器官、神経、血管、血液、骨などから構成されていることを明らかにし、一つの器官、例えば脳は、大脳、間脳、中脳、小脳、延髄から構成されていることを明らかにした。これらはすべて細胞から成り、細胞は細胞小器官から成り、細胞小器官の一つである細胞核には染色体という構成要素が、染色体にはタンパク質と核酸という構成要素があり、デオキシリボ核酸(DNA)を作り上げているヌクレオチドは糖とリン酸と塩基から成ることを明らかにした。これらの物質は分子の視点から理解することができ、分子は原子へと細分化しうる。その意味では、生物学自体が、化学、物理学と境界を接する仕方で一つの学問となっている。いずれにしても、連続に不連続を打ち立てることが、生物学にとっても重要な課題であることは明らかであろう。

こうした連続と不連続の交替運動が、ヘーゲルの描く根拠につながっていく。科学者は、研究対象の成立根拠を求めて、当該のものを切り分けていく。連続のなかに不連続をみることが、「発見」をもたらすことになる[40]。

こうした交替運動は、科学にのみ該当するわけではない。「文系」と「理系」の架橋のためにも、このことを明らかにしておきたい。

---

[40] 厳密にいうと、ヘーゲル論理学に基づき物質を論じるためには、彼の描く論理運動が少なくとも「存在(Existenz, existence)」の段階にまで到達していなければならないが、本稿はその手前の論理段階に定位している。論理展開のこのような先取りに伴う本稿の不十分さは、後日の論文によって補完することにしたい。

我々の意識に焦点を当ててみよう。本稿冒頭でみたソクラテスの言葉にあったような、「夢一つさえ見ないほど熟睡した」状態では、我々の意識の流れを途絶させるものは何もない。その途中に私が何かをしていたとしても、私自身は知ることがない。実際にはどれほど深い睡眠でも覚醒状態となだらかな連続を保っているが、手術などで全身麻酔を受けた際、意識喪失前後の断絶が当人には分からないほど意識の連続性が完全となる時がある。意識喪失の時間が一時間であるか一日であるか、また、その間に私が何かを叫んだか沈黙していたかを、私は知る由もない。私の意識の全くの連続に不連続が入る余地はない。麻酔が効いている際の私の意識の内的な無と、外的で量的な時間のギャップを知っているのは、手術に立ち会っている医師や看護師たちである。他者の手を借りて連続の中に不連続を打ち込むことが、意識を失っていた者にとっては「発見」となる。少しぼんやりしていた場合などに、自らの行いを他者に確認したり他者の目で省みる、といったことを我々が普通に行うように、意識の連続と不連続のこの関係は、基本的にはいかなる場面にも妥当する。この点で、自ら直接見ることのできない背中や顔が他者の目に晒されていることは、意識の連続と不連続と密接に関連する事態である。

連続に不連続を打ち立てる運動は、意識に関しても際限りなく続いていく。上の例でいえば、私に「発見」をもたらしてくれる医師や看護師の意識も、当人の意識内で単独に連続と不連続の関係が保証されているわけではなく、原理的には外的証人による不連続を介すことで、私の意識に不連続を打ち込む役割を果しうる。この証人の外的輪は拡大していき、原理的には世界全体となる。いささか比喩的になるが、誰もが私の背中を他者に預けており、その限り、我々は背中の側で世界を形成している、と表現できるだろう。換言すれば、私の意識において、不連続は、私の意識が外的証人が証する世界と接触する時に勃発する。

他者や世界が体現している不連続が、いかにして本質――意識はその一つとみてよい――の内的連続のうちに再び組み込まれていくか。これがヘーゲル論理学を貫く問いである。このヘーゲル理解を前提としたうえで、本稿は、その問いの基底に死を見出すことをねらいとしている。ソクラテスが喝破したように、死が夢無き決して覚めぬ睡眠の如きものであるならば、死は全くの連続的無を意味するわけだが、それは不連続とどのように関係しているのだろうか。このことが明らかとなるならば、ソクラテスの真意はより明確となるはずである。またそのことで、ヘーゲル論理学に基づき死を内包した二元的一元論を確立する可能性と意義が明示され、ヘーゲルの問いの深さも一層明確となるに違いない。

この課題の遂行は 5 章と終章で果すことにし、本章と 4 章では、そのために必要な、ヘーゲル根拠論の検討を行う。ここからは、ヘーゲルの言葉を引用しながら、それに基づく考察を展開していく。

3. 2. ベースとしての否定性

ヘーゲルは根拠論の冒頭で、「本質は根拠(Grund, fondement)として自己規定する」(S.64, p.88)、と述べている。本質は自らを規定することで反射諸規定から根拠へと姿を変えていく[41]。ではそれはいかなる論理展開によってなされるのだろうか。

[41] 反射諸規定すなわち本質性とは、同一性 (Identität, identité)、差異性(Unterschied, différence)、多様性(Verschiedenheit, diversité)、対立(Gegensatz, opposition)、矛盾(Widerspruch, contradiction)、のことである。これらに

規定は否定であり、本質もまた否定性である、という既に明らかにしたことから結論をいうと、本質の自己規定は二重否定として根拠というポジティブなものを本格的に登場させることになる。「二重否定」はおそらく、「テーゼ(正)・アンティテーゼ(反)・ジンテーゼ(合)」と並んでヘーゲル哲学のよく知られた概念であろうが、その理解は『大論理学』の解釈全体に関わってくる。実のところ、否定性と直接態、自と他との結合という規定的反射が到達した地点は、次元をより掘り下げれば否定運動自体が起こしている二重否定として捉えられることになる。

反射論に戻ることになるが、2 章 2（5）で検討した引用文の直前の一文をみよう。そこには、二重否定によるポジティブなものの誕生が萌芽的に示されている。「反射規定は否定としての被定立有であるが、その否定は、〔自らの〕根拠として被否定有(Negiertsein, être-nié)をもっており、したがって、その否定は自己自身において自己に不等ではなく、本質的規定性であり、移り行くことはない」(S.22, p.31)。根拠論に先立って既に根拠という言葉がこの一文で使われているが、これは、否定という運動の生起を可能にしているベースないし場としての根拠であり、その意味で「被否定有」である、と解釈できる。それに対し、直接態では運動のベースは有(Sein,être)である(vgl.,S.22, cf.,p.31)。そこでは或る質が否定されて別の質に転化すると、前者は後者に移り行き、消失してしまう(vgl.,S.22, cf.,p.31)。この移り行きは我々の常識に合致している。若々しさや美貌は年を取れば否応なく劣化し消失していく運命にある、とみるのがその卑近な一例である。それらは単なる規定でその否定は移り行きでしかなく、我々がその規定にできるだけとどまろうとするのもそのためである。運動のベースが空間的な有である限り、ある規定の隣に別の規定がまっていることを我々は知っている。同様に、約 127 億 2000 万年前に宇宙が誕生した、とか、約 38 億年前に生命が誕生した、という知見も、宇宙や生命の運動のベースが空間的な有である限りで成立する。それに対し、運動のベースが本質の否定性である場合、そこで生起する否定は二重否定でポジティブに転じることを意味する。規定は直接態における単なるネガティブから、二重否定によってポジティブな規定に移行する。視点を変えていうと、本質の否定性は自己自身をベースに各々自由な諸本質性として現れ出ることになる。反射が自己の外に到達する、という時の「外」も、ポジティブになった点を意味している。

補遺

具体例から二重否定の理解を補強しておこう。世界の諸言語には、日本語がそうであるように、二重否定を使って肯定を伝える言語はあるが、二重肯定を使って否定を伝える言語はひとつもない、とされている(cf.,ピンカー、2003,p.184)。肯定に肯定を重ねることは、破格かせいぜい冗長や強調にしかならず、否定と肯定の転換のベースになれるのは、言語の次元でも否定なのである。もちろん、これはあくまで言語学的知見でしかない。なにより、ヘーゲル反射論における二重否定は、「存在」が登場する以前の、大きさをもたない一点の内部での論理運動のことである。この点で、こうした具体例は、存在を素朴に前提とした通俗的理解を促進しかねないが、肯定的なものを知らず知らずに世界の中心におこうとする我々の傾向に鑑みて、否定の柔軟性を端的に物語る例として挙げておく。

ついての考察は本稿では省略し、反射論から一挙に根拠論の考察に移ることにする。この省略箇所について、筆者は以下の論文で考察している。Cf.,福田、2017。

なお、本稿では positiv・negativ という原語に対し、肯定的・否定的という訳語を可能な限り使わず、ポジティブ・ネガティブという言葉を採用することにしたい。肯定という言葉は文字通り肯定的な語感を日本語として帯びており、否定の場合も同様であるが、このことが両概念の理解の妨げになる、という判断からである。時に、ポジ・ネガ、という表現も使用する。この後明らかになるはずだが、写真のポジとネガの関係は、ヘーゲル論理学の両者の関係にかなり近い。もちろん、ネガという物があるようにネガティブがあるわけではなく、関係それ自体として近い、ということである。

以上の考察を受けて、規定的反射でヘーゲルが述べている‘空’にここで改めて着眼し、解釈してみよう。

「自由な諸本質性は空の内を相互に牽引することも反発することもなく流れ動いている」、といわれる時の空は、本質の端緒の否定性が二重否定によってポジティブに近づくなかで生み出されたものである。この空は、ベースや場を意味する被否定有としての根拠に近い。被否定有という概念も、単なる有や単なる無とはもちろん、否定の否定とも区別される、否定されているところの有である。空についてのこの解釈は、次の解釈と密接に関連する。空はその内において、運動と諸規定、‘で無い’と‘で有る’とが関係するところのものである。そうである限り、それはそれを生み出した否定性とも、有ないし他とも異なる、いわゆる第三項である。ヘーゲルは、西洋の哲学・思想に根強い二元論を克服するため、「三値論理」とも呼びうる弁証法的論理学を創造したわけだが、それを全面的に展開するための布石として、空という第三項を本質論のここでさりげなく登場させている、と解釈可能ではないだろうか。

関連して、否定性を重視するヘーゲル論理学が、「すべては無である」とみなす徹底的なニヒリズムやそれに類する思想とは峻別されるべきことにもふれておこう。ネガはポジあってのネガであるように、ヘーゲル論理学は常にペアを成すところで生起する一元論であり、単純な「無一元論」ではない。ヘーゲル論理学が否定をベースにしながらこの世の「現実」を重んじているという点は極めて重要であり、ヘーゲルを科学と密接に関連づけることが可能になる所以でもある。

3. 3. 反射・反省と一元論

二重否定によって明らかになるポジティブな他は、反射論ではあくまで萌芽的でしかない。反射においては、否定運動と直接態との結合は外的であり、他が自己内に吸収されるとはいっても、それは内とは切り離された外からいわば偶然的にやって来るようなものでしかない。実際、反射論の最終段階で否定がなお支配権を握っているというのは、見方を変えれば、否定が必ずペアを組んでいるはずの有は、いまだその外にある他でしかない、ということでもある。その限り、論理運動が通過している反射の段階は、二元論的である。‘ここ’に私がいて、その意識が鏡のように外界の‘そこかしこ’を反映している(reflektieren, réfléchir)。この二元論は、「私が或る物を見ている」という我々の日常感覚に近い。またそれは、精神については文学や宗教や哲学が、自然界については科学が専ら担当するという、今日の学術界の一般的前提でもあるだろう。Reflexion の原義は「曲げ戻す」ことであるが、学問的反省が、対象を経由して曲げ戻された意識の解明にとどまるなら、それはたとえ自然科学の基礎づけにはなりえても、結局のところ精神・意識・自我を自然界から区別し、その上位におくことを意味するであろう。

ヘーゲルはこれ以降の論理展開において、他や外を出発=帰着点とする、これまでとは反対方向の運動を描くことになる。通常の哲学的反省論との対照を明確にするために精神と対象の関係としてこの運動を言い表すなら、対象から発し精神を経由して対象に曲げ戻される運動を問題にする、ということである。本稿ではこの運動の全体を明らかにすることはできないが、ヘーゲル論理学が二元的一元論と形容できる一元論であり、自然科学と密接に関連した死の哲学の構想に際立った示唆を与えることができるのも、それがこの運動を全面的に論じているからである、という点は明示できるようにしたい[42]。

3. 4. 規定されていないものとしての自己規定

根拠論に入ったからといって、二元論が直ちに解消されるわけではない。二極が一致したと思ったらまた離れ、再び一致に向けての運動を再開する、ということを倦まず弛まず繰り返していくのがヘーゲル論理学の特徴であり、根拠の論述にもそれは明瞭に示されている[43]。

「本質は有の自己内回帰(Rückkehr in sich, retour dans soi)としての純粋な否定性である。かくして本質は、それ自体としてないし我々にとっては(an sich oder für uns, en soi ou pour nous)、有がその内で溶解する(sich auflösen, se dissoudre)ところの根拠として規定されることになる」(S.64, p.88)。この一文は、他・外である有が内に回帰し、本質の否定性に吸収される途上の運動を一方で描き、それを吸収し溶解させた本質というネガが多少なりともポジ化されている状況を他方で描き出している、とみることができる。本質と有の二極が一致に向かう運動はいまだ途上で、本質の外にいる「我々」にはその一致が見て取られても、自己内の他がいまだ潜在的(an sich , en soi)でしかない本質は、なお純粋な否定性でしかない。自己内他が明確になればなるほど、本質はネガからポジとなり、根拠として立ち現れることになる。

繰り返しの指摘であるが、このポジはポジになったからといって決してネガから切り離されうるものではない。「本質は、それが自らを根拠として自己規定する限りで、自らを規定されていないもの(Nichtbestimmte, non-déterminé)として自己規定することになる」(S.65, p.89)。自己を規定することが自己を規定されていないものとして規定することになる、というのは、いかにも奇を衒った禅問答のようだが、運動のベースがネガである限り、こうならざるをえない。自己規定運動の内から規定されていないものが生み出されるから、その規定されていないもののうえで規定を行うこと、すなわち否定の否定により、ポジティブな根拠

---

[42] 他や外を出発=帰着点とするからといって、ヘーゲル論理学の一元論は、精神をはじめとする否定性を物質などの有限性に還元する一元論とは全く異なることに改めて留意しよう。ヘーゲルにいわせれば、そのような一元論は直接態に閉じ込められているか、せいぜい外的反射のみに基づく一次元的な一元論でしかない、ということになるはずである。それは、有における‘で無い’の無限の運動を等閑視している点で、無限から有限へと向かう科学と交流することはある意味では容易かもしれないが、‘で無い’を‘で有る’に変換する科学の使命や立場を理解したうえでそれと対話し連携することは難しいであろう。

[43] 物理学や生物学の発見の歴史は、この一致と不一致の運動によって彩られていることは、これまでの論述から示唆され、今後も明らかにするところである。そもそも、1 章で述べたように、生命の運動自体が分離と結合の運動である、とみることができることを、筆者はゾウリムシ研究者高木由臣のオートガミー論に従って明らかにしている。Cf.,福田、2019。高木のオートガミー論については、5 章で論及する。

が生み出されることになる。さもなければ、運動はストップしてしまうか——運動はそもそも‘で有るところのものでは無い’をその本性とする——、根拠に転じた規定運動をさらに続行させるためのベースを規定運動の外から絶えずもたらさざるをえないことになる。こうなると、二元論は原理的に解消しえないことになってしまう。換言すれば、根拠の根拠のさらなる根拠を求めてとどまるところを知らなくなる悪無限に陥ることになる。したがって、「本質は、他のものからやってくる本質ではなく、自己の否定性の内での自己一致(identisch mit sich, identique à soi)である」(S.65, p.89)のでなければならない。本質が未規定な否定性であるから、その内から外に湧出する否定作用は有を生み出す規定運動と一致しうる。ヘーゲルは、規定運動と規定されていないものとの関係を、「本質の規定運動は、ただ、本質の被規定有(Bestimmtsein, être-déterminé)を揚棄することだけである」(S.65, p.89)、とも表現している。

規定のベースを有に置き、直接態の世界でのみ思考するなら、ヘーゲルの以上の論理は極めて理解しにくいものだろう。ヘーゲル理解のためには、一元論を貫徹しようとするがゆえに二次元の往復運動をみる彼の視点を共有する必要がある。

この点で、規定されていないものも「規定されていないもの」という規定である、ということは極めて重要である。ヘーゲルのまなざしが、ネガティブとポジティブのペア・二極運動に注がれていることがここにも明示されているからである。

さらにいうと、この規定されていないものという規定は、本章 2 で考察した‘空’、ないし、否定されているところの有(Negiertsein, être-nié)としての根拠に関連している、と解釈することができる。この段階の本質と有は互いに激しく往復運動を行いながら統合に向けて相互関係を結んでいるが、その運動を取り持つ媒介が今後問題になる。それは今のところまだ潜在的でしかないが、かすかな、しかし反射の段階よりは明瞭なその姿を、規定されていないものという規定に認めることができるのではないだろうか。

「反射は純粋な媒介(reine Vermittlung, médiation pure)一般であり、根拠は、本質の自己との実的な媒介(reale Vermittlung, médiation réelle)である」(S.66, p.90)[44]。反射は、反射されるものを反射する二極関係運動であるが、反射運動にとって他である反射されるものは外からやってくるものでしかないため、「関係づけられた諸項をもたない、単に純粋な関係(reine Beziehung, rapport pur)である」(S.66, p.90)。それに対して、「根拠は、反射〔運動〕を揚棄された反射として含みこんでいる」(S.66, p.90)。つまり、「根拠は、自己の非有を経由して自己に回帰した本質であり、自己を定立している本質である」(S.66, p.90)。それ自体(an sich,

[44] ヘーゲル論理学における real をどのように訳出するかは難しい問題である。内と外との統合が明確な wirklich に対し、real は二極の統合が明示化される以前の概念であるので、「現実的」という訳語は wirklich に当て、real には「実的」というややこなれない訳語を当てることにする。Realität が通常「実在性」と訳されることに鑑みるなら、real には「実在的」という訳語が妥当だが、「何かが実際に存在する」というこの語のニュアンスが誤解を招きかねないと判断し、この訳語は採用しなかった。なお、Wirklichkeit には「現実性」という訳語を当てることができるので、real と不揃いな訳出となってしまうが、Realität は「実」と訳さずに、「現実」と訳出する。こうした訳語の選択は、哲学史における Realität の解釈にも——あるいは本稿のように、Sein を「存在」ではなく「有」と訳すことにも——関わる問題であるが、ヘーゲル論理学における「現実」と「現実性」との異同を明確に論じることを含め、この点の論究は今後の課題としたい。

en soi)は否定運動にとどまる反射に対し、単なる否定運動‘では無い’という二重否定によって自己に回帰した根拠は、否定運動を揚棄されたものとして自己に含みこんだ本質である。実的な媒介は、自己の内に他を含みこむようになったものである。しかもその他は、自己否定によって生み出され、したがって、それを定立することは自己を定立することになるのである。

補遺

「実的」と「純粋な」は、例えば「現実的」と「理想的」という仕方で、我々の日常生活でも重要な対比構造を形成しているであろう。理想はしばしばまっさらな純粋状態であり、少しでもそれを乱す他が入り込むと維持できなくなる。一方、現実的な人間は、自らの内に自らの理想を裏切る異分子を見出しても、それを自己と認めないわけでも、他者に投影するわけでもなく、時に厳しい自己批判を行いながら自己そのものとして許容し、「一己」を保持している。自己内の敵を許容したり否定したりするこの運動は、決して止むことなく続いていく。繰り返し指摘したように、ヘーゲルの論理はいわゆる心理的なものだけでなく、物質の運動にも当てはまる点が一大特徴であるが、日常における以上の対比構造がヘーゲル論理学におけるそれと対応している、という点をここで確認しておきたい。

4. 根拠論

ヘーゲル根拠論は、「絶対的根拠(absolute Grund, fondement absolu)」、「規定された根拠(bestimmte Grund, fondement déterminé)」、「条件(Bedingung, condition)」という三つの項から構成されているが、本稿では、二極の一致に向けて、際立ってダイナミックな展開をみせる規定された根拠に焦点化して考察を進めることにしたい。そのためにまずは、絶対的根拠で本格的に導入される「形式(Form, forme)」と「内容(Inhalt, contenu)」、および「基盤(Grundlage, base)」について、必要最小限の説明を行っておく。

「形式は、反射の完成された全体(vollendete Ganze, tout achvé)である」(S.70, p.97)、といわれるように、形式は反射運動に基づくいわゆる能動的な運動である。例えば、物の形を形たらしめるのが形式である。それに対し、形式・形相の対概念である質料(Materie, matière)は、一般には素材とか原料といわれるように、自らに与えられる形式に無関心で、いわゆる受動的なものである。質料に働きかけるのは否定性の運動を引き継いでいる形式であるが、質料もその運動の内から生み出されたものには違いない。形式と質料とが否定性の内から分離した後に再び結合すると、内容となる。「内容は‥‥‥形式づけられた質料(formirte Materie, matière formée)として規定されている」(S.78, p.108)。

形式と内容に並んで、この後の考察にとって重要なのが、質料と通底している基盤である。これについてはこの後詳しく検討するが、反射から根拠に展開した本質は、反射ないし形式の運動を隆起させるのに応じて、運動のいわゆる背景となる基盤を登場させることになる。換言すれば、動も静とペアになることがここではじめて明確となり、運動と運動の基盤との統合が問題となるようになるのである。

「規定された根拠」は、「形式的根拠(formelle Grund, fondement formel)」、「実的根拠(reale Grund, fondement réel)」、「全面的根拠(vollständige Grund, fondement complet)」、という三つの根拠から構成されている。順にみていくことにしよう。

4. 1. 形式的根拠

（1）一つの同一的関係

形式的根拠は、次の一文から開始される。「根拠は或る規定された内容をもつ。根拠の規定性は‥‥‥形式にとっての基盤である」(S.79, p.108)。

形式は、無から無への運動という、原点から外に出ることのない否定性をその本性としている。その否定性に潜在している有とのペア論理を動機として[45]、自己を否定する運動が発出し、それが否定に否定を重ねて展開していく。

この論理展開の理解を幾分でも容易にするため、以下の図を手がかりにまずは図式的に説明しよう[46]。

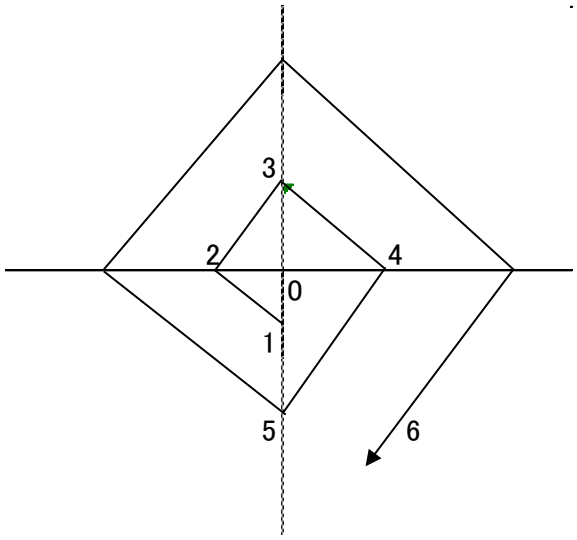

図 3　本質の円環運動（2）

原点内の無から無への運動は(座標軸の原点＝0)、鏡の機能をもつ縦軸のネガ次元を成立させる(1)[47]。この縦軸ネガを反射鏡とした運動は、まず横軸のネガ次元に移動する(2)。ついでその否定運動が縦軸のポジ次元に移動し(3)[48]、さらに否定を重ねて横軸のポジ次元にまで到

[45] 無は、有とペアになっている限りでの無である、ということは既に指摘した通りである。

[46] 註 38 に述べたことがここにも該当する。

[47] 縦軸は本来時間軸でありそれ自体としては大きさをもたず、そのネガとポジとの区別は、大きさをもたない限りでの区別である。この点にも図示の限界が強く認められる。この問題を幾分でも是正するため、図の縦軸を破線で示すことでそれが大きさをもっていないことを示すことにする。

[48] 註 47 で述べたことがここにも該当する。

達し(4)、ついで、出発点である原点に回帰する(5)[49]。この回帰運動は再び開始され(6)、何度も繰り返されることになる。この図の横軸ネガ次元に被定立有を位置づけるとするなら、それと対応する直接態の概念である定有は、横軸ポジ次元に位置づくことになる[50]。繰り返し行われるこの回帰運動を通して根拠が確立し、「或る規定された内容」が横軸ポジ次元に出現する。なお、この図 3 は、5 章において、死を一つの論理運動として理解する際にも参照することにしよう。

注意すべきは、どれほど複雑な形式でも一本の線で表すことができるように、多様な内容へと開かれていくこの運動は、絶えず原点=ゼロ点に戻る円環運動を描いている、ということである。2 章 2 でみた図 2 はこのことを示している。つまり、図 2 と図 3 は、同じ本質の円環運動を、異なる視座からそれぞれ表現したものである[51]。出発点に回帰するこの運動は多重層化して螺旋状の円となる。「根拠は、自己に否定的に自己関係する同一性であり、かくしてその同一性は、自己を被定立有とする同一性である」(S.79, pp108-109)。根拠づけと根拠づけられるものの二元性が、一つの・同一な根拠運動を織り成している。

> 「この同一性は基盤ないし内容であり、この内容はこのようにして、根拠関係(Grund-beziehung, rapport-fondamental)の無関心な(gleichgültig, indifférent〔＝無差別な〕)ないしポジティブな統一(Einheit, unité)を構成しており、根拠関係を媒介するもの(Vermittelnde, médiatisant)である」(S.79, p.109)。

この一文は、ヘーゲル論理学を特徴づける、自と他との、ないし連続と不連続との対立的一体関係を根拠の水準で明示しており、非常に重要である。

根拠関係は、根拠と根拠づけられるものとの二極関係運動であるが、それは‘一’対‘多’の二極関係運動でもある。根拠運動の原点は牽引によって凝縮された大きさをもたない一点であるが、それが反発によって無際限に拡大していく。その拡大が否定性の自己分裂である限りでは、それは‘一つの’分裂運動を意味しているが、2 章 1 で述べたように、分裂が分裂したもの同士の反発をも意味する限りでは、それは個別的で‘多様な’被定立有を形成することでもある。この論理展開は、具体的には、一個の受精卵が分裂を重ねて‘一つの’身体を形成する一方で、その分裂増殖が約 200 種類もの‘多様な’細胞を形成することにもなる、という事態に対応させて考えることができるであろう。否定性が自己の内に他を誕生させることは、運動の連続と不連続、‘一’と‘多’が同時に生み出されることを意味する。

運動が可能となるにはそれとペアになる静止的なものが必要で、それは無から無への運動では全く潜在的であったが、否定性から自己内他が生み出されるにつれて、運動の基盤として顕在化されてくる。基盤は‘多’を‘多’たらしめる‘一’である。重要なのは、それは

---

[49] 図中の 5 が原点への回帰を意味していることは、この図 3 ではうまく表現できていない。この後でも指摘するように、本質の運動がその全体として原点への回帰運動であることは、図 2 により明瞭に示されている。

[50] あくまで、定有と被定立有との関係を図示するとこのようになる、ということである。被定立有は、定立されているという側面と、有であるという側面との両方を含みこんで成立している概念である、という点に定位し、専らその後者に着目するなら、これを横軸ポジ次元に位置づけることも可能である。ある概念に対するヘーゲルの含意すべてを図示することは不可能であり、図の使用は理解のためのあくまで便法である、ということに、改めて注意しておきたい。

[51] 両者の一致を図で示すことはできない。ここにも図示の、おそらくその最大の限界がある。

‘一’でありながら、連続的な運動としての形式ではなく、内容である、ということである。それは、運動の連続性を引き継ぎながら、‘多’の基盤となりうる他としての‘一’であり、他性と結びつく無関心・無差別を特徴とし、ポジティブである。基盤はこのように、連続性と他性という、いわゆる相反する性格を備えたものである。そのため、それは、無から無へと連続していく運動と、その連続性の中で生み出される不連続な‘多’なる他とを媒介するものとなるのである。

先取り的にいうと、この基盤としての‘一’を、ヘーゲルは実的根拠では「Gediegenheit」という言葉で表現している(vgl.,S.86, cf.,p.118)。「堅牢で稠密」という意味と、「不純物の混じっていない、どこまでも同質な純粋さ」という二つの意味をもつこのドイツ語は、他性を帯びかつ‘一’である基盤の本性をよく示しているであろう[52]。

このように、内容としての基盤は、無差別でポジティブな統一であるだけでなく、媒介するものでもある。ところで形式も、あるいは形式こそ、媒介をその特徴とする。一般的にいって、物と物同士を媒介しているのは物の外形であり、直接態で問題となるリミットがそれに該当する。根拠の段階では、形式は根拠と根拠づけられるものとを否定的に媒介している(vgl.,S.79, cf.,p.109)。内容は有に、形式は無に起源をもつが、形式的根拠においてもこれまでと同様、二極は激しく往復運動を行う。この往復運動において、それぞれの極が反対極に喰い込み、両極が共に媒介するものとして徐々に現れてくる。このことで、差異性を含みこんだ唯一つの根拠関係運動が次第に迫り出してくることになる。

内容は「直接的な規定性」を、形式は「否定的媒介(negative Vermittlung, médiation négative)」を基本的な特徴としているが(vgl.,S.79, cf.,p.109)、両極が激しく往復することは、それぞれの特徴が他極に移っていくことでもある。すなわち、内容は「ポジティブな媒介者(positive Vermittelnde, médiatisant positif)」と、形式は「規定された内容」となっていく(vgl.,S.79, cf.,p.109)。先に述べた、両極の差異性を含みこんだ同一的関係運動の成立は、両極のこうした接近を意味している。「同一性と非同一性との同一性」という命題で知られているように、同一性と差異性の同一的関係は、ヘーゲル論理学を根本的に特徴づけている。ここでは、最初の同一性を形式が、差異性を内容が基本的に受け持つことで、根拠関係という同一的関係が成立していることを確認しておこう。

この同一的関係を具体的に捉えるため、重力と石の落下との関係を考えてみよう。重力が石の落下の根拠であることは一見明白であるように思われる。だが、石が「石」という規定された内容であるのと同様に、重力もまた「重力」という規定された内容である。そうであるならば、重力は落下という出来事を媒介しているが、石も同様にそれを媒介しており、両者共にポジティブなものである、とみることができる。実際、石などの諸物体がないところで重力を、また重力のないところで諸物体を考えることができないとするなら[53]、重力と落下する石との関係において、根拠と根拠づけられるものとは切り離しえない、という見方が支持されることになる。

---

[52] 仏訳語の massivité からも全く同様のことを指摘できる。

[53] 風が大地の様々な物に音を立てている限り、音の根本には風があるが、風自体に音があるわけではない、と論じる荘子は、重力と諸物との関係について本稿で議論していることと等しい事態を風と諸物との関係に見て取っている、といえる。Cf.,荘子、2001,pp.23-26。この事態は、不連続とペアになっていない連続、‘多’とペアになっていない‘一’は我々の知覚に映じない、ということとも密接に関連している。この点については後述する。

（2）トートロジー

以上のように、根拠と根拠づけられるものとの、形式と内容との往還が同一的根拠関係を形成しているが、両極の接近がより一層進み、完璧に重なり合う、あるいは単純に同じようなものとなるなら、両者の関係はトートロジー(Tautologie, tautologie)となる。すなわち、根拠は根拠づけられるものであり、根拠づけられるものは根拠である、という同語反復的な関係となる(vgl.,S.81-S.84, cf.,pp.111-116)。例えば、「重力とは何か」という問いに、「石などを落下させる力である」と説明するならば、その説明は、根拠と根拠づけられるものとを交換可能とみなす、いわゆる循環論法となる。

同一性を前面に立てる形式的根拠がトートロジーに陥りかねない、ということは、換言すると、「同一性と非同一性との同一性」という命題の、最初の同一性と最後の同一性との違いがはっきりしていない、ということでもある。前者はテーゼとしての、後者はジンテーゼとしての同一性であるが、形式的根拠では両者がいわば綯い交ぜになった仕方で問題になっている。上に示した図 3 に定位していうなら、図 3 には実は第三の軸――縦軸と横軸とは次元を異にしていることを示すために「垂直軸」と呼ぼう――が隠されており、それが縦軸と横軸との対立を揚棄することになるのだが、この段階ではそれはいまだ潜在的である、ということになる。「各側面は、根拠であると同様に定立されたものであり、そして各々は、全体的な(ganz, total)媒介ないし全体的な形式である」(S.80, p.110)。この一文の「全体的な形式」はテーゼとしての同一性に、「全体的な媒介」はジンテーゼとしての同一性に該当するが、ヘーゲルは両者を「ないし(oder, ou)」で単に併置することで、根拠が即根拠づけられたものであるこの段階では、両者の違いがいまだ潜在的である、ということを示唆している。形式の根拠運動は、その運動そのものにおいて自らを定立されたものとし、その被定立をさらに根拠づけ、その運動をまた定立されたものとする、といった仕方で、自己自身を多重層的に根拠づけていく(vgl.,S.80, cf.,p.111)。この限りでは、形式的根拠も全体的なのだが、各極は他をいまだ理念的にしか含みこんでいない。「二側面のなかの根拠はいまだ実的には規定されておらず、それぞれは多様な内容をもっていない」(S.80, p.111)。両極の完璧な一致によって、両極は同一性の運動から押し出され、その外にあってかえってばらばらなままである、とみることもできる。そこで、他性を特徴づける多様性が根拠関係の内部に復活しなければならない。換言すれば、形式の同一的運動は、ぴったりと重なった両極の間に自らの運動を通して「距離(distance)」[54]を生み出していかなければならない。こうして、論理の運動は形式的根拠から実的根拠に移っていくことになる。

---

[54] 「距離」という言葉は、ヘーゲル自身ではなく、『大論理学』の仏訳者たちが注釈で用いているものである。Cf.,Hegel, 1976,p.111, note85。この後明らかにするように、ここでいう距離は、通常いわれるような、二つの場所や物の間に「存在する」隔たり、という意味ではないことに注意が必要である。筆者は以下の論文において、R. デカルトの空間論をヘーゲル論理学に引き継ぐ仕方で、距離をゼロと無限大を往来するものとして考察している。Cf.,福田、2017。なお、当該論文および本稿では、「自と同一であるところの永続する他有」という空間についてのヘーゲルの論述が距離にも妥当するものとみなし、距離と空間とを基本的に同義のものとして用いているが、本来であれば両者の比較検討を経たうえで、そのようにみなしうる根拠を明示する必要がある。また、空間という観点から本質論を解釈する理由についても――この後示すように努めるが――、詳しく論じる必要があるだろう。これらは今後の重要な課題である。

本稿の解釈を先取り的に述べておくと、この距離は、内容が形式と一致する論理段階を通過した限りでは、形式の水準にだけでなく内容の水準にもあり、形式と内容の統合を成立させる元になるものである。

(3) 死との関連

以上の議論を、本稿のテーマである死と関連づけてみよう。

死は或る意味で、究極のトートロジーである。我々は決して我々自身の死を経験することができない、という見方に定位するなら、生になりえない死は、死でしかない。生と死の関係を完全な不連続とのみ捉えるエピクロス的な態度は、死のトートロジーを純粋に認めることである、といえる。

既述のように、根拠関係の二極が接近に接近を重ねてぎゅーっと詰まって違いがゼロになると、同一性が成り立つ。この同一性はまさに gediegen である[55]。すなわち、二極がつくる稠密さが極限に達して同質となることで、連続性・同一性が成立する。別の用語でいうなら、これは「否定的統一(negative Einheit, unité négative)」(S.79, p.109)でもあるだろう。統一である限りそれは複数のものが一体となったものであり、媒介としての統一であるが(vgl., S.79, cf.,p.109)、統一の元にある違いは全くの潜在状態でしかない。その状態が A＝A 的なトートロジーとして我々に示されることになる。

このようにみるならば、トートロジーとは、「同語反復」という言葉が示すような、無くもがな(überflüssig, superflu)の論理ではない一方で、現代の記号論理学が示すような、それ自体が「論理的真理」を表すものでもないことになる。それは論理運動が必ず通過する或る段階であり、その段階を切り出して独立させると、「トートロジー」という一点が、我々の眼に断面的・静止的に現れてくるだけである。

3 章で例示した全身麻酔を受けた際の意識の連続性を、トートロジーとして成立する同一性の一例とみなそう。するとその同一性は、そこに違いが潜在化していくことで成立し、同時に、その違いが完全に潜在化することがないためにその連続的同一性は破られ、麻酔から覚めることになる、と解釈できるであろう。死は決して覚めることがない点ではその意識とは異なるが、あくまでその同一性の延長上にある。それは、Gediegenheit を体現した同一性となる。死を夢無き睡眠に例えるソクラテスの死生観の元には、同一性のこうした見方がある、とみることができるのではないだろうか。

形式的根拠が到達した同一性の運動は、実的根拠へと展開することで差異性・多様性を回復し、他性を帯びることになる。したがって、この論理展開をみることが、死の連続性が不連続と内的に結びつく論理を明らかにする礎となってくれるはずである。

4. 2. 実的根拠

(1) 同一性内部の自他往復運動

まずは、実的根拠の最初の一文を読み解こう。

---

[55] 先に述べたように、Gediegenheit は実的根拠の用語であり、根拠関係における二極の一致による差異ゼロを、根拠づけられたものの側から言い表したものである。ここでは二極一致が根拠の側から述べられているので、その点ではこの用語の使用は先取り的である。

「根拠の規定性は、既に示されたように、一方では、基盤の規定性ないし内容規定(Inhaltsbestimmung, détermination-de-contenu)であり、他方では、根拠関係それ自体における他有、すなわち、根拠の内容と形式との差異状態(Unterschiedenheit, état-de-différenciation)である」(S.84-S.85, p.116)。

本章 1 の最後で述べたように、形式的根拠の二極関係運動は、同一性に到達することで、両極の違いを同一性の外に押し出すことになった。この運動は、上述のように、やがて他有や差異状態を回復することになる。では、この他有や差異状態とは何だろうか。それらが同一性における単なる内的他のことなら、形式的根拠の場合と同様、それらは再び同一性の運動に包摂されることになるものでしかない。本稿では、2 章でみたように、ヘーゲルが空間を他有と捉えていたことを導きとして[56]、ここでいわれている他有・差異状態を、空間のことと解釈する。この空間は、本章 1 の最後に述べた距離に相当する[57]。この距離・空間の発生に関しては、根拠の規定性の一方の側面、すなわち、根拠関係運動が自らの基盤を既に生み出している、ということが重要な意味をもつ。実的根拠においては、この基盤が同一性の内側に喰い込むことになる。あるいは、基盤も同一性の運動そのものであることに鑑みるなら、運動の内からこれが隆起する、といってもよいだろう。この基盤を距離・空間に引き付けて解釈するならば、同一性の運動において両極がどれほど接近しようと自他の不連続が保たれるのは、同一性の運動がその内部に距離・空間をもつようになっているからである、と考えられることになる。つまり、同一性の運動に回収されないその内部の自他往復運動は、運動自身の内的距離・空間によって可能となるのである。

ヘーゲル根拠論の検討からは外れることになるが、内的空間についてのこの解釈と対応可能な知見をここで挙げておきたい。例えば、生物の発生および進化を、内臓をはじめとする、生物の内部に形成される距離・空間――「内なる外」(村瀬、2000,p.200)、「内なる外部」(永田、2017,p.18)――の視点から理解することができる(cf.,団、1996、村瀬、2000、永田、2017)、という知見が挙げられる。あるいは、喰う-喰われるの関係において露呈される、私の目に映じる前方と私の目に映じない後方とが分かれている、という生物の「宿命」も、生物を生物たらしめている不一致であり、距離・空間の問題として解釈することができるであろう。このことからすると、誰もが私の背中や顔を他者に預けている、という 3 章で指摘したことも、人間の意識やいわゆる実存の水準に限定されない、生物全般に通じる距離の問題として読み解く必要があることになる。以上の二点は、5 章の考察を導く極めて重要な論点となることに予め注意しておきたい。

この段階の論理運動は、他の段階にも増して激しい往復運動を繰り返すことになる。

「根拠と根拠づけられたものとの関係は、内容における或る外的形式として展開し、内容は、その〔＝外的形式の〕諸規定に対して無関心である。しかし、実際には両者は相互に外的ではない。というのも、内容は、根拠づけられたものにおける根拠の自己自身との同一性であり、かつ、根拠における根拠づけられたものの自己自身との同一性である、ということに存するからである。‥‥‥各々〔＝根拠と根拠づけられたもの〕は、それ自体において、全体のこの同一性である。しかし、各々は同時に形式に属し、そし

[56] ただし、2 章でも述べたように、空間についてのこの論述は、有論の、しかも補遺でなされたものである。ヘーゲル論理学全体を踏まえたより精緻な空間論を展開することは、今後の重要な課題である。註 54 も参照。

[57] 空間と距離を同義とみなすことについては、註 54 を参照。

て形式の規定された差異状態を構成しているので、各々は自らの規定性において、全体の自己との同一性である。かくして各々は、他に対して異なった内容をもっている。」(S.85, p.116)

根拠関係運動がここでは内容に定位して述べられていることに注意しよう。論理展開がやや込み入っているので、丁寧に読み解いてみたい。

内容が形式の諸規定に無関心であることは、形式的根拠の最終段階がその次の段階として自ずと紡ぎ出すことである。本章 1 で明らかにしたように、形式的根拠が担う同一性の運動は、形式と内容、根拠と根拠づけられたものとのいかなる差異も同一性の元に消化してしまう段階に到達した。そのため、それは自らの只中に他を再発見するためには、形式の運動に無関心な内容を求めることになる。同じことを視点を変えていうと、形式的根拠の最終段階では、同一性の運動があらゆる差異を自己の外に押し出すことになったため、差異を担う内容は形式に無関心になっている、ということになる。

しかし、内容が形式に対して無関心であるからといって、形式と内容、根拠と根拠づけられたものとは、相互に外的なわけではない[58]。換言すれば、両者の同一性が放棄されてしまうわけではない。両者の内的同一性は形式的根拠が獲得した成果であり、もしもそれが放棄されてしまうなら、否定性がもつ牽引力を背景としない、単なるばらばらな直接態の世界に戻ることになりかねない。

したがって、根拠関係運動から押し出された両極の差異は、形式の同一性を保持したまま、運動に再び組み込まれなければならない。そこで、差異を基本的に受け持つ内容の側でも同一性が問題となることになる。同一性が形式的にも内容的にも問題となることで、同一性の運動の外に差異が押し出されることがなくなり、形式と内容、あるいは根拠と根拠づけられたものとを共に含んだ全体という側面が表に出るようになる。

ただし、内容が全くの同一になるなら、内容の内には内容を切り分けるところの一切の形式がないことになる。つまり、内容は内容だけとなり、内容とペアを成す形式は全く消失することになる。そして形式が消失するなら内容も同様に消失し、内容と形式が共に作り上げる全体もなくなってしまう。

そのため、根拠と根拠づけられるものとが、同一性となった内容に属すると同時に、形式にも属していることが必要となる。根拠と根拠づけられるものとは、共に内容の只中に形式をもつことで、お互いの差異を保ち、それを規定された差異状態として――本稿の解釈だと距離として――構成することになる。このように読み解くならば、上記引用の最初にある、「内容における或る外的形式」とは、根拠運動における内的距離に発展していくもの、と解釈できることになる。

根拠と根拠づけられたものとは、これまで規定性を意味していた同一性の運動の中にいながら、同時に差異と一体となる。このことで、それらは同一性と差異とから成る全体としての自己同一性となる。こうして、一つの根拠関係において、内容が差異の中の同一性を獲得するだけでなく、形式的根拠では同一性に彩られていた形式の水準にも差異が回復することになる。この段階に至ることで、根拠と根拠づけられるものとは、内容的にも形式的にも、同一でありかつ差異である、という共存を成立させることになるのである。

[58] 先取り的にいうと、ここで問題となる無関心についても、運動が内的に生み出す距離・空間と対応するものと理解することができる。

このようなわけで、「根拠への回帰(Rückgang, retour)と、根拠から被定立に向けての離脱(Hervorgehen, acte-de-sortir)とは、もはやトートロジーではない。根拠は現実化される(realisiert, réalisé)ことになる」(S.85, p.117)。根拠への回帰を牽引力の、根拠からの離脱を反発力・斥力の働きと考えるならば、形式的根拠では前者が全面的に機能しているため、外に向かおうとする運動は絶えず内に引き戻されて原点に回帰する、といえる。その結果、本章1 で論じた、ぎゅーっと詰まった差異ゼロとしてのトートロジーが達成されることになる。したがって、形式的根拠の最終段階は、現実として我々の眼に映じることは決してない。こうした根拠関係が実的になるのは、それに斥力が働くことで、根拠関係の凝縮に裂け目やずれが生じることによってである、といえる。このずれは根拠関係における内的空間であり、それが根拠に厚みをもたらし、やがて根拠を現実化させる(realisieren, réaliser)。牽引力と斥力の均衡がジンテーゼとしての統合を意味するとするなら、ここでは牽引力に対して斥力が勝り、それが距離の生成を引き起こすのと表裏一体に多様性を生成していく。この生成は、いわゆる理念にとどまらない現実の生成であり、根拠の多重層化と一体となった出来事である。

（2）科学と内的空間

以上の根拠論解釈を、具体例に引き付けてより明確にしてみよう。

原子から電子・陽子・中性子へと分離することは、原子という「単体」に内的な距離・空間を生み出すことと同義である、と理解できる。原子は当初、文字通りの a-tom として、それ以上分割できない最小単位にみえた。ヘーゲル的にいうなら、それは自己の内で自己を完全に根拠づけているものにみえた。本稿の言い方だと、その内部に空間を穿つことは不可能に思えた。ところが、「根拠は、実的根拠として自己を規定している限り、自己の現実(Realität, réalité)を構成している内容の多様性(Inhaltsverschiedenheit, diversité-de-contenu)のゆえに、外的諸規定に自己分割する(zerfallen, se décomposer)ことになる」(S.86, p.119)。原子という最小単位は、ぎゅーっと詰まった差異ゼロとしての同一性であるため、その実的根拠が自己分割すれば、多様性はいわばいくらでも生み出されてくる。

素粒子物理学における粒子衝突実験を例に、このことを考えてみよう。「粒子を高速に加速して衝突させる世界初の加速器」は「一九三二年に」作られ(アクゼル、2011,pp.108)、「原子を小さな部品へと破壊（スマッシュ）」できること、つまり、「エネルギーを使って原子核を破壊するとその構成部品が出てくること」(同,p.109)が、始めて実験的に示されることになった。本稿でのヘーゲル理解を適用すると、これは、ぎゅーっと詰まった差異ゼロとしての粒子に差異を生み出していく典型的な試みの一つ、とみることができる。見方を変えれば、論理そのものが行っている同一性と差異の間の闘争に、物理学者が差異の側に立って参入したもの――これ自体も論理運動の一側面である――、とみることもできる。近年の CERN（欧州原子核研究機構）の加速器も、以前のものとは比較にならぬほど大掛かりな装置であるが、本質的には全く同様の機能を果している(cf.,同,p.110-114)。重要なのは、そのような装置で特殊な状況を用意し、数知れぬ回数の実験を繰り返しても、物理学者にとって有意味な結果が

得られるのはごく稀でしかない[59]、ということである。このことは、粒子が極限まで凝縮した差異ゼロであり、極めて強固な同一性として成立していることを示している、と理解できる。一方、いかに強固な同一性であれ、その差異ゼロに間隙を穿つ方法や確度の洗練化はとどまるところを知らない。このことは、一層の研究のために CERN の加速器以上の装置が建設されようとしていることからも示唆されるであろう。

以上に関連して、科学にとっては研究対象が我々の知覚に映じること、特に見えることが極めて重要である、ということ――このことをきちんと論じるには知覚に踏み込んだ考察が本来必要だが――を指摘しておこう。対象が観察・観測できない場合、それは仮説ないし前提ではありえても根拠づけられたものではなく、したがって「発見」とはならない。よくいわれるように、科学では、仮説を立てたら、それが実験によって必ず「検証」されなければならない。科学の進展は、マクロ・ミクロ共に、望遠鏡や顕微鏡といった我々の見る能力を増大させてくれる装置の進歩と切っても切り離せない。研究が極めて高度化した現在でも、例えば新しい化学元素は、その観測を通して元素と認定されるし[60]、生命の未知の事象や機能も、それを引き起こしている物質の同定がなされることで既知となる(cf., 高木、2014,pp.45-48)。対象が忽ち消失してしまい観測可能時間がごく僅かである場合や、そもそも対象の痕跡や事後的に再現されたものしか観測できない場合にも[61]、観測すなわち知覚することそれ自体は相変わらず重要で、それができない限り、対象は前提にとどまる。ヘーゲルに従っていうなら、前提は反射の水準で問題となるもので、その水準をこえて根拠に至り、しかも根拠が実的である、ということが科学にとっては重要である。ヘーゲルと科学との最初の本格的な接点は、実的根拠に求められる。このことは、ヘーゲル論理学では実的根拠の段階で「現実」がようやく迫り出してくる[62]、ということにも示されているだろう。ヘーゲル論理学が観念論の系譜に位置づきながら、「現実」と「内容の多様性」という論点を明確に打ち出していることには、特段の注意を払っておきたい。

現実は内容の多様性によって構成され、我々の知覚対象となる、ということは、視点を変えていうと、完全な連続性は我々の知覚には映じない、ということでもある[63]。例えば原子

---

[59] アクゼルの次の説明はこのことを明瞭に示している。「CMS 検出器〔＝「コンパクト・ミューオン・ソレノイド」と呼ばれる巨大な検出装置〕の運転中、その内部では一秒間に何十億個もの陽子が衝突する。〔G.〕トネッリ〔＝CMS グループのリーダーである素粒子物理学者〕の説明によれば、そのうち一〇万回にたった一回が科学的に大変興味深い可能性のある『異常事象』だという。その中からさらに高度なアルゴリズムによって取捨選択された一秒あたりわずか三〇〇の事象が永続的に記録され、完全に再現されて物理的な分析にかけられる。それらの興味深い粒子衝突のうち一秒あたり一回ほどがスクリーンに表示される。一秒未満しか表示されない複雑な画像を人間の目はうまく認識できないからだ」(アクゼル、2011,p.23)。

[60] 例えば理化学研究所が「ニホニウム」と命名した新元素の発見は、その一例に挙げられるだろう。

[61] 註 59 参照。

[62] 本質論において、注解(Anmerkung, remarque)を除き、「現実」という言葉は本章 2 の引用ではじめて用いられている。

[63] ヘーゲルは、「形式と質料」という項の一節で次のように述べている。「我々は、質料そのもの(die Materie, la matière)を見たり触れたり、などすることができない。我々が見たり触れたりするものは、或る規定された質料(eine bestimmte Materie, une matière déterminée)であり、すなわち、質料と形式との或る統一である」(S.72, p.99)。換言すれば、質料という連続性は、形式によって規定されて不連続になることで、我々の知覚に映じるようにな

が分割できず、その内部に距離を穿つことができない、ということは、言い換えれば原子の内部は連続性を保っている、ということである。原子内部の連続性は、電子と原子核という不連続とペアになって、はじめて我々の知覚対象となる。 そうである以上、科学は、連続性を不連続とペアにしていく営みである、と表現することもできる。

（3）実的根拠と科学との結びつき

実的根拠と科学との強い結びつきは、次の論述にも示されている。「内容規定は、根拠と根拠づけられたものとから、単純に同一である(einfach identische, simplement identique)ところのものを構成する。こうして、根拠づけられたものは根拠を自己内に完全に含みこんでいる」(S.86, p.118)。つまり、実的根拠においても、根拠関係における両極の一致が問題となるが、それは根拠づけられたものの側で成し遂げられることになる、ということである。

この一致こそ、科学研究の究極の目的を指し示すもの、と解釈できる。例えば、化学元素の周期表は、物質がどのように構成されているのかを我々に教えてくれる。あるいは、DNA螺旋構造は、生命がどのように「設計」されているかを我々に教えてくれる。両者が科学史における画期的な成果や発見と目されているのは、前者は物質の構成を、後者は生命の情報を、余すところなく描き出そうとする科学者の努力が結晶したものだからである。ヘーゲルに従っていうなら、両者は、根拠を自己内に含みこんだ根拠づけられたものである。その含みこみが完全に近ければ近いほど、すなわち、根拠と根拠づけられたものとが後者において一致すればするほど、科学的には価値が高い。根拠関係は、否定性を受け継ぐ根拠の運動である以上、運動の内部から湧出する否定の運動でもあるわけだが、その否定を根拠づけられたものにおいて終わらせようとする野心が科学者にはある、といえるのではないだろうか。その野心は、否定の終結を目指すものである限り、「ポジティブで無関心な(gleichgültig, indifférent〔＝無差別な〕)基盤」(S.86, p.118)を獲得することにある。

しかしながら、根拠関係における根拠と根拠づけられたものとの一致を後者の側で果す場合にも、前者の側で果す場合と同様の事態に至る。前者の場合、内容あるいは根拠づけられたものが同一性の運動の外に飛び出てしまったが、後者の場合には、形式あるいは根拠が同一性の運動の外に飛び出してしまう。そのため、根拠関係の同一性は、二極が究極の一致点に到達したかにみえるまさにその時に崩れることになる。二極の差異――実的根拠では内容の中で形式がそれを紡ぎ出している――こそ内容の多様性であり、既述のようにそれが根拠関係を現実として構成している限り、この事態は論理運動が辿る当然の帰結である。こうして、根拠を自己内に完全に包摂した根拠づけられたものは、再び根拠を必要とすることになる。

論理のこの展開は、科学の実際の進展と合致している、とみることができる[64]。先述の例でいえば、物質の構成要素の全体像を教えてくれる化学元素の周期表は、例えば原子がもっているエネルギーについては明らかにしてくれないがゆえに、原子の内部に入り込む研究を自らの根拠として必要とすることになる。あるいは、遺伝の基本的メカニズムを教えてくれる DNA の塩基配列は、例えば数世代後に発現する遺伝への環境影響については明らかにし

る、ということである。なお、このように述べるためには、そもそも知覚とは何かについても考察しなければならないが、それは今後の課題としたい。

[64] あくまでこの段階の論理展開が科学の進展と合致している、ということである。

てくれないがゆえに、DNA やそれが巻き付いているヒストンに付着する化学修飾物の研究を自らの根拠として必要とすることになる[65]。根拠づけられたものと根拠とのこうした交替運動は、高度に発展した素粒子研究にもさらなる展開がまっていることが示唆するように、どこまでも続いていくであろう。

自己内に根拠を完全に含む根拠づけられたものは、新たな根拠を必要とするがゆえに、その内部において根拠との‘ずれ’を不断に生み出していく。否定を終わらせるものとしてポジティブで無関心・無差別な基盤が登場したが、その内部でさらなるずれが生じることで、新たな基盤が発生することになる。このように、内における外、ネガにおけるポジの発生には終わりがないため、「根拠関係は、自己自身に外的になった」(S.86, p.119)ものとなる。こうして基盤が複数化されていくことは(vgl.,S.86, cf.,p.119)、内容の多様性すなわち現実を確保するためには必須であるが、根拠の根拠のそのまた根拠を際限りなく連れてくる悪無限への道と背中合わせである。この点で、形式的根拠が前面に立てる同一性・統一・‘一’と、実的根拠が前面に立てる差異・多様性・‘多’との統合が図られなければならないことになる。

これまでの考察に基づくなら、ポジティブで無関心な基盤が、根拠における出発点への回帰運動の鍵を握っている、と理解することができる。ヘーゲルのいうGleichgültigkeit(indifférence)は、無関心という外と、無差別という‘一’との両方を含んだ概念である。無関心な基盤は、確かに外的であるが、差別を可能ならしめる同一な外であり他である。このことを、基盤を物体のあらゆる運動の元にある空間と読み解こうとする本稿の解釈と合わせて、改めて確認しよう。この‘他なる一’の理解を、規定された根拠を締めくくる「全面的根拠」においてさらに深めることにしたい。

4. 3. 全面的根拠

（1）唯一の同じ内容

上で明らかにしたように、実的根拠の最終段階において、根拠は新たな根拠を必要とすることになり、二つの根拠の関係は外的である。ヘーゲル論理学では、根拠ないし根拠運動も、根拠づけられたものも、いずれも根拠関係であり、ここで問題になっている最初の根拠も新たな根拠も共に根拠関係である、ということに注意しよう。

ヘーゲルによれば、両者の関係が外的であることから、次のことが導かれる。「この〔新たに発生する〕第二の〔根拠〕関係は、〔最初の根拠関係と〕ただ形式に従ってのみ違っているものとして、最初の〔根拠〕関係と同じ内容を、すなわち、二つの内容規定をもっているが、それは二つの内容規定の直接的なつなぎ(unmittelbare Verknüpfung, liaison immédiate)である」(S.92, p.126)。つまり、第二の根拠は、最初の根拠と自己自身とを、自らのなかで外的・直接的に一つにまとめている。内容が前面に立つ実的根拠を経たいまや、最初と第二の根拠は共に内容である。そして、実的根拠では根拠と根拠づけられたものとが内容の水準で一致している以上、両者は内容とは無関係な形式の水準で、換言すれば単なる規定の水準でのみ異なっていることになる。かくして両者は、同じ内容をもった、二つの内容規定であ

[65] DNA や DNA が巻きついているタンパク質には様々な化学修飾物が付着しており、その修飾物が遺伝に重要な機能を果し、その付着および離脱に環境が強く影響していることが、エピジェネティクスと呼ばれる研究領域において、近年精力的に明らかにされている Cf.,Francis, 2011、太田、2011、太田、2013、仲野、2014。

る。実的根拠の最終段階では形式の同一的運動を根拠関係の外に放逐してしまっている限り、両者の関係は、「反射的(reflektiert, réfléchi)ではなく、ただ単に直接的であり」、「相対的(relativ, relatif)」である(S.92, p.126)。本稿の言い方だと、両者の間には距離があり、また、両者と両者のつなぎとの間にも距離がある、ということになる。

以上の論理を具体的に理解するために、最初の根拠関係を、原子と想定しよう。原子は原子という仕方で根拠づけられた根拠関係であるが、この根拠関係から、第二の根拠関係が出てくる。それは、原子という根拠づけられたものを根拠づけている、いまだ電子や原子核としては定立されていない運動である。この第二の根拠関係、すなわち、差異ゼロで否定性の運動がストップしたかにみえた基盤のその先に出てくる根拠は、最初の根拠関係とは異なり、いまだ根拠づけられていないことに注意しよう。この新しい根拠が、科学に発見をもたらすと共に、その終わりなき探求を導いている、と理解できる。最初の関係が根拠づけられたもので、第二の関係が根拠である、というこの違いは、内容は同じだが形式が違っている、というこの段階の論理の要となっている、といえる。

「二つの内容規定とそれらの関係」が、「唯一の同じ(ein und derselbe, un seul et même)全体的な内容」である(S.92, p.126)、という点が、この段階の根拠運動を特徴づけている。根拠のその先のそのまた先の根拠、という仕方で外的な根拠が次々と出てくる実的根拠は、これらの根拠が同じ内容であり、かつ、それらのつなぎも同じ内容である、という全面的根拠へと自ずと合流していく。実際、科学が行う発見は、ここで前面に立てられている「同じ内容」を前提としているはずである。例えば、原子という根拠が電子と原子核として発見されることになる根拠と同じ内容であるからこそ、その内容に電子と原子核という形式が新たに穿たれうることになる。

複数化されていく根拠がいずれも同じ内容をもつことは、上記の通り、それらをつなぐものもまた同じ内容を共有していることでもあるのだが、ヘーゲル論理学の核心をなすこの点については後に検討する。

（2）内容と形式からみた科学の発見

諸根拠が同じ内容をもつ、という点についての本稿の解釈を明確にするため、今度は生物学の例を取り上げよう。染色体がタンパク質と DNA で構成されていることが明らかになった際に論争となった、「両者のいずれが遺伝情報を伝えているのか」、という問いに着目しよう。この問いに対し、生物学者たちは、両者を直接態として見比べる段階を経て、各々の「その先」に新たな根拠を導き出す段階へと到達した、とみることができる。実際、遺伝現象の多様さに鑑みて、多種多様を特徴とするたんぱく質を遺伝物質とみる 1950 年代以前の予想は(cf.,村瀬、2000,pp.95-96)[66]、事象を直接態の水準で理解しようとするスタンスとして理解できるであろう。上記論争の決着に大きく貢献したのは、「形質転換」を引き起こす実験である(cf.,太田、2011,p.18)。形質転換とは、ある遺伝形質をもつ細胞から抽出した DNA 分子をその形質をもたない細胞に与えることで、後者が前者の形質を獲得することになる現

[66] 村瀬は次のように述べている。「核酸がたった四種類の塩基しか持たないのに対して、タンパク質ははるかに多くの種類のアミノ酸を持つ。そのために、タンパク質の方が核酸よりも複雑な分子であり、遺伝情報を担いうると〔1950 年代以前には〕考えられていたのである。分子生物学の立役者となったマックス・デルブリュックでさえ、当時は核酸を‘まぬけな分子’と呼んだほどであった」(村瀬、2000,pp.95-96)。

象である(cf.,石川他、2010,p.375)。この実験から DNA を遺伝物質とみなすことができるのは、この実験において、DNA の内容が間違いなく同一なまま保持されている、と生物学者たちが確信でき、この確信の元で、DNA という根拠に新たな根拠運動を導くことができたからであろう。

この新たな根拠運動はいまだ根拠づけられたものではない。生物学史が示しているように[67]、遺伝物質を DNA と特定した根拠運動は、DNA という根拠のさらなる「その先」を促す。例えば、多種多様なタンパク質が均一にみえる DNA からいかに作り出されるのか、という新たな問いを生むことになる。この問いを根拠として、遺伝物質として根拠づけられていた DNA は、塩基が規則的に組み合わさった二重螺旋構造として発見され、そのことでさらに根拠づけられたものとなる。F.クリック・G.ワトソンらが成し遂げたこの発見は、生物学を一変させた「革命」とみなされている。だが、塩基配列の視点から、その発見はさらに「遺伝暗号」として根拠づけられ、またさらに、直線的な塩基配列から成る遺伝暗号において、一つの遺伝子はどこで終わり、次の遺伝子はどこから始まるか、という問いを生むことになる。この問いすなわち根拠運動は、「一つの遺伝子＝一つのタンパク質」という公式すなわち根拠づけられたものを生み出し、その根拠づけられたものは、それを逸脱する現象が見出されることで、「その先」へとさらに引き継がれていくことになる。

こうして順次進展していく研究の各ステップにおいて、生物学者は研究対象に新しい内容を付加しているわけではない。「一方から他方は、根拠と根拠づけられたものとしての形式に従ってのみ区別される」(S.92, p.126)。つまり、生物学者は、遺伝に関わる同じ内容に新たな形式を穿つことで根拠を根拠づけられたものとし、新たな研究成果を挙げることになる。内容と形式のこの関係をヘーゲル反射論の用語で表現するなら、研究におけるいかなる内容も、前もってそこにあったことが見出される(vorgefunden, trouvé-déjà-là)もので、内容をそのように見出す(finden, trouver)のが形式である、ということになる。このことに従うなら、内容を過去に、形式を未来に引き付けて理解することが可能となる。内容への形式の穿ち方が劇的であったためにクリック・ワトソンらの発見(discover)はことのほか有名になったが、あの美しい DNA 二重螺旋構造も、その後の形式運動に引き継がれていく形式の一つにすぎない。発見とは、内容がそのようであった通りに我々の眼に露にする、という意味で、文字通り dis-cover(Ent-deckung, dé-couverte)である。未来に向けて新たな形式が穿たれれば穿たれるほど、そこに過去から途切れることなく続いている内容が、覆いを取られて姿を現わす[68]。DNA は、過去から現在に至るまでクリック・ワトソンらが発見した通りのもので常にあったし、今後の発見においても、常にそのようであったものとして姿を現わすことになる。このように、内容は形式運動がいくら進もうと連綿と続く唯一性を保持する。だが同時に、それは発見という形式を通してのみ明らかになる。だからこそ、研究の進展に従って、生物学用語は膨大となり、遺伝子やゲノムといった重要用語はその定義さえも微妙にあるいは画然と変化させる――この変化自体、内容が同じであることにより可能となる――、という仕方で形式が増殖していくことになる。

---

[67] この段落では、以下の著書の論述を元に生物学史の展開を概観している。Cf.,Francis, 2011,p.15。

[68] この限り、発見は現在における未来と過去の一致である、といってもいいだろう。

以上の考察に基づくと、根拠づけられたものにおける否定の運動を――換言すれば、さらなる問い・追求を――終結させ、究極に到達しようとする科学者の野心は、実は形式を介して内容の唯一性へと向けられている、と解釈できることになる。上述のように、科学者の発見は形式であるにもかかわらず、科学者が問題とするのは内容である。内容は、それが唯一である限りでは、科学者が追い求める究極――例えば宇宙誕生の「瞬間」やその刹那の粒子運動――に相応しい。だが、それは必ず形式を介さなければ現れ出ない限りでは、その追求は必ず道半ばとなる。内容を追求すればするほど、一層形式が際立った重要性を帯びることになる。実的根拠から再び形式的根拠に戻るかのようにみえるこうした論理展開は、多様性と結びつく現実を見失うことにはならない。ここで問題となる形式は、もはや、多様な内容を外に絞り出してしまったトートロジーとしての同一性でなく、根拠づけられたものの側で達成された一致・差異ゼロの只中で、絶えず復活してくる根拠運動のことである。この段階では、形式こそが多様性の基準となっており、内容は、唯一・同じの側にあることを確認しよう。

ところで、実的根拠では多様性と一体となっていた内容は、全面的根拠のこの段階では以上のように唯一性と結びつくようになっている。また、同一性をその特徴としていた形式は、ここでは多様性の基準となっている。常識的思考に反する概念規定のこうした逆転は、二極の激しい往復運動の現れであり、ヘーゲル特有のペア論理を形成する元である。‘一’と‘多’は論理全体を貫く二極であり、それらは内容や形式においても激しく往復している。内容も形式も二極のペア論理に貫かれており、それぞれにおいて、論理運動は‘一’を追求すればするほど ‘多’に出、‘多’を追求すればするほど‘一’に出ることになる[69]。いかなるものも対立二極の一体であり、論理それ自体が静とペアをなしながら動いていく、というヘーゲル論理学の基本を、ここで改めて思い起こしておきたい。

（3）外という概念の重要性

以上のように、唯一の同じ内容の只中から形式が再湧出するとはいっても、‘一’は内容の側に、‘多’は形式の側にある以上、内容と形式はいまだ離れており、二元論的である。以降では、こうして一旦離れた‘一’と‘多’が再び接近に向けて動き出すさまを明らかにしよう。

このことを明らかにするうえで、ヘーゲルが、本稿でいま問題になっている箇所の少し前のところで、最初の根拠と同じ内容をもつ「新たな根拠は‥‥‥二つの内容規定の絶対的な関係である」(S.91, p.125)、と述べていることに注意しておきたい。この論述は、両者の相対的な関係の次の段階を示している(vgl.,S.91, cf.,p.125)。

「絶対的」という術語は、「他に比較・対立するものがない」という通常の意味を保ちながら、ヘーゲル論理学では、ペアを成すべき他が全く潜在的である、あるいは、他は潜在化されてすべてそこにある、という意味で用いられている。本稿のこれまでの考察と関わらせるなら、ヘーゲルのいう絶対とは、出発=帰着点のゼロ点のことである。絶対は、ぎゅーっと凝縮されて差異を締め出し「差異ゼロ」として確立された同一性が、結局のところ、差異

[69] 南にどこまでも行って遂に究極の南＝南極点に辿り着くと北ばかりになる、という南と北の関係は、ここに述べた‘一’と‘多’の関係と照応する具体例といえよう。

を自己の中に潜在させている、という論理展開と緊密に対応した概念である、と解釈できる。

絶対的関係においては、比較されるべき他はもはや外的ではなく、関係を成す対立二極として関係の内に潜在するようになっている。見方を変えれば、絶対的関係は、差異性と同一性との同一性を、いまだ潜在的にしか成立させていない。単なる外的関係であった二極は、絶対的な関係を経由することで、本格的な統合へと向かうことになる。

以上を踏まえて、‘一’と‘多’の再接近を明らかにしよう。

形式が内容に再湧出する、ということは、形式的根拠が根拠関係に再浮上する、ということでもある(vgl.,S.91-S.92, cf.,pp.125-127)。ただし、形式的根拠は、ここでは実的根拠に基づくことでしか自己の本性である同一性を再確立しえない。なぜなら、上述の通り、いまや内容こそが唯一性を担っているからである。一方、科学研究を元に本章 2 で明らかにしたように、内容は、形式に即し、形式を通してしか現れ出ない。それは、根拠と根拠づけられたものとの、遡るなら、本質と直接態との差異を貫く唯一性を担保しているが、その差異を作り出している形式のおかげで内容として現れ出る。唯一性の観点からいえば、唯一性が形式に従って分割されることで内容は内容となる、ということになる。

内容のこうした自己分割は、内容がまたバラバラになることではなく、内容が形式を自己の内に、再度——内容はそもそも質料に形式が結合したものであるという意味で——取り込むことにより(vgl.,S.92, cf.,p.127)、自らを多重層化していくことである。これをヘーゲルは、「二重的(gedoppelt, double)内容」(S.92, p.127)と表現している。内容(In-halt)の本性は、先に確認したその出自からも、「内に容れる・持つ」という意味においても、二重的である[70]。

この本性に照らすと、‘唯一の同じ’内容は、内容の出発点にテーゼとしておかれた——内容そのものも論理の運動であることに注意しよう——、いまだ現実化されていない単なる理念としての内容である、と理解できる。二重的内容というやや贅言的な表現は、論理が現実の内容を問題にする段階に入ったことを明示しているであろう。内容が多重層化し、我々の知覚に映じうるような厚みを——本稿の解釈だと、根拠関係の内的空間がもたらすものを——もってくる、ということは[71]、現実を保証する差異・多様性が、今後はこの二重的内容において認められるようになることを意味している。

唯一の同じ内容からみると、形式は内容の外にある。「内容はまずは直接的な同一性を構成している」(S.92, p.127)、とされるように、唯一で同じ内容は、諸物をいわば一次元的に捉える直接態の名残を引きずっている。根拠と根拠づけられたものとの形式的差異が共通とみなされるのは、まずは「外的比較(äußere Vergleichung, comparaison extérieure)」(S.92, p.127)によってである。この外が、内に喰い込んで絶対的なゼロ点を経由しそこから再湧出することで、現実が出来する。

---

[70] 年輪が樹木を、地層が大地を形成している、という現実の事例も、内容を「二重的」とみる視点を支持しているであろう。なお、「二重的内容」の「内容」をヘーゲルはイタリック体で強調しているが、これも、内容が元々二重的であることを意味するためであろう。

[71] 繰り返し述べたように、我々は厚みの全くない点、完全な連続性、単独の‘一’を、それ自体としては知覚できない。点は線とペアになることで点として我々に捉えられるようになる。

このように、この段階で問題となっている外は、もはや内の単なる反対概念でないのはもちろん、単なる外的視点でもない。外は内とのペアを成すことで外となる。といって、それは内に回収されて飼い馴らされるようなものでもない。外、およびこれを前面に押し出させる唯一で同じ内容は、否定性の運動の重要な獲得物である。これを内に安易に解消してしまうと、根拠と根拠づけられたものとは、悪い意味でのトートロジーに陥りかねない。二極の一致は、そうたやすく達成されるものではない。ヘーゲルは、‘外’に、すなわち、科学技術が典型となるような、人々の「心」も含めて現代社会を根本的に規定しているところのものに、巨大な意味や役割を認めている。そのうえで、それを包含する論理を提示しているところに、ヘーゲル論理学の最大の今日的価値がある、といえる。外という概念は、ヘーゲル理解の試金石となることを、ここで確認しておきたい。

（4）‘一’の外からの到来と内からの湧出

以上の問題提起を受けて、ヘーゲル論理学の核心をなすとのみ上で言及していた、「根拠の運動においては、複数化されていく諸根拠だけでなく、それらをつなぐものもまた唯一の同じ内容をもっている」、という点を明らかにすることにしよう。

本章 3 の最初で述べたように、諸根拠の関係は、第一の根拠と第二の根拠とを、あるいは根拠と根拠づけられるものとをつないでいる。つなぎは「直接的」で「外的」(S.91, p.125)なものであるが、このつなぎの役割をきちんと理解することが、根拠関係運動の最終局面を読み解く鍵となる。論理展開をやや先取りすると、つなぎが根拠運動に内化していくことで「媒介」となり、外が内に喰い込んでいくこの運動が、ジンテーゼの達成に向けての一プロセスとなる。媒介は、二極往復のなかにその姿を隠したり、運動そのものとして現れたりしつつ、ヘーゲル論理学のすべての段階で決定的な役割を果している。

つなぎは、それがつなげるところの諸項とは異なるもので、それらの外にあり、だからこそ、諸項をつなぐことができる。したがって、つなぎはそれがつなぐ諸項と同じ‘では無い’。だが既述のように、両者は同じ‘で有る’。同じ‘では無い’両者が同じ‘で有る’ということは、両者の関係が、分離における結合、非同一性における同一性へと展開していることを意味している。この展開に特有なのは、諸項の外にあるつなぎが‘一’を形成していること、つまり、‘一’が外から到来していることである。

そしてこの到来は以下のように、それとは反対方向の、内からの‘一’の形成を背景としている。本質の否定性は、無から無への運動→反射→根拠、そして根拠においては、形式的根拠→実的根拠→全面的根拠、と論理の各段階を経るなかで、外に到達し、このことによって、その内で暗々裏であった‘一’を、外の側で明示することになっている。‘一’が暗々裏であるとは、‘多’が否定性という一つの運動の外に置かれていること、つまり、有と本質とが離れ離れになっていることである。そうである以上、否定性は‘多’を咀嚼しながら外に到達し‘一’を内から湧出させることになっている。

ヘーゲルは、「二つの内容規定」、すなわち根拠と根拠づけられたものとを同じとみなすうえで、先に述べた外的比較と共に、「両者の同一の基体(Substrat, substrat)と両者の関係の基盤」(S.92, p.127)に言及している。このことから、第一と第二の根拠に対する第三項として

の外的視点は、ここで同一基体・基盤として発展的に捉え直されている、と理解できる[72]。この捉え直しにより、‘一’が外・他の側で確立されることになる。

この‘一’の確立は、先取りして述べておいた、つなぎが根拠運動に内化されて媒介となることと対応している。つなぎから媒介への展開は、第三者としての‘外’から二極の‘間’としての内への運動であるが、この運動は上に明らかにしたように、潜在的‘一’を顕在的‘一’にする、内から外への運動でもある。二極の激しい往復において、これまでは二極が際立っており、二極の‘間’は往復運動に潜在的であるか、もしくは、——ヘーゲルにおいては同じことを意味しているのだが——その外にあって比較のための外的視点でしかなかった。だが、実は両者間の媒介がその往復運動を成立させていたのであり、それが顕在化することで、二元論は二元的一元論へと展開していく。この点に関するヘーゲルの論述は永延と続き、それをこれまでと同様に逐次追うのは今後の課題とせざるをえないが、要するに、諸段階を経た否定性の運動は、実は直接態との媒介であった——例の如く、未来に向かう運動は過去に到達する——ものとして自らを表現し、自らの内から生み出したその第三の地点——本章 1 で「垂直軸」と呼んだもの——を梃子に、二極往復から二極一体へと自己展開していくことになる。このように、媒介は論理運動におけるジンテーゼを表立たせるものなのである。

なお、これまでの論述からも示唆されるように、ヘーゲル論理学は‘間の哲学’といってもいいものであるが、この‘間’が基盤といういわゆるどっしりとしたものと関連づけられていることで、二項間のいわゆる「空」がこの世の真の姿であり、あたかも本物であるかのように見える諸項は実は幻想で虚しい、などといったニヒリズム的スタンスに陥るリスクが回避されている、と理解できるだろう。このように、この段階の論理運動が外や他の側で担保されている唯一性を通過している、ということは、ヘーゲル論理学に提起されうる誤解を解く鍵ともなる、極めて重要な側面なのである。

以上を理解するならば、根拠関係運動が辿り着く以下のような最終地点は、明快に理解できるであろう。

> 「実的根拠は、根拠の自己への外的反射として示されることになる。根拠の全面的媒介(vollständige Vermittlung, médiation complète)は、根拠の自己との同一性の再確立である。しかし、根拠の自己同一性は、それが再確立されることで、実的根拠の外面性(Äußerlichkeit, extériorité)を同時に受け取っている以上、形式的根拠関係は、それ自身と実的根拠との統一において、自己定立する根拠であると共に、自己揚棄する根拠でもある。根拠関係は、自己の否定を介して、自己と自己媒介している。」(S.93, p.128)

根拠関係は、形式的根拠で確立した同一性を、実的根拠を経由し、全面的根拠において再確立することになる。その同一性はもはや、否定的統一性としての厚みのない同一性ではなく、外面性を受け取った全面的媒介である。それは、根拠関係が自らの内に自らのものとして携えている否定運動を介して、自己を揚棄しては——この揚棄により直接態が出てくる——再確立する自己同一性である。根拠を内から形成している否定運動は、いわゆるどっしりとした基盤としての外面性とペアをなしているが、そのジンテーゼは、この段階においては外面性の側でなされている、と理解することができる。

---

[72] 基体についてアリストテレスなどを通して検討することや、基体と基盤の異同を明確にすることなどは、今後の課題とする。

以上で詳論した根拠関係は、論理運動が通過する一段階であっていまだ有限であり、媒介の真の関係に向けてその段階は乗り越えられていく。論理運動は、この後も幾多の段階を経ながら連綿と展開し、最終的には否定性・主体性の側で統合を果すことになる。本稿では、それが自らの内に二極関係を掌握する第三地点・垂直軸――考察が中途であるためこの呼び名も暫定的であるが――を浮上させたところまでで、ヘーゲル論理学の解釈を閉じることにしたい。

（5）無限と有限の媒介としての空間

全面的根拠の以上の論理展開が科学といかに関連しうるかを明らかにしたい。そのために、粒子の発見史を再度取り上げよう。

物質は、その内の物質自身であるところの否定運動を介して、自己を揚棄して原子という直接態を立て、自己を根拠づける。同様に、原子は自己を根拠づけるのに、その内の否定運動を介して自己を揚棄して素粒子を立て、素粒子も、その内の否定運動が自己を揚棄してクォークを立てる。根拠関係――既述のように、科学者の眼差しが向かう物質や粒子も根拠関係である――における否定運動は基盤とペアをなしている、という先の解明に従うと、上述の推移は、否定運動の展開であり、かつ基盤の生成でもある、とみることができる。この基盤を、これまで主張してきたように距離ないし空間とみなすなら、例えば、単独の同一性として確立されている原子――その意味ではこれはトートロジーである――を、電子と陽子と中性子とに分割したことは、原子内に距離を生み出したことを意味していることになる[73]。

全面的根拠関係における論理運動は、二極を単なる外的関係とみる段階をはるか昔に乗り越えている限り、ここで問題となる距離は、何かと何かの間に「ある」と素朴に思われているような、単なる直接的な距離・空間のことではない。それは、牽引と反発の関係に従って、本質の二極一体運動においてゼロから無限大までを自己展開していく内的な距離のことである[74]。牽引力が強力に働く段階において二極の絶対的関係を形成する際に、距離はゼロとなる。物質の最小単位とは、距離の側からみるなら、内部距離ゼロを意味している。新粒子は、その段階から距離が自己反発しない限り物理学にもたらされることはない。逆にいえば、距離の自己展開は反発の方向にも無限大に続いていく限り、あくまで原理的には、新粒子の発見には限りがない、ということになる。

電子・陽子・中性子の発見は、上で述べたように、それらがそうであった通りに我々の眼に露になることであり、反発の働きを示すものでもあるが、このことは、距離・空間の生成と全く一体となっていることになる。完全な連続性は我々の眼には決して映じない、という本章 2 の議論を思い起こそう。電子・陽子・中性子が物理学者の眼に映じていなかったことは、原子内部の空間が全く連続的であることと、すなわち、否定運動とさえもペアをなしていないことと同義である。距離ゼロの内部から否定性の運動が湧出し、それが原子という同一性・唯一性を分割することで各素粒子を出現させることになる。そして、このこと自体

[73] 実際、19 世紀には「単純で構造のない球」(Singh, 2005,p.289)と考えられていた原子に電子と原子核を発見したことは、「原子のほとんどはからっぽの空間(empty space)である」(ibid.,p.295)、ということの発見でもあった。本稿と関連づけるなら、この「からっぽの空間」は、いわゆる「なんでもない全くの無」ではなく、「基盤」と理解されることになる。

[74] 註 54 を参照。

は、それ以降の素粒子の発見にも同様に該当するはずである。そうである以上、距離ないし空間は、ヘーゲルのいう基盤ないし同一の基体として、自己揚棄により粒子を内部から分割していく否定運動と、これまで発見されこれから発見されるだろう粒子とを全面的に媒介している、と解釈できるのではないだろうか。

粒子の発見史を以上のように解釈することは、有限の中の無限を問題にすることでもある、という点にも論及しておこう。物質の構成要素としてもはやその先に分割できない原子という限界点を立てると、その先が出てきて、その先にもまたその先が出てくる。この終わりなき探求は、そのつどの研究の「限界」を物語ると共に、いかなる有限も——粒子も研究も——無限から成り立っている、ということを示す論理運動の顕現でもある。既に述べた通り、研究それ自体が否定性の運動であり、もっといえば人間の意識そのものがそうである。この有限と無限の関係を、単なる直接態としてみた有限——例えば粒子——の内に、単なる直接態としてみた無限——例えば我々が素朴に想定している「実在空間」——を絶えず見出すこととして理解するなら、それは「その先・その先」という空間的な延長ないし分割には終わりがないという悪無限に帰結することになる。この悪無限に陥らずに有限の中の無限を問題にするには、空間をヘーゲルのいう基盤として、すなわち、有限と無限の媒介として捉える、という先に明らかにした課題に我々は直面しなければならない。無限を有限に帰着させることが科学の使命であるとするなら、無限は科学においては有限の追求の果てに立ち現れ、その帰着を常に開いたものとする。この開きを開きとして成り立たせているものを、我々は問わなければならないことになる。二極の媒介は、一と多、連続と不連続、ネガとポジ、自と他、運動と静止、内と外、全体と部分、など、あらゆる対立関係において問題となる、ということを付言しておきたい。

5. 連続と不連続からみた死

4章までの考察を受けて、連続と不連続の視点から死を論ずることにしよう。

5. 1. 論理運動としての死

(1) マイナスとゼロ

「夢無き決して覚めぬ睡眠」というソクラテスの見方の延長上に、本稿はこれまで死を専ら連続的なものとみなしてきた。これまで何度か述べてきたように、完全な連続性は我々の知覚に映じない。私の死が私に捉えられないことには、それが連続性という性格を備えている、ということが密接に関わっている。換言するなら、死の連続性が最も問題になるのは、私の死においてである。私の死がもしも「ある」とするなら、それは否定性として機能する、決して対象化されえない意識として「ある」。私の死の連続性を本稿の冒頭では「意識としての私の死」と呼んでいたのも、そのためである。

しかしながら、死は不連続的なものでもある。例えば虫が動かなくなったのをみてその死を確認するように、死は、我々の日常感覚では「動かない、反応がない、機能しない」、と

いうことである[75]。我々が確認できるその死は、他者の死であり、死体としての死である。そこかしこに散らばっている虫の死体が一例となるように、他者の死は不連続的である。他者の死と根本的に結びついている不連続性は、私の死においては、あそこ１、あそこ２、あそこ３・・・以下原理的には無数に放射するそれら他者の死から翻って私に回帰することで、確認されることになる。私の死体も、それを見下ろしている人たちの世界も、私にとってポジの水準に現れることは決してない。「死体としての私の死」は私にとってネガであり、ポジなのは、「死体としての他の死」である。それゆえ、私の死を死体としてのそれに限定し、他を自から分断するなら、私の死は私にとって問題にならない、とみるエピクロス的な態度が導かれることになる。

「意識としての私の死」すなわち私の死の連続性と、「死体としての私の死」すなわち私の死の不連続性とは、いずれもそれ自体として現実化されない点では共通している。だが、後者が写像ないしネガであるのに対し、前者は、ネガとポジとの二極分化を立ち上げる、ネガでもポジでもない連続点である。前者をゼロ、後者をマイナス、と対照させて両者の違いをより明瞭にすることもできるだろう。「私の死は経験不能」とのみ考えて済ませる場合には両者の区別は問題にもならないが、ヘーゲルに倣って「死の一元論」を確立しようとする本稿にとって、‘で無い’にマイナスとゼロという次元の違いを認めることは決定的に重要である[76]。なぜなら、ゼロはマイナスとプラスのペアを作る媒介点であるからである。マイナスとプラスとは、これまで本稿で論じてきた自と他、あるいは内と外を、ゼロの視点からそれぞれ言い換えたものに他ならない。

（2）運動の過程

死をゼロとマイナスとに区分して捉えることは、死を連続性と不連続性との一つの運動として捉えることを可能にする。このことを明らかにするために、「形式的根拠」の論考で依拠した座標図、図 3 を再び参照しよう。この図において、私の死の連続性は座標の原点に、私の死の不連続性は座標左のマイナスの側に、それぞれ位置づけることができる。

ヘーゲルが描く論理運動を、図 3 に則って簡単に復習しよう。無から無への運動から反射運動が発して、一方が反射する作用=反射鏡へ、他方が反射されるものへと分化する。図 3 では前者は縦軸で、後者は横軸で示されている。説明の便宜上「縦軸」として示しているが、反射鏡は本来大きさをもたないことに改めて注意しよう[77]。縦軸は、反射されるものを

---

[75] 生命の教科書的な定義の一つ、「刺激に対して反応がある」は、このことを反転させる形で出てくる、といえる。

[76] 本質論において「ゼロ(Null, zéro)」という言葉は、反射諸規定の一つ「矛盾」において、論理展開の一つの結節点を示す言葉として用いられている(vgl.,S.52, cf.,p.72)。また、『大論理学』冒頭の序論で「学の展開過程」を述べたところでもこの言葉が使われているが、そこでの論述は「ゼロ」のいわゆる否定的な側面に定位したものとなっている(vgl.,Hegel, 1999a,S.21; cf.,1972,p.25)。後者の論述をどう解釈するかは、ヘーゲル論理学全体の理解と関わってくる問題である、と考えられる。いずれにしても、ゼロという言葉は同書において術語としては用いられていない。ヘーゲル自身は否定性のゼロに該当する側面とマイナスに該当する側面とを必ずしも明確に区別していないように思われるが、この点について論じるのは今後の課題としたい。

[77] 註 47 を参照。

反射する自の軸であるのに対し、横軸は、他の視点から捉えられるものが位置づく軸である。横軸の左側がネガないし理念的な水準、右側がポジないし実的な水準である。

この論理展開は、以下のように死に適用することができる。（下記の括弧内の数字は、論理展開が変容する凡その分岐点を示す。数字の意味については後に述べる。）

原点としての私の死の連続性は、無から無への運動であって決して他に到達することのない、否定性の無限運動である(Ⅱ-ⅰ)。この運動を出発点に、その只中から反射鏡が出て、反射する-されるの関係運動が生じる(Ⅱ-ⅱ)。反射運動は理念的な水準の運動なので、それは横軸のマイナスに向かう。その運動が横軸に到達すると、反射されるものとなる。つまりこの段階で、私の死が、反射されるものとして微かに浮かび上がることになる。その死は、反射運動において運動を成立させる前提であり、横軸のプラス側とはいまだペアをなしていない。運動は、その僅かに顔を出した私の死から縦軸に反射し、今度はプラスの側に向かう。運動は、そちら側に定有としての死を浮かび上がらせる。この段階において、他者の死は、いまだ本質の無の運動の「外」にある直接態としての死であり、死体はいわば単なる死体でしかない(Ⅰ)。4 章の論述が示すように、その死は運動に「潜在的(an sich, en soi)」である、ともいうことができる。運動は定有としての死を経由して縦軸に再び反射し、マイナス側にまた戻ってくる。そして、同様の循環運動が再開され、この循環は無数に繰り返される。やがて、横軸マイナス側に反射されるものとして微かに浮かび上がっていた私の死が、他からみた私の死として出現することになる(Ⅱ-ⅲ)。マイナス側のこの変容と同期して、プラス側の、他からみた私の死と対応する位置にあった定有としての死が、根拠づけられた内容へと転じていく(Ⅱ-ⅳ)。このことで、死体は、他と私とに同時に関連づけられるものとなる。すなわち、死の問題に関して、マイナスとプラスが明確なペアを形成する(Ⅱ-ⅴ)。このペア形成によって確立された横軸は、マイナスを内包しているがゆえに、‘で無い’の運動と改めて関係づけられ、自の軸である縦軸への接近を強めることになる(Ⅱ-ⅵ)。こうした円環運動が継続することで、私の死の連続性と私の死の不連続性との交点が形成されていくのである。

以上のように、ヘーゲルが描く論理運動に照らすことで、死を連続と不連続とから成る一つのものと描出することができることになる。

括弧内の数字を元に、論理運動が通過している各水準を確認しておこう。(Ⅱ)は本質の運動全体を示すが、そのなかで、(ⅰ)原点→(ⅱ)本質縦軸→(ⅲ)本質横軸マイナス→(ⅳ) 本質横軸プラス→(ⅴ)本質横軸プラスとマイナスのペア→(ⅵ)本質横軸と縦軸のペア、という順に論理は展開していくことになる。この運動の外に、(Ⅰ)で示した直接態の世界がある。本稿では明らかにすることができないが、本質の運動は最終的には直接態に回帰することを押さえておこう。この点については、後にもう一度ふれる。

5.2. 人間における死の理解の発達

死を以上のような論理運動と解釈できるとして、では「実際」には、人間は死をどのように理解していくことになるのだろうか。

この問いに答えるため、人間の死の理解がどのように発達していくのかを論じることにしよう。「死の概念発達(the development of the concept of death)」をテーマとした発達心理学研

究を主たる参照点に[78]、それが問題にしている発達段階の先の段階も含めて、死の理解の発達過程を筆者なりに整理してみたい。（下記の括弧内の数字は、発達が変容する段階の凡その目安を示す。数字の意味については後に述べる。）

（1）死の概念発達

子どもを含めた我々の周りには様々な死がある。例えば、虫・小動物の死、ペットの死、親類縁者の死、友人・知人の死、絵本・お話をはじめとする作品の中の死、メディアが伝える死、等々である。子どもたちは、基本的に自らが直接見聞きできる範囲内の死に対することになるが、空想の世界と現実生活との水準の違いに頓着せず、様々な死にいわば分け隔てなく接していく。子どもにおける死の概念は、例えば、動いていた虫が動かなくなり、再び動き出すことはないことを確認することと、アニメのヒーローは決して死なず、その「敵」が次々と死んでいくことを見ることとを、いわば等しく養分としながら形成されていく。成長に応じた経験範囲の拡大につれて、経験する死のバリエーションも増えていく。次第に、直接見聞きできる範囲を超える死も子どもに問題となるようになる。このように経験範囲を「超える」ことが、それまでいわば自由に行き来してきた空想と現実、生と死との境界を徐々に明確にすることにもなるだろう。やがて、諸々の死を貫いて、死んだ者はこの世界に二度と戻らないこと、すなわち発達心理学のいう死の「不可逆性(irreversibility)」を、そして、様々な死は生に共通した出来事であり、生あるものは皆死ぬこと、すなわち死の「普遍性(university)」を認めるようになる(ここまでⅠ)。

子どもたちは、誰もが死ぬようにこの私もいずれ死に、そうなればこの世界には二度と戻らぬことも、やがて理解するようになる。私自身が死ぬことの理解は、概ね他者の死の理解の後にもたらされる。注意したいのは、子どもたちがまずは他者の死を問題にするのは、死の問題に関わる自他区分がいまだ曖昧であるため、子どもたちには私の死がはっきりとした形で現れず、そのため死は当初そもそも他の死でしかありえないからだ、ということである[79]。それゆえ、私の死を理解することは、死の概念理解の単なる一側面でも、死の概念発達の程度を示す指標の一つにすぎないものでもない。子どもたちのなかで他の死と自の死とが区分され、後者が理解されるようになることは、これまでになされてきた他者の死の理解自体を全面的に変容せずにはおかない。すなわち、他者の死と私の死とはいわゆる事柄としては同じでも、意味としては全く異なることが理解されはじめ、このことで、子どもの死の理解に異なる次元が設定されるようになるのである(Ⅱ-vi)。

---

[78] 主として、以下の諸研究を参照した。Cf., Nagy, 1948、ワロン、1968、Speece and Brent, 1984、仲村、1994。H.ワロンの研究は、子どもとの対話に基づくいわゆる質的研究であり、1930 年代から 40 年代にかけてなされたものだが、今日なお示唆に富んでいる。近年の発達心理学において、死の概念発達研究の先駆の地位を与えられているのは、1940 年代終盤になされた M.H.ナギーの研究である。Cf., Speece and Brent, 1984,p.1671、仲村、1994,p.62。なお、近年の研究は、いわゆる実証性を重視することで一定の成果を挙げているが、人間における死の理解を研究するうえで決定的な問題点を孕んでもいる、と考えられる。その問題点については、この後の補遺で述べる。

[79] ワロンは次のように述べている。「生と死の問題に関しても、ほとんどのばあい、子どもは自分以外のものを想像する。‥‥‥子どもは、自分の外側のもろもろの光景にくっついているのであって、自分に関することを原型として、そのあとそれを他人のうちに投影するのではぜんぜんない」(ワロン、1968,pp.258-259)。

補遺

管見の限り、死の概念発達を実証的に調査している発達心理学研究は、死の理解における私の死と他の死との次元の違いを問題にしていない。例えば実証的研究の先駆とされるナギーの研究は、ハンガリーの子どもたちとの対話を通して、子どもたちが理解する死の具体相を生き生きと伝えてくれているが、子どもにとっての私の死の意味については全く論じていない。実証的発達心理学において、私の死の理解は、死の理解がかなり進んだ段階で現れてくるものと、見方を変えれば、発達段階の進展を示す「指標」とみなされているだけである。例えば仲村照子は、日本の子どもたちを被験者としたある調査で「全ての年齢段階間で有意差が示され」たことを受けて、「これは死というものが他人事からだんだん現実的なものになっていき、さらにはいつかは自分にも起こり得るものになっていくという理解の推移を示していると思われる」、と述べている(仲村、1994,p.67)。しばしば参照される仲村の論文は、明快な結論を提示した研究だが、この一文が典型となるように、子どもによる死の理解を文字通り「推移」として一次元的な水準で描いているだけで、死が他ならぬ「自分にも起こり得る」出来事として子どもに捉えられるようになることの意味については、全く論じていない。子どもの死の理解に関わる諸研究を広くレヴューした M.W.スペースと S.B.ブレントは、「死に関わる『成熟した』概念のうち〔死の概念発達研究において〕最も広く研究されている三つの構成要素(components)」を、「不可逆性」、「非機能性(nonfunctionality)」、「普遍性」、としている(Speece and Brent, 1984,p.1671)。スペースらによれば、不可逆性とは、「生きものがひとたび死ねば、その生体を生き返らせることはできないこと」を、非機能性とは、「生命を形作っているすべての機能が死において停止すること」を、普遍性とは、「あらゆる生きものは死ぬこと」を、それぞれ意味している(ibid,pp.1671-1672)。これらは、他の死と私の死との違いを捨象ないし統合したところで浮かび上がる――本稿の立場でいえばこの捨象・統合は私の死が理解されてはじめてもたらされるものなのだが――死の「構成要素」である、といえる。そうである以上、死の理解の発達心理学研究の多くがこの三つを共有している、というスペースらの指摘は、発達心理学が基本的に、子どもの死の理解における他の死と私の死とを質的に異なるものとはみなしていないこと、もっといえば後者を前者にいわば回収する仕方で取り扱っている、ということをよく示しているだろう。興味深いのは、このスペースらの論文を参照している研究のなかで、スペースらが死の「構成要素」として、上記三つ以外に、「因果関係(causality)」と「私自身の死ぬべき定め(personal mortality)」をも挙げている、と述べている論文があることである(cf.,駒井、2005,p158.、辻本、2010,p.57)。スペースらのこの論文には personal mortality という言葉は登場しないため、この論述は完全な誤解ないし勘違いに基づくものだが、このような誤解・勘違いがなされうるということは、「私自身の死ぬべき定め」、すなわち、他ならぬこの私が死ぬことが、実証的発達心理学者にとっては発達上なんら特有の意味ももっておらず、死の「構成要素」の中に研究者によって含められたり含められなかったりする程度の、子どもの概念発達の進展を測る指標の一つでしかない、ということを期せずして明示している。

幼児期のいわゆる自己形成には模倣が決定的な役割を果しているが、他と自が子どもの中で異次元として分離することにより、誕生直後の自他未分化の時から機能している模倣は(cf.,Iacoboni, 2008、リゾラッティ、2009)、自における認識形成のプロセスとして位置づけ直

されることになる[80]。母親やそれに近い養育者をはじめとする他者の視点は、子どもの中に文字通り浸透し[81]、子どもの認識の基礎を形成していく(Ⅱ-ⅴ)。多様な他者視点の浸透は、やがて各々の視点から距離を取り、それらを否定的にみる動きを生む。その動きは、子どもの認識におけるネガを形成し、その形成はそれと一体的にポジを形成し、浸透する視点に他者の視点という意味を明確にもたせることになる(Ⅱ-ⅳ)。ネガとポジとの一体的な形成が一段と進むと、両者の違いが際立ちはじめ、やがてネガがそれ自体として確立される(Ⅱ-ⅲ)。私には見えず他者にのみ与えられる私――私の顔をはじめ、私の立ち居振る舞いのほとんどがそうである――が、ある発達段階以降の我々にとって決定的に重要な意味をもつようになるのも、このネガの確立と対応している。

上記プロセスは死の概念発達にとって極めて重要である。というのも、先述したように、決して経験できないものとしての私の死は、このネガの確立と一体となって子どもに理解されるようになるからである[82]。ネガの確立は、死をもって私は私ではなくなること、すなわち、死がこの私を条件づけていることを理解することと一体となっている。このように私の内部に死を、すなわち私が私でなくなる次元を明瞭に認めることで、私は唯一の私であり、私の人生のすべての意味をこの私が生み出している一方で、この私はどこにでもいる私の一人であり、有限である、という私の二面性・逆説と本格的に向き合うことになる。こうして自の死を他の視点でみるようになればなるほど、他の死を自の視点でみる傾向も正比例して強くなる。つまり、私の死は他者にとっては他者の死で、他者の死は他者にとっては私の死であることが理解されるようになる。このことで、あらゆる他者の死に、透かし彫りのように私の死を読み取るようになる(Ⅱ-ⅱ)。つまり、他者は他者で、私の死に条件づけられており、他者にとってのこの私がすべての意味を生み出す源泉であることが理解される。こうして、この私が死すべきことが、いかなる者にとってもこの世界を生きるうえでの大前提である、ということが理解されるようになるのである(Ⅱ-ⅰ)。

(2) 死をめぐる円環関係の形成

[80] 模倣は本来簡単に論じられるようなテーマではなく、この段落の論述はその瞥見でしかないことを断っておく。模倣について、筆者は「ミラーニューロン」と呼ばれる神経細胞についての諸研究に定位し、次の論文で考察している。Cf.,福田、2013。

[81] 近年の神経科学では、「ミラーニューロン」が注目を集めているが、それは、「私が他者の動作を見ると、それが私の行動レパートリー内にある限り、常に賦活する」(福田、2013,p.122)神経細胞である。それはいわば、「自分の脳に他者が住んでいるかのように、他者ばかりに『関心を向けている』」(Iacoboni, 2008,p.132)。そうした神経細胞により、他者の視点は発達の過程で、ことさら他者の視点という意味を帯びることなく、自己の中に浸透していくことになる。ミラーニューロン研究の第一人者 M. イアコボーニは、「自己と他者はミラーニューロンのなかで溶け合って(blended)」おり、「人間の脳の本質は根本的に間主観的(intersubjective)である」、と述べている(ibid.,p.152)。

[82] 先の補遺で述べたように、死の概念発達をテーマとする実証的発達心理学にとって、私の死は特有の意味をもたず、せいぜい子どもの発達段階を特定するために抽出された死の「構成要素」の一つでしかないため、この段落で筆者が問題としている死の理解の発達過程がその研究の射程に入ってくることもない、といえる。

以上は、従来の発達心理学が問題にするよりもはるか先の発達段階を含めた論述であるため[83]、その妥当性については広く死に関わる諸研究から慎重に検討しなければならない。だが以上の論述から、死の概念発達がヘーゲル本質論における論理展開の反対方向へと概ね進んでいく、と考えることは少なくともできるであろう。上述中の番号を手がかりに、このことを確認してみよう。

直接態の水準(Ⅰ)は、死の概念形成に向けていくつかの段階を経過しつつも、死をいまだ他者の死として一次元的に問題としている段階である。この段階に‘私の死’という次元が拓かれることで、本質の水準(Ⅱ)が設定されることになる[84]。その最初の段階(Ⅱ-vi)では、反射鏡としての縦軸と、他の視点を体現している横軸とがいまだ分化していない。他者視点が発達に圧倒的な影響を及ぼす段階(Ⅱ-ⅴ)において横軸が確立され、ついで、横軸におけるプラス側とマイナス側を一体的に形成する段階(Ⅱ-ⅳ)に入り、やがて、前者から独立した後者が確立される段階(Ⅱ-ⅲ)となる。続く段階(Ⅱ-ⅱ)において、他者の死を映す鏡としての私の死が明確となって縦軸が形成され、最終地点(Ⅱ-ⅰ)で、他と自を結ぶ原点が確立されることになる。

以上は、Ⅱ-ⅰからⅡ-viへと進む本質論の展開とは概ね逆向きに進行しており、本質の論理運動における原点は、死の概念発達においては、最終段階に出現している。つまり、一方の出発点が他方の帰着点となっている。死の概念発達は、直接態としての死から死の原点に向かって進んでいく運動であるが、その運動自体が原点を形成し、その原点から再び外・他に向かって発出することになる。本質の運動と「死の概念発達」という事態とはそれぞれの反対方向に展開することにより、一方が他方の下絵となる仕方で円環関係を形成している、ということができる[85]。

本質の論理展開はこのように死の概念発達とは反対方向に進むが、直接態から本質へ、上述の番号でいうと、ⅠからⅡへという展開は、概念発達の方向と合致している、ということにも注意しよう。全面的根拠の最後で、本質の否定性は外に到達するということを論じた。この外を直接態と読み替えるならば――この読み替えのためにはこの段階以降の何重にもわたる回帰運動の考察を本来経なければならないのだが――本質と直接態との関係自体を、原点から発する運動と運動の前提との関係、換言すれば、未来と過去との関係に相当するもの、と理解することが可能となる。二項関係は必ず円環関係を形成しているため、どの視点に定位するかによって異なる現れ方をするのだが、実のところ、ヘーゲル論理学は、概念論の最後が有論の最初に回帰している、とみることができるように、その全体が「出発=帰着点」を形成しているのである[86]。ヘーゲルが描く論理運動は、子どもの発達を考える場合に

---

[83] 註 82 を参照。

[84] 私の死の意味を考慮しない実証的発達心理学は、ヘーゲルの用語でいうと、あくまで直接態の水準に定位し、その水準で問題となる人間の概念理解と発達を研究対象としている、ということができるであろう。

[85] 哲学において「真理」は伝統的に「概念と事態の一致」を意味しているが、ヘーゲルは、伝統的真理観を引き継ぎながら、それを二極が一致する一つの運動、すなわち、非連続的連続化として捉え直している、と理解できるであろう。

[86] 有論の冒頭に置かれた「学は何を始原としなければならないか」という節で、ヘーゲルは、「全体は自己自身における円環であり、その円環において、最初のものはまた最後のものであり、最後のものはまた最初のものである」(Hegel, 1999a,S.37; 1972,p.43)、と述べている。

も素朴に前提とされている「直線型」の時間――これに則る限り我々は二元論を原理的に免れえない――を揚棄し、それを「円環型」の時間へと統合することになる、と理解することができる。本稿では論理運動の一部を考察しただけでしかないため、この理解を詳らかにすることができないが、このことは、概念発達に限らず、発達・発生(development)という事態そのものの全面的な捉え直しを求めるものともなるはずである。

（3）回帰運動の諸相

円環を描く運動は、ヘーゲル論理学のどこを切り取っても認められるといっても過言ではないほど、様々な水準に「入れ子」のように構造化され、論理全体を形成している。本稿でもこれまで、回帰・往復の運動をいたるところで問題にしてきたが、そのうちの代表的なものを簡単に振り返っておきたい。

まずは、ドイツ語の語源の水準で示されているように、Wesen(本質)と Sein(有)とが、「本質は過ぎ去った有である」という仕方で関係しあっていることをみた。「過ぎ去った」は、「直線型」時間における過去を意味するのではなく、「無時間的な過ぎ去り」という逆説を示している。この逆説の背景には、未来と過去との関係が潜んでいるが、本稿ではその関係を反射論において、定立と前提の関係として考察し、反射運動としての否定性が、「前もってそこにあったことが見出されるもの」を自らの中に生み出すことを明らかにした。このことの延長上に、科学研究における「発見」について考察し、未来に向けて新たな形式が穿たれれば穿たれるほど、そこに過去から途切れることなく続いている内容が、覆いを取られて姿を現すこと、端的にいうなら、「未来に向かう運動は過去に到達する」ことを明らかにした。さらに、二項を関係づける第三者・外的視点としての「つなぎ」が媒介に展開する論理運動において、‘一’の外からの到来と内からの湧出とが一体となる、ということを明らかにした。最後の点に特に明瞭だが、これらすべてが、反対方向の運動の一致が一元論を構成する元になる、ということを示している。

（4）差異ゼロとしての死

この反対方向に進む運動における一致を、死こそが体現している、とみることができる。「原点からの発出が原点への回帰である」、という命題に定位するなら、死はまさに原点である。死を「母なる大地に還る」、などと時に表現するように、誕生から死までが一つの回帰運動であることを、我々は直感的に理解しているであろう。死からみた生に関しては、我々も直線型時間を容易に乗り越え、円環型時間を前提としている、といえるかもしれない[87]。

形式的根拠において、死をトートロジーに引き付けて理解していたことを思い起こそう。ここまでの考察を元にそこでの議論を捉え直すならば、トートロジーという形式・記号論理学の一命題が、ヘーゲルにおいては、論理の円環運動における原点の生成として捉え直されている、ということになる。4 章 1 で明らかにしたように、トートロジーは、関係運動の二極が接近に接近を重ね、ぎゅーっと詰まった差異ゼロとして成立する。したがって、ゼロはあらゆる差異を自らの奥底に押し込めているのだが、見方を変えれば、あらゆる差異がその

[87] 「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにてあらん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」、という『ヨハネによる福音書』中の言葉は、円環型時間を示す、よく知られた言葉の一つであろう。

内に押し込められていることではじめてゼロが成立する、ともいえることになる。‘で無い’の差異運動は直接態の世界を貫いているわけだが、以上のことを導きとするなら、ゼロはその運動全体を自らに包含しており、またそれを包含することでゼロはゼロとして誕生する、と理解できることになる[88]。『大論理学』の論理展開は直接態の世界から開始される、ということの重要な意味がここにも示されている、ということに注意しよう。

ヘーゲル論理学全体を視座におくならば、論理運動の中核にはゼロの生成という展開が必ずあり、その展開が根拠関係運動ではトートロジーとして示されている、といえることになる。実際に本稿では、トートロジー以外にもゼロの生成を意味する論理展開を既に確認している。絶対、がそれである。4 章 3 で明らかにしたように、絶対とは、ペアを成すべき他が全く潜在的である、あるいは、他は潜在化されてすべてそこにある、という意味である。また、2 章 2 で距離の問題と関連づけて論じたように、ゼロを牽引と反発の関係として理解することもでき、後者が前者に完全に包含されて反発ゼロとなることをそれは意味している。この意味では、我々にとって絶対的な出来事である死は、反発ゼロの究極の牽引である、といえる。

重要なのは、「差異ゼロ」・「他ゼロ」・「反発ゼロ」としてゼロが生成されている、ということである。したがって、外的にみるならば、ゼロの前に、まずは差異運動、反発運動、あるいは他がある、ということになる。それゆえ、牽引の究極体である死は、斥力による反発を前提としていることになる。その際、「外的にみるならば」という点を強調する必要があるのは、既にみたように、媒介がその「外」を引き取って、二極の統合、例えば自と他、あるいは牽引と反発の統合を果していくことになるからである。

以上のことを、以下では生物学に即した考察によって明らかにしていこう[89]。

5. 3. 生命運動における死

生物学は、生殖は無性生殖(asexual reproduction)から有性生殖(sexual reproduction)へと進化し、死は有性生殖の誕生と共に生命にもたらされた、ということを明らかにしている(cf.,田沼、2001、田沼、2008、団、2010、高木、2014)。この知見は、以上で論じた「原点としての死の生成」をより具体的に理解するために、極めて重要な示唆を与えてくれる。

筆者は、ゾウリムシ研究者高木良臣の『有性生殖論』に基づき、生命の分離と結合の運動について、福田(2019)において詳しく考察しているので、その考察を本稿に援用しながら、この示唆の内実を明らかにすることにしよう。

(1) 有性生殖の誕生

生命は、約 38 億年前に誕生してから約 18 億年の間、原核生物のみの、ひたすら分裂増殖していく世界であった。原核生物のバクテリアは「寿命をもたない細胞」(高木、2014,p.74)であり、「自分で死ぬことができない」(同,p.161)。もちろんバクテリアも「事故による死は

[88] この理解は本質と直接態との関係に関わることだが、既述のように、本稿では両者の一致を全面的に明らかにすることはできていないため、本稿で問題にしている論理段階の後の段階を含めてこの理解を根拠づけていくことが、今後の重要な課題となる。

[89] この課題を遂行するうえでも重要なことだが、ヘーゲル論理学は直接態から開始されていること、そして、直接態は、外的視点の元で展開される世界である、ということを、ここで改めて確認することにしよう。

避けられない」(同,p.74)が、十分な餌や捕食者の不在などの理想条件が仮に整うなら、永遠に分裂し続ける。「生物（細胞）は死なないのが本来の姿であった」(同,p.161)、といわれるように、無限分裂増殖は生命の基本である、といえる。バクテリアが行う無性生殖では、分裂した細胞同士が融合することは「タブー」(同,p.144)である。すなわち、分裂増殖は一方向的に永遠に進み、決して逆戻りすることがない。このことからするなら、無性生殖における分裂増殖とは、本稿でみてきた、斥力による反発運動そのものであることになる(cf.,福田、2019,p.76)。有性生殖の誕生と共に出現した事故によらない死、すなわち、いかなる理想条件が整おうと生物に必ずもたらされる死は、この分裂増殖を自発的に止めることを意味する。したがって、生殖の進化に伴う死の出現は、生命の基本に反する画期的な出来事であったはずである。

生命は、その進化のプロセスにおいて自らの内に死を生み出すことで、あるいは、外からやってくる事故的なものから、必ず訪れるものとして死を自らの内に組み込むことで、内的な次元を獲得することになった、とみることができる。生命におけるそのエポックメーキングは、生命誕生から 18 億年もの時を経てようやく現れることになった。外的にみるならば、生命においては無限の反発がまずはあり、しかる後に牽引力が発生した、といえる。アポトーシス研究者の田沼靖一が、「ある時期がくると古くなって変異の溜まった遺伝子を個体ごと消去していくこと」に、生物に死が在る「本質的な理由」の一つを認めているように(田沼、2008,p.212)、死はまさしく、積み上げられた変異を前提にしたゼロの生成である、とみることができる。

以上のことは、死の概念発達と緊密に対応した事態とみることができる。本章 2 で明らかにしたように、死が一次元的に拡がっている外の出来事としてだけでなく、私の死としても理解されるようになることで、子どもの内に新たな次元が設定されることになる。そして、その次元設定は、概念発達のかなり進んだ段階ではじめて現れる。「牽引の究極体である死は、斥力による反発を前提としている」、と先に述べたことは、生命の進化と人間の概念発達という水準を異にするものに等しく該当している、と理解することができる。

（2）ゼロ生成と差異の蓄積との一体関係

生命進化において、反発に牽引が対抗するようになることは、有性生殖の誕生――上述のようにそれは死の誕生と裏腹の関係にある[90]――とその進化として実現されることになる。メカニズムに踏み込んだ考察は福田(2019)に譲り、以下、必要最小限に絞ってその内実を示すことにしよう。

有性生殖は、「異なる性が分けもつ遺伝子を雌雄間で混ぜ合わすことにより、次世代に遺伝的多様性をもたらす仕組み」(高木、2014,p.37)、と通常理解されている[91]。染色体の対合と組換え、減数分裂と受精といった有性生殖特有のプロセスは、確かに遺伝的多様性を生み出すことに寄与している(cf.,福田、2019,pp.75-77)。だが、無性生殖においても、突然変異や

[90] 高木は、「寿命をもたないこと、すなわち有性生殖の不在」（高木、2014,p.79）と述べている。

[91] 有性生殖の存在理由を「寄生生物や病原菌といった外敵に対する対抗策」と説明するよく知られた説は、その多様性産出能力を前提としている。Cf.,ピンカー、2003,p.60, ベラスケス=マノフ、2014,p.136。つまり、分裂速度と増殖数では到底かなわない敵の変異・進化に対し、真核生物は有性生殖による多様性を生み出す戦略で応じている、という理解である。

水平遺伝などによって遺伝的多様性が生み出されていくように(cf.,同,p.80)、有性生殖が出現しそれが維持されている理由は、遺伝的多様性の産出という点からでは十全な説明ができない、と高木は考える[92]。彼は、一倍体と二倍体という観点から、無性生殖では、遺伝子に生じた変異の有用性が個体の生滅によって直ちに「検証」されるのに対し、有性生殖では、遺伝子の変異を「隠す」ことが可能である点に着目している(cf.,同,pp.77-79)。変異を「隠す」とは「安全に保管する」(高木、2014,p.107)ことでもあるように、有性生殖は、変異遺伝子をただ隠しもっているのではなく、表に出すことでその有用性を検証することも行う(cf.,福田、2019,p.78)。このように、有性生殖が変異遺伝子の「保管と検証との循環」を行うようになったところに、無性生殖との決定的な違いを高木は認めている(cf.,同,p.79)。

生殖の進化運動を連続的に説明できる原理を求める高木は(cf.,同,p.78)、オートガミーに着目し、それを有性生殖の初期段階に位置づけることで、無性生殖から有性生殖への進化の連続性を読み解いている(cf.,同,pp.76-77)。1 章で述べたように、オートガミーは、二分裂などによって生じた同一核の細胞が再び合体する生殖方法である。このことからすると、一方向的な分裂増殖の運動――上述のように生命の基本とみなせる運動――に対抗し、無性生殖の「タブー」を打破する回帰運動が、オートガミーにおいて明示されていることになる(cf.,同,p.76)。一方で、それは細胞内に保管されている変異遺伝子を表に出すという点で非常に優れた生殖法であるように、変異の検証のみを行う無性生殖の特徴を色濃く引き継ぐ生殖方法でもある、といえる(cf.,同,p.79)。本稿の論点に引き付けるなら、高木はオートガミーという「特殊な」生殖法に進化上の決定的な意味を認めることで、斥力による反発運動の只中に牽引力が誕生する過程を生物学的に見定めようとしている、と解釈できることになる。

高木によれば、「有性生殖は遺伝子型の多様性を高める方向に、表現型の多様性を抑制する方向に進化した」(高木、2014,p.156)。遺伝子型の多様性は「潜在的多様性」であるのに対し、表現型の多様性は表に「出現する」多様性であるから(同,p.156)、変異の検証すなわち顕在化を重んじる有性生殖が、変異の保管すなわち潜在化を重んじる有性生殖へと進化したことになる。換言すれば、有性生殖の進化は、変異の蓄積と変異の発現の抑制とを一体的に発展させていったことになる(cf.,福田、2019,pp.81-83)。生殖の進化運動全体を反発と牽引の関係としてみるなら、斥力一辺倒の中に誕生した牽引力が、変異遺伝子の発現と抑制の循環運動を開始させ、その循環が例えば減数分裂と受精のように生殖システムとして精緻化していくことで、単なる反発運動に対抗する、有性生殖特有の回帰運動を確立させていったことになる(cf.,同,pp.79-83)。先に述べたように、有性生殖が進化すればするほど変異の発現の抑制に重きがおかれるようになる限り、この回帰運動は同一性に向かう運動であるわけだが、この運動は豊富な差異の蓄積を前提としたものでもある。そうである以上、この回帰運動には、差異性と同一性、発出と回帰、反発と牽引といった、方向を逆にする運動の相互一体関係を見て取ることができることになる(cf.,同,p.83)。

以上に述べた生殖の進化の視点から個体に必ず訪れる死をみるなら、次のようになる。死は、「変異の溜まった遺伝子を個体ごと消去していくこと」と説明されるように、遺伝子の変異を検証に晒す機会を潰す出来事である。個体に事故以外の死が訪れない場合には、遺伝子の変異を検証に晒さない可能性が原理的に発生しないため、変異遺伝子の適否は常に現実

[92] 現在の生物学において、「有性生殖が進化の上で維持されている理由は重要な未解決問題である」(八杉他、1996,p.1418)、とされている。

の裁定の元で下されることになる。それに対し、変異を検証に晒さないことは、それを安全に保管することにもなる以上、死は、遺伝子の変異の保管と表裏一体の出来事として理解できることになる。進化した有性生殖は豊富な差異の蓄積を前提とした回帰運動であるわけだが、その回帰は、ゼロ生成としての死があってこそ可能になる、とみることができる。

なお、生物学からこのように導きうる、「ゼロ生成」と「差異の保管・蓄積」との一体関係は、私の死の連続性と私の死の不連続性との関係と緊密に対応している、と解釈できることを、ここで予め押さえておきたい。

5. 4. 媒介としての性と空間生成

（1）外的視点の問題

上述した、「死は遺伝子の豊富な変異の蓄積と一体である」、ということを理解することは、個体に不可避に訪れる死の只中に、遺伝子の水準を認めることを意味している。個体と遺伝子は生物学的に異なる「単位」とみなされていることからしても[93]、この理解は、異なる水準ないし単位に同時に立つこと、あるいは、それらを跨ぎ越すことによってもたらされる。そうであるならば、この理解には、それぞれの水準の「外」にある第三者的な外的視点が関与している、と考えなければならないことになる[94]。

「個体」という概念を一例に、外的視点が本稿の考察にいかに関与しているか、そしてその「取り扱い」がいかに難しいものであるかを明らかにしよう。

individual という語が示しているように、この概念は、他と空間的にも時間的にも明瞭な区別がなされた、それ以上分割できぬ(in-dividual)単一体を意味している。したがって、それは当該生物の生を区切る死がなければ成立しえないか、少なくともはなはだ曖昧な形でしか成立しない。そのため、事故的な死しかないバクテリアには、個体の水準は本来認めがたいことになる。高木がいうように、バクテリアは「世代交代」を行わない点からしても(cf.,福田、2019,pp.83-84)、「親」世代・「子」世代との関係から浮かび上がることになる個体の水準を、それに認めることはできない、といえる。そうである以上、本稿のこれまでの議論で無前提的に用い、その水準に立って死の有無を論じてきた個体は、それを基礎づける視点が前提とされることで、議論において意味をなしていた、ということになる。その視点とは、個体とその対立概念――ここでは遺伝子――とを共に視座に収める、第三者的な視点である。この視点が、死を誕生させた有性生殖から翻って、バクテリアの無限分裂増殖すなわち無性生殖を捉え直し、そこに個体の水準を読み込むことを可能にしている。

ところで、バクテリアに個体の水準を認めることは、分裂増殖していくそれぞれのバクテリアを個体とみなすだけにとどまるとは限らない。そのことは、バクテリアの分裂増殖過程に「親細胞」「子細胞」という世代の違いを認めることにつながり(cf.,福田、2019,p.84)、さらには、寿命を「細胞分裂からつぎの分裂までの時間」(石川他、2010,p.611)と規定することで、バクテリアが寿命をもつとみることさえ可能にする(cf.,福田、2019,p.84)。このように、外的視点を一旦既定のものとして設定するならば、「自分で死なない」ことがその基本的特

[93] 例えば、「遺伝子プール」という生物学の概念は、次のように説明されている。「〔遺伝子プールは〕あるメンデル集団に属する全個体の遺伝子全体をいう。集団（個体群）は個体を単位としているが、遺伝子プールは遺伝子を単位としている」(石川他、2010,p.87)。

[94] 上で「外的にみるならば」ということを強調していたことが、このことと関わっている。

性であるはずのバクテリアについて、それに内的な死を認めることも原理的には許されることになってしまうのである。

ヘーゲルが外的視点を極めて慎重に取り扱っているのも、それが内とどのような関係をもっているのかを明らかにするところに、論理学上の難題を認めていたからに他ならない。既述のように、本稿ではこの問題に関わるヘーゲルの議論の全体をみたわけではないので、それと全面的に取り組むことは今後の課題となるが、4 章でみた、「外的視点から媒介への展開」という点から、この問題を論じてみよう。

（2）生殖進化と内的空間の生成

この展開に関する議論を簡単に振り返ってみよう。4 章 3 で論じた全面的根拠において、外的視点は、根拠と根拠づけられるものとの「つなぎ」として問題とされており、それが根拠運動に内化されて媒介となる。この展開は、両極の外の第三者から両極の間への運動であると同時に、潜在的‘一’を顕在的‘一’にする運動でもある。このような、‘一’の外からの到来と内からの形成との一体関係において、外的視点は、同一の基盤として発展的に捉え直されている。本稿では、全面的根拠に先立つ実的根拠において、基盤を空間ないし距離と読み解いた。この空間は、いわゆる実在・等質空間ではなく、同一性の運動がその内部にもつ空間であり、このおかげで、同一性の運動において自と他の二極がどれほど接近しようと、両者の不連続が保たれることになっている。

媒介は、ヘーゲル論理学にとって決定的に重要な概念であるが、メスとオス、女と男の関係が示すように、それは有性生殖の本質を照らし出す概念ともなりうるはずである。有性生殖の誕生とは、生命に媒介運動を明確に発生させたことであり、有性生殖論はその運動に迫ろうとしている、と捉えることができるであろう。

以上を明らかにするため、ここで再び高木に従い、有性生殖の進化を考察することにしよう。

高木によれば、オートガミーに続く有性生殖は、「同系交配型」(高木、2014,p.123)と呼ばれる有性生殖である。その一例は、ゾウリムシが「性転換」(同,p.95)して行う接合であり、「雌雄同体種」(同,p.153)が行う有性生殖もこれに含まれる。この同系交配型有性生殖が、哺乳類や鳥類などが行う雌雄の固定的な区別がある、「異系交配型有性生殖」(同,p.123)へとさらに進化した、と高木はみる(cf.,福田、2019,p.81)。有性生殖は進化するにつれて遺伝子の変異の検証よりも保管を重んじるようになる、と上で述べたことからわかるように、異系交配型は、「潜在的な多様化のタネ（資産）を内包すること」(高木、2014,p.154)に最も適した有性生殖である。このことを、高木に従って自他関係の観点から捉えるならば[95]、異系交配型有性生殖は、自のうちに他を極めて豊富に取り込んだ有性生殖である、といえることになる(cf.,福田、2019,p.83)。この自他関係は、細胞内の遺伝子とその変異との関係を意味している。一方で、有性生殖においては、メスとオス、あるいは卵子と精子なども自と他の関係をなしている(cf.,同,p.83)。有性生殖は同系交配型から異系交配型へと進化した限り、性転換や雌雄同体が示すような、不分離ないし相互互換的な自他関係から、明確に切り離され、相互排他的な自他関係へと進化した、ということになる(cf.,同,p.83)。このように、有性生殖を自他関係としてみた場合にも、そこには、他が自に取り込まれる牽引と、他が自から離れてい

[95] なぜ自他関係の観点が必要であるのかについては、福田、2019 を参照。

く反発とが共起している(cf.,同,p.83)。両者は、一方が強まれば他方もまた強まる、という均衡状態を形成しており、有性生殖の最終段階である異系交配型は、この均衡状態を最もよく示しているのである(cf.,同,p.83)。

以上のことからするなら、固定的に二分されたメスとオスが互いを異なる他者と認識し希求する性は、我々にとって最も馴染みではあるが、性の諸形態の一つでしかないことになる。生命の進化の視点からみるなら、メスとオス・女と男の関係は、別個の性がまずはあって、それらが事後的にくっついたり離れたりする、といったものではない。高木と共に、性を、生殖運動が自らの内側から生み出した、自と他を湧出させる「仕組み」とみなすことができるように(cf.,同,p.82)[96]、メスとオスは、一つの生殖運動から二つの極として出来し、徐々にその間の距離を確立させていくものなのである。

以上のことを、「自他の不連続は、同一性の運動内部の空間によって保証される」、という 4 章での理解と結びつけるなら、自他を分離させていく生殖の進化運動は、その内部における空間の生成であり、性の固定化は、内的空間の確定に他ならない、という解釈が導かれることになる。両極の間の視点からこのことをいうなら、運動内部のゼロ点が反発を起こして空間を生成することで、生命の進化を実現させていく、ということになるだろう。4 章で明らかにしたように、同一性の運動に回収されないこの内的空間こそが、同一性の運動の基盤を形成しているわけだが、この論理展開は、両性の差異の確立が遺伝子の差異の蓄積を元にした回帰運動という牽引と一体となっている、という生殖進化の上記したような展開と、緊密に対応したものとみなすことができよう。

（3）二元的一元論を導く動的空間

以上の考察から、生命に死をもたらすことになった性は、生命の内に空間を生み出していく、という見方を提示することができる。この見方を生物学の諸知見に照らして根拠づけていくことは今後の課題となるが、4 章 2 でふれた、「内なる外」が一つの生物体を作り上げている、という知見が一つの重要な導きとなることを押さえておきたい。有性生殖誕生以降、進化の過程で達成された「生物の複雑さ」は、胃や腸などの内臓が典型となるような内的空間の生成と一体となっており、同様のことは個体の発生の水準にも認めることができる(cf.,団、1996、永田、2017)。

ここで、原子内部の空間に関する 4 章 3 の論考を思い起こそう。そこで明らかにしたように、物質の「最小単位」は内的空間ゼロを意味し、その空間が自己反発することで、新粒子がもたらされることになる。したがって、その空間は、諸物体が位置づく等質な「容れ物」のようなものとして素朴にその実在が想定されている空間のことではなく、牽引と反発の関係に従ってゼロから無限大までを自己展開していく、二極一体運動における内的空間・距離

[96] この「仕組み」の具体的内容に即した考察については、福田、2019 を参照。ここでは、高木の次の文章を引用しておきたい。「一般には、性とは自分とは異なる他者（ノン・セルフ Non-self）を認識する仕掛けであるとみなされている。〔確かに〕最終的には他者の認識装置になるとしても、性が誕生した時点では、性とは、『突然変異の有効性を素早く検証するための交配相手』として、自分の分身を一時的に他者であるかのようにしつらえる仕組みだったのではないだろうか。別の表現をすれば、性は自系接合〔＝遺伝的に均質な細胞集団内の接合〕を可能にするために、仮の他者もしくは偽の自分（シュード･セルフ Pseudo-self）を作りだす仕掛けとして生まれたのではないだろうか。」(高木、2014,p.136)

のことである。本稿はそれをヘーゲルのいう基盤と対応させることで、それを粒子内の否定運動と粒子とを全面的に媒介するものと解釈した。

生物における空間も同様に解釈することができる。すなわち、生命を進化させる運動は、それ自体としては浮かび上がることのない否定性の運動であり、空間に媒介され、ポジティブなものとの関係においてはじめて姿を現すことになる。換言するなら、生物内に生成された空間は、生命進化の‘で無い’の運動が‘で有る’と合体した姿である、ということになる。上で明らかにしたように、メスとオス、卵子と精子との固定的二分はこの意味での空間の生成であり、それは生殖運動の進化を体現している。同様に、内臓の生成も生命の進化を体現している、と理解できる。内臓はまさしく「空洞」であるがゆえに、メスとオスとの「間」以上に、生命進化における空間生成を我々に分かりやすく示してくれている[97]。

ところで、内臓の「空洞」は、媒介に展開することのない外的視点からみるなら、実在・等質空間の一部とみなされることになるだろう。この外的視点は、原子内の「空洞」も実在・等質空間の一部と、つまり単なる「空っぽ」とみなすことを可能にする。バクテリアに寿命を認めるのも、この視点であるだろう。

生物学は、一方でこうした外的視点に支えられながら、他方でそれをダイナミックに展開させる可能性を紡ぎだしてもいる、といえる。例えば、「陥入」を介して外的空間が内に入り込んで「内なる外」を形成する、ということが生物学では極めて重要な現象とみなされている[98]。既述のように、生殖運動における性の誕生は、運動内での空間の生成を意味するもの、と理解できる。この理解においては、空間は内から生成されるものとみなされている。ところが、「陥入」にみられるように、生物の空間は外から生成される、とみることもできるのである。そうであるならば、‘一’の内からの湧出と外からの到来との一体的生起は、空間生成に関しても認めることができる、ということになる。ヘーゲルと共に明らかにしたように、このような一体性は、外的視点の媒介への展開に他ならない。様々な知見に即した慎重な考察が必要であるのは上述した通りだが、生物学は、二元論を必然的に導く等質空間を支えとしている一方で、二元的一元論を導く動的空間を生命の内に読み取ってもいる、といえるのではないだろうか[99]。

（4）前方と後方の分離がもつ意味

生物学の知見に基づき明らかにした空間生成は、他者のまなざしの理解といった、通常心理的な水準に位置づけられる問題とも本質的に関係している。このことの理解が結論提示に向けて極めて重要となるので、本章 2 の考察に戻りながらこのことを明らかにしたい。

---

[97] 内的空間の生成がなされればなされるほど新粒子の発見がもたらされる、と解釈したのと同様に、生物の進化も内的空間の多層性と結びついている、と解釈できるかもしれない。この解釈の適否を検証することは、今後の重要な課題の一つである。

[98] 例えば、真核細胞内の球状に閉じられた膜構造である小胞について、「細胞の『内』にある小胞の『内』は、実は細胞の『外』だ」(村瀬、2001,p.243)、と村瀬が述べていることは、小胞の形成過程を踏まえた、外的空間の細胞内への入り込みを問題にしている。「小胞の‘内’は、いわゆる‘内なる外’なのである。すなわち、細胞という‘自己’の‘内部’に細胞‘外’の‘非自己’が入り込んだということになる」(村瀬、2000,p.200)。

[99] 村瀬が追求している、自己と非自己・生と死・内と外の「対立的共存」という論点は、この典型であるだろう。Cf.,村瀬、2000、村瀬、2001。

我々は、程度の差こそあれ、私が他人にどのようにみえるかを気にし、場合によってはそれがすべてに優先する関心事となる。発達論としていうなら、子どもはある発達段階から、私は見る者であると同時に見られる者でもあることを、すなわち、主体であると同時に客体でもあることを理解するようになる。この理解は、序章で述べた、「私」という言葉はこの私を指すと同時にいかなる私をも指す、という「私」の二重性の理解と対応しており、私の成立条件となっている。この条件は、何かを見ている私の目はその目自体を見ることができないように、主体としての私は、その私そのものを客体として見ることが決してできない、という制約を意味するものでもある。この制約は、4 章 2 で述べた、私の前方は私に見えるが、後方は見えない――既述のように、この後方には私の背中や私の顔も含まれる――という制約と密接に関連している。こうした制約ゆえに、私の目には見えない私が私にとって切実な問題となり、それを客体として捉える他者のまなざしが私にとって極めて重要な意味をもつことになる。私にとっての他者視点の成立は、前方と後方、主体としての私と客体としての私との分離と一体となった出来事である。距離・空間ゼロからの反発によって私の中で前方と後方とが分離し、そのことと一体的に、それまでは自他の不分離を基調として私に浸透していた他者視点は――本章 2 で述べた模倣はこの浸透を物語るものである――、他者のという明確な意味をもった視点として、私の中に成立することになる。

前方と後方との分離は、いかなる者においても生じている。そのため、我々の間で、いずれかの他者視点が特権的な地位をもつ、ということにはならず、いかなる者も他者視点を私の中で成立させ、他者視点をもつことをもって我々は結びつくことになる。すなわち、私の中の前方と後方の分離がもたらす距離・空間が、我々間の媒介となっているのである。

発達における他者視点の成立には、性の問題が密接に関わっていることにもふれておこう。いわゆる性的欲求は当初子どもの内に眠っており、発達のある段階以降、子どもは性に「目覚め」ていく。子どもにおける性と私の死とは、発達の途上で「誕生」する、という点で一致している。性が顕在化することと、他者特に異性のまなざしを介して自己を捉えるようになることとは、発達過程としては一体的な意味をもっているであろう。生命進化において、性は自と他を湧出させる「仕組み」として登場し、自は性を介して自になる、と上で論述した。このことと、子どもの発達における性の誕生および自のいわゆる再構成とは[100]、緊密な対応関係にある――事実に即した論証は今後の課題となるが――、とみてよいのでないだろうか。もしもそうだとするなら、生物学に基づく解明を援用して、子どもにおける性の誕生は、男女間の空間の生成を意味する、とみることができることになる。このようにみるならば、子どもにおける他者視点の成立は、前段落で明らかにしたところの、媒介としての空間生成という意味を一層強くもつことになるはずである。ここにも、‘一’の外からの到来と内からの湧出の一体性を認めることができる。なぜなら、子どもが問題にするのは、自らとは異なる性をもつ他者が放つまなざしであり、それが自の捉え直しと再構成を引き起こしていく一方で、媒介としての性は子どもにおいて潜在から顕在へと展開していくものである以上、空間生成による自他分離は内から生成する、ともみることができるからである。

[100] 子どもは性を自らの内に誕生させることで、自だけではなく、生をも再構成する、といえることに注意したい。

終章―結論と今後の課題―

5 章 3 と 4 における議論を序章の問題提起に戻って整理することで、本稿の結論を示すことにしよう。

本稿の出発点にあったのは、私の死の二重性――「意識としての私の死」と「死体としての私の死」と呼んで区別していたもの――の一致を確立しうるか否か、確立しうるとして、それはいかにしてか、という問いであった。連続と不連続とが一致するか否かという、学術諸領域を貫く問いと密接に関連するこの問いに対し、両者の一致を見出そうとする本稿の歩みは、いまだ多くの行程を残している。特に、物体としての死体(corps)を十分に理解するためには、ヘーゲルと共に、回帰運動の階層を積み重ねていかなければならない。こうした限界はあるものの、今後の論理展開も踏まえて、以下のことを指摘することができる。

本稿では、私の死の二重性の対立関係に緊密に対応するものとして、生物学の助けを借りながら、「ゼロ生成」と「差異の蓄積」という二極を浮き彫りにした。原点・出発点を意味するゼロは、生殖論に従うなら、差異の蓄積、換言すれば反発の運動を前提としたものである。生物学者は、性と死を表裏一体・同期的発生とみなしている。ゼロがテーゼであるとするなら、生物学は論理の円環運動が描くアンティテーゼを構成し、その立場から、差異の蓄積の裏面に死を読み込んでいることになる。生物学は、その研究対象に生殖というテーマをもつ強みにより、生物学者自身が自覚するか否かにかかわらず、死に関する二極の一致に、事実上ないし外的にはふれんばかりの地点に到達している、といえる[101]。

本稿では、生物学が通常研究対象とせず、自明のものとみなしている「外」の視点について考察することにより、生物学が到達しているその地点をさらに推し進めることを試みた。ヘーゲル論理学において、外的視点は媒介へと展開し、同一性の運動の内部における基盤を確立することになるわけだが、有性生殖の進化はこの論理展開と対応している、とみることができる。この対応を明らかにする際に重要なのが、ヘーゲルのいう基盤を空間と読み解くことにより、反対方向の二運動の一致を見て取ることである。本稿ではこの観点から、性が、メスとオスとの固定化が典型となる分離運動であると同時に、自他一致を引き起こす回帰運動でもあることを明らかにした。生殖運動は、自他の不連続をもたらす空間を基盤として、同一性の運動を展開していく、ということができる。

連綿と続く生命運動を研究対象としている生物学は、その本性上、科学研究のなかで同一性を極めて重視した学問である。生物学に限らないことだが、その同一性の中に死をいかに位置づけるかは、学術上の難題である。より一般的にいうなら、「生きた物」を扱う生物学にとって、死はその追求の手を逃れるものになりかねない、ということである[102]。死は、生

---

[101] 哲学は、生物学とは反対極から――本稿の用語でいうゼロの側から――この一致を語る可能性をもった学問であるはずだが、管見の限り、その殆どが生物学とはいわば独立した仕方で死について語っている、といえる。この可能性を追求することで、哲学で問題となる死が生物学で問題となる死と通底していることが示されるだけでなく、両学問の一体的運動が紡ぎだされていくはずである。

[102] 死という概念について、生物学辞典は、「生物が生命を失うこと」(巌佐他、2013,p.555)といったように、いわゆる消極的な仕方でしか定義できていない。「死の完全な定義は困難である」(石川他、2010,p.521)と記す辞典や、項目として登場させない辞典もある。Cf.,猪川、2012。このことからしても、死は生物学の概念としてはいまだ明確な位置づけを与えられていない、とみることができるであろう。生物学はしばしば、死を「寿命」とい

命運動に織り込まれた生殖とセットになって、生物学に位置を占めている。上述のように、この生殖こそが、死に関する二極一致に生物学をして接近せしめているのだが、逆にいうと、このおかげで、死は、生殖の裏面として、それに回収される仕方で生物学では専ら取り扱われることにもなっている、と考えられる。

本稿では、死を空間生成の問題として捉えることで、生物の様々な水準にみられる空間から死にアプローチする可能性を示した。空間が一元的な同一性の運動の基盤となっている、という点に定位するなら、死は生命運動に本質的・内的に組み込まれた、その運動の基盤として、生物学の前面に立てられうるはずである。

その際に問題となる空間は、距離ゼロから無限大までを牽引と反発により自己展開する空間である。空間というと、限界のない等質的な「容れ物」のようなものを思い起こしがちだが、発生的な視点なくしてそれは成立しえない。本稿では心的発達の側面から、空間が、前方と後方、あるいは主体としての私と客体としての私とが分離することと一体となって生成されることをみた。本稿では考察できていないが、同様のことは、発生の側面からも進化の側面からも認められうるはずである。「自と同一であるところの永続する他有」とヘーゲル自身が表現していたように、空間は、他が自と、差異性が同一性と、不連続が連続と一体となって生成され続ける運動である、といえる。空間については哲学的に議論すべきことが多いが[103]、ここでは、等質空間を素朴に実在化させることは、その空間の外にある視点を暗黙の内に想定することになり、その「外的視点」はさらなる「外的視点」を求めることになるため、悪無限に陥ることになる、という問題にだけふれておこう。このように、外的視点の媒介への展開は、空間の問題においても鋭く問われることになる。5 章でみたように、内と外との関係を重視する生物学においては、外の内への繰り込みと外の内からの湧出とが、生命運動の本質として捉えられている。だとするなら、そこにおいて、等質空間の問題は、外的視点の問題と共に、新たな次元に向けて乗り越えられていく準備が既に整えられている、とみることができるであろう。

死は、単なる無でも、単なる永続的な静止状態でもなく――こうした死観は等質空間を前提とした二元論的見方である――、空間を内的に生成していく一つの媒介運動である。本稿ではその運動の全体を見渡したわけではないが、今後の論理展開を先取りすることで、死を次の三段階の運動として定式化しておきたい。

第一に、一切の切断をもたない、連続性としての死がある。それはまさに、ヘーゲルのいう「無から無への運動」を意味する、永遠に続く否定としての死のこと、と捉えることができる。本稿の議論の出発点に置いた「意識としての私の死」がそれに相当するが、死を運動の展開と捉えうる段階に至った今や、それはむしろ、意識に織り込まれている否定性そのもの、あるいは意識が媒介となってその姿を垣間見せるもの、と捉えるべきであるだろう[104]。

う概念に置き換えて捉えている、といえる。寿命は、「life span」という英語にも明示されているように、生の範囲に収まる概念であるので、生物学に位置づきやすいのだろう。

[103] 哲学史における様々な空間論――そこには『エンチュクロペディー』内の「自然哲学」における空間論も含まれる――と本稿を突合せることは、今後の課題である。

[104] 「それではないところのものであり、それであるところのものではない」、というサルトルの定義を踏まえるなら、意識の‘でない’は‘である’とペアをなしたものであることになる。それに対し、連続性としての死

第二に、生命に切断を打ち込んでいく、不連続としての死がある。これは他者の死・複数の死であり、我々が目撃する死体が体現しているものであり、科学が対象としうるものである。これは第一の死の前提でもあり、その前提がその定立を呼び起こすことによって、否定運動と有、ネガとポジ、自と他、未来と過去、等々の間で激しい往復運動を引き起こすことになる。第三に、不連続を連続化する死がある。これは、第一を出発点に、第二を経由して、そのジンテーゼとして到達される死である。他と自、不連続と連続との永続的な交替としての空間にそれが対応しているのも、それが出発点に回帰した死であるからである。本稿で「死体としての私の死」と呼称し、私の死の不連続性とみなしてきたものは、実は単なるネガでもなければ、もちろん否定性そのものとしての単なるゼロでもなく、不連続的な連続、もしくは連続的な不連続として成立している、ジンテーゼに位置づけるべきものと理解することができる。

死を以上のような一つの回帰運動としてみるならば、私の死は経験できない、という時の「無い」は、空間は見ることも触ることもできない、という時の「無い」と同義である、ということになる。私が「無い」空間に支えられているとするなら、同じように、私は「無い」死にも支えられている。「無いもので有る」空間を有るとみなすならば、死も間違いなく、「無いもので有る」ものとして、有るのである。

以上の考察に基づくならば、科学と死との関係はどのように捉えられることになるだろうか。

見えないものを見えるものに、無限を有限に展開する使命をもつ科学は、死についても、それが見えるもの、有限である限りで己の対象となす。その限り、科学の射程に、私の死というテーマが入ってくることはない。だが、たとえ無視されていたとしても、私の死なくして、科学という営為は成立しえない。いかなる科学者も死を迎える以上、「私の死後もこの宇宙・世界は不変に続く」という前提に立ってのみ、科学者は「真理」を主張できるはずである。私の死後も本当に宇宙が不変か、私の死と共に宇宙も終わってしまわないかは、いかなる私も確認できない。重要なのは、そのために科学の基盤は曖昧だ、ということにはならず、むしろ、いかなる私も確認できないから、その基盤は形成される、といえることである。4 章 2 で述べたように、いかなる私においても前方と後方とが分離し、誰もが私の後方を他者に預けて、世界を形成している。後方は、私が他者によって客体として捉えられる側である。そして私の死は、どのような手段をもってしても他者によって客体として捉えられる他ない、典型的な後方である。いかなる私にとっても同然であるこのことが連鎖することで外的視点は成立し、それが内化されて形成された基盤すなわち空間が科学を支えている。同一性・連続性を保つ宇宙・世界・空間は、私の生命を切断する死がいかなる私にも必ず訪れるから成立する。同一は差異と、連続は不連続と一体となって、同一であり、連続なのである。

4 章で明らかにしたように、無限は有限の中に不断に湧出し、その湧出が科学の進展を可能にしている。科学を運動として表現するなら、無限から有限への離脱を使命とする科学は、無限という原点に絶えず回帰することで、己の使命を全うすることができる、ということになる。科学は、私の死を私から限りなく遠ざけることはできるとしても、私の死を私に

は、「それではないところのものではないところのものではない・・・」と永遠に続いていく、ヘーゲルが時間に与えた規定に等しいものである、と解釈することができるであろう。

経験させることは決してできない。私の死が科学から放逐されえないのは、それが科学の手の届かないところにあるからであり、科学が刻む不連続――物質の分割や病原の特定に典型となるような――の基盤であると共にその出発点でもあるところの連続であるからである。

以上のことから、私の死は、哲学のテーマの一つにとどまるものではなく、本質(Wesen)そのものとして、学問を根底から支えている、と理解できることになる。諸学問の基底には死の問題が潜んでおり、死それ自体が連続と不連続との結合体である。これが、序章の問題提起に対する、本稿の考察の範囲内で導くことのできる解答である。死における「全時間はただの一夜よりも長くは見えまい」という本稿冒頭の言葉は、「全時間」すなわち死の連続性と、「ただの一夜」すなわち死の不連続性という、相互排他的な二極が一体となったものが死である、というソクラテスの卓見を如実に示している、と解釈できる。このことは、無限と有限との一体が死である、と言い換えることも可能である。

最後に、本稿に残された多くの課題――それらには適宜言及してきたが――のうち、特に大きなものに限定して述べておきたい。

本稿は、科学研究の諸成果を借りながら、死の二項対立を一元化しうる運動を定式化した。一方はテーゼとして、原点・ゼロ・前方で展開する透明な連続性であるのに対し、他方はジンテーゼとして、出発=帰着点・‘一’・後方で成立する不連続的連続性である。ただし、この両者がいかに区別されて同一性の運動を形成しているかについては、考察がいまだ不十分である。この点を明確にしていくには、哲学史と科学史を背負った時間と空間というテーマとの格闘が必要となる。

また、繰り返し述べてきたように、本稿はヘーゲルが描く論理展開の途上にあり、「現実性(Wirklichkeit, effectivité)」にまで到達しておらず、いまだ否定性の強い影響圏のなかにいる。1 章で、「私の生は他者の死、他者の生は私の死」であることをみたが、一見単純で、喰い-喰われる関係を思い起こせば自明とも思えるこの命題にこそ、実は連続と不連続との一致が凝縮的に表現されている。この命題を成り立たせている視点を空間の問題として析出した本稿は、さらなる論理展開をヘーゲルと共に突き進むことで、考察が不十分にとどまった「他の死」に、すなわち、科学の正真正銘の守備範囲にあるものに、本格的にアプローチできるようになるはずである。

以上の問題が残されているため、死と生との統合を明らかにする、という課題も、本稿では結局のところ不十分にしか果せていない。生命全体を死と生の単なる交替運動として眺めることは、いかに両者の一致を追求していたとしても、等質空間を前提とした直接態の水準に立つ見方でしかない、ということは明らかにすることができた。だが、序章に示した、死と生を不連続とみなす態度と、両者を連続的に捉える態度との一致点を見極めるという課題については、特に前者――ほとんどの科学者が与しているであろうもの――からそれを果すことがほとんどできなかった。死そのものが連続と不連続との結合体であること、つまり死を空間生成として捉えるという本稿の結論は、いかなるものにも二極一致を認めること、換言すれば、いかなる有限にも無限を認めることを求めている。この要求に応じながら、生と死の交替を同一性の運動として明確かつ具体的に描いていかなければならないであろう。

引用文献

アクゼル，A. D.、『宇宙創造の一瞬をつくる―CERNと究極の加速器の挑戦―』（水谷淳訳）、早川書房、2011

団まりな、『生物の複雑さを読む―階層性の生物学―』、平凡社、1996

団まりな、『性と進化の秘密―思考する細胞たち―』、角川書店、2010

ドゥ・ブロイ，L.、『物質と光』（河野与一訳）、岩波書店、1972

エピクロス、『エピクロス―教説と手紙―』（出隆・岩崎允胤訳）、岩波書店、1959

Francis, R. C., *Epigenetics, How Environment Shapes Our Genes*, NORTON, New York, 2011 ／『エピジェネティクス 操られる遺伝子』（野中香方子訳）、ダイヤモンド社、2011

福田学、「サルトルと神経科学―『否定』を問題とする脳機能研究についての現象学的考察―」『学ぶと教えるの現象学研究』十五、pp. 71-104、2013

福田学、「模倣をめぐる科学と哲学の架け橋―ミラーニューロン説から後期メルロ=ポンティへ―」『理想』第 694 号、理想社、pp. 120-132、2015

福田学、「ヘーゲル『大論理学』から迫る「歴史としての生命」の基準=ゼロ―生物学における時空間次元の問題―」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第10巻第1号、pp. 77-105、2017

福田学、「『遺伝か環境か』論争から生物学的自他関係論へ―高木由臣『有性生殖論』にみる生命の‘内と外’の誕生―」『学ぶと教えるの現象学研究』十八、pp. 72-90、2019

Hegel, G. W. F., *Wissenschaft der Logik, Das Sein(1812)*, Meiner, Hamburg,1999a ／ *Science de la logique, Premier tome Premier livre, L'être, edition de 1812,*traduction présentation et notes par Labarrière, P.-J. et Jarczyk, G., Aubier Montaigne, Paris, 1972

Hegel, G. W. F., *Wissenschaft der Logik, Die Lehre vom Wesen(1813)*, Meiner, Hamburg, 1999b ／ *Science de la logique, Premier tome Deuxième livre, La doctrine de l'essence,* traduction présentation et notes par Labarrière, P.-J.et Jarczyk, G., Aubier Montaigne, Paris, 1976

Heidegger, M., *Être et Temps*, traduit par Vesin F., Gallimard, Paris, 1986 ／『存在と時間』（下）（細谷貞雄訳）、筑摩書房、1994

ホブソン，R. P.、『自閉症と心の発達―「心の理論」を越えて―』（木下孝司監訳）、学苑社、2000

Iacoboni, M., *Mirroring People, The Science of Empathy and How We Connect with Others*, Picador, New York, 2008 ／『ミラーニューロンの発見―「物まね細胞」が明かす驚きの脳科学―』（塩原道緒訳）、早川書房、2011

猪川倫好監修 三省堂編修所編、『新生物小事典』、三省堂、2012

石川統他編、『生物学辞典』、東京化学同人、2010

巌佐庸他編、『岩波生物学事典 第５版』、岩波書店、2013

キーナン，J. P.他、『うぬぼれる脳―「鏡のなかの顔」と自己意識―』（山下篤子訳）、日本放送出版協会、2006

駒井健太郎、「死と自殺の概念発達と定義」『生老病死の行動科学』第 10 号、pp. 157-164、2005

Merleau-Ponty, M., *Les relations avec autrui chez l'enfant*, Les cours de Sorbonne, Centre de Documentaiton Universitaire, Paris, 1962 ／「幼児の対人関係」『眼と精神』（滝浦静雄他訳）、みすず書房、1966

村瀬雅俊、『歴史としての生命―自己・非自己循環理論の構築―』、京都大学学術出版会、2000

村瀬雅俊、「こころの老化としての『分裂病』―創造性と破壊性の起源と進化―」『講座・生命　第五巻』（中村雄二郎・木村敏監修）、河合文化教育研究所、2001
永田和宏、『生命の内と外』、新潮社、2017
Nagy, M. H., The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, **73**, pp.3-27, 1948
仲野徹、『エピジェネティクス―新しい生命像を描く―』、岩波書店、2014
仲村照子、「子どもの死の概念」『発達心理学研究』第 **5** 巻第 **1** 号、pp. 61-71、1994
太田邦史、『自己変革する DNA』、みすず書房、2011
太田邦史、『エピゲノムと生命―DNA だけでない「遺伝」のしくみ―』、講談社、2013
Piaget, J. et Inhelder, B., *La psychologie de l'enfant,* PUF, Paris, 1966 ／『新しい児童心理学』（波多野完治他訳）、白水社、1969
ピンカー，S、『心の仕組み―人間関係にどう関わるか―』（下）（山下篤子訳）、日本放送出版協会、2003
プラトン、「ソクラテスの弁明」『ソクラテスの弁明・クリトン』（久保勉訳）、岩波書店、1964
プラトン、『パイドン―魂の不死について―』（岩田靖夫訳）、岩波書店、1998
リゾラッティ，G.・シニガリア，C.、『ミラーニューロン』（柴田裕之訳）、紀伊國屋書店、2009
Sartre, J.-P., Huis clos, *Théâtre*, Gallimard, Paris,1947 ／「出口なし」（伊吹武彦訳）『恭しき娼婦』、人文書院、1952
Sartre, J.-P., *L'être et le néant, Essai d'ontologie phénoménologique,* Gallimard, Paris,1976 ／『存在と無―現象学的存在論の試み―』（Ⅰ）（Ⅱ）（Ⅲ）（松浪信三郎訳）、人文書院、 Ⅰ. 1956, Ⅱ. 1958, Ⅲ. 1960
Singh, S., *Big Bang*, Harper Perennial, London, 2005 ／『宇宙創成』（上）（下）（青木薫訳）、新潮社、2009
荘子、『荘子Ⅰ』（森三樹三郎訳）、中央公論新社、2001
Speece, M. W. and Brent, S. B., Children's understanding of death: A review of three components of a death concept. *Child Development*, **55**, pp.1671-1686, 1984
高木由臣、『有性生殖論―「性」と「死」はなぜ生まれたのか―』、日本放送出版協会、2014
田沼靖一、『死の起源―遺伝子からの問いかけ―』、朝日新聞社、2001
田沼靖一、「死の遺伝子からみた未来」『死生学 3―ライフサイクルと死』（武川正吾・西平直編）、東京大学出版会、2008
辻本耐、「幼児期における死の概念の発達的変化」『大阪大学教育学年報』第 **15** 号、pp. 57-69、2010
ベラスケス=マノフ，M.、『寄生虫なき病』（赤根洋子訳）、文藝春秋、2014
ワロン，H.、『子どもの思考の起源』（下）（滝沢武久・岸田秀訳）、明治図書、1968
八杉龍一他編、『岩波生物学事典 第４版』、岩波書店、1996

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業、基盤研究（C）（課題番号：18K02360）の研究成果の一部である。